

教科書文庫
4
710
41-1941
2000090700

中學
維新圖畫の理論と實際
實際篇 二



広島大学図書
2000090700

教育振興會



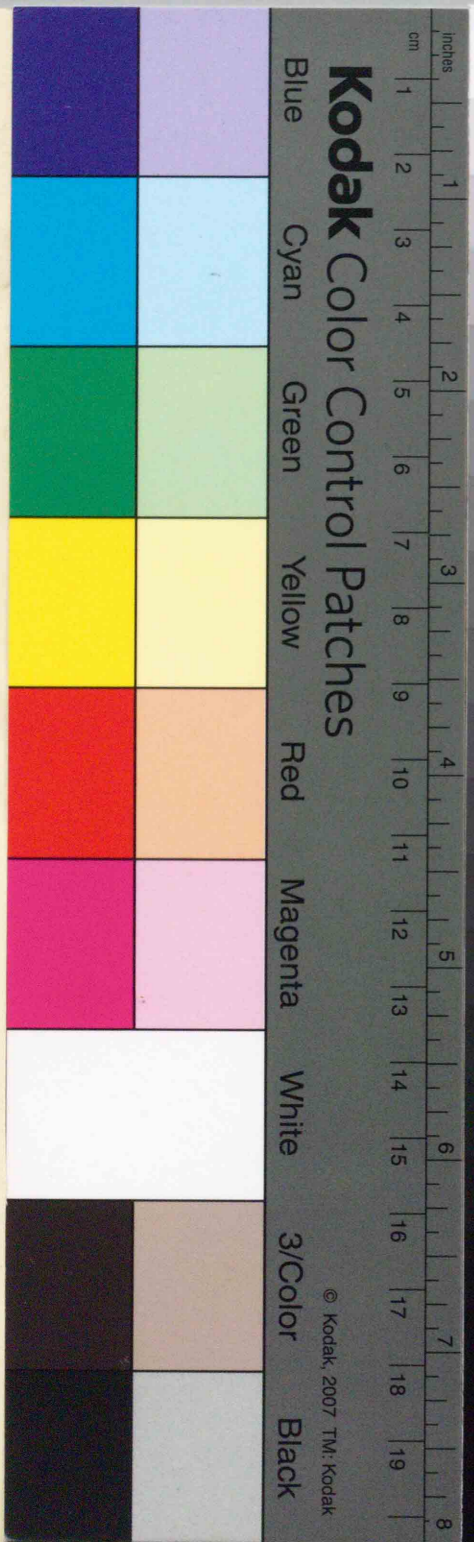
Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches



43417
教科書文庫

4
710
41-1941
20000 90700

© Kodak, 2007 TM: Kodak

中央図書館

資料室

4a

710

A816

教科書文庫

4

710

41-1941

2000090700

維新圖畫の理論と實際 實際篇



美育振興會

広島大学図書

2000090700



目次
卷二目次

1 チューリップ		寺内萬治郎
2 パレット		板倉賛治
3 静物の構圖 その一	説明用	
4 静物の構圖 その二	説明用	
5 硝子壺その他	参考用	田原輝夫
6 茶器		田原輝夫
7 インキ壘		赤城泰紆
8 アネモネ		松村巽
9 倒像	説明用	
10 水呑とレモン		板倉賛治
11 塗盆と果物	参考用	清水良雄
12 調子とその表現	説明用	
13 色圖	説明用	
14 裝飾文字		大智浩
15 ポスター		大智浩その他
16 建築物	説明用	
17 学校の玄関		石井柏亭
18 樹木のスケッチ	参考用	寺内萬治郎
19 樹木		中西利雄
20 昆蟲その他		小泉勝爾
21 菊 その一	参考用	
22 菊 その二		渡邊香涯
23 干魚		伊原宇三郎
24 繪葉書 その一		平塚運一
25 繪葉書 その二		關口謙輔
26 天守閣 その一	説明用	前川千帆
27 天守閣 その二	参考用	前川千帆
28 鯛と蛤		南 薫 造
29 霧吹法		
30 表紙		杉浦非水
31 文房具その他		鈴木豊次郎
教授指導の要項補遺		

1 チューリップ

要旨

鉢植のチューリップを写生せしめて鉛筆淡彩による表現の力を養ひ植物描寫の方法を會得練習せしめる。

説明と鑑賞

1. 鉢に植ゑたチューリップを鉛筆によつて寫生し彩色したもので、花は黄に鮮麗な眞紅、葉太り莖短く格好のよい釣合である。鉢は赤褐色の素焼製で花の紅に對してよい調和を保つてゐる。
2. 鉛筆で形を描きこれに陰影を施し、着色するといふ順序によつたものであるが、簡素な描法のうちに、葉と花と鉢の特徴を寫し、鉢の安定、チューリップの潑刺さが實によく現はれてゐる。
3. 花や葉の姿態、鉢の丸味等眞面目な觀察によつて正しく寫されてゐる。鉛筆の使ひ方は大膽で、觀察は緻密で、急所急所の調子に行届いた表現がなされ、着色は筆致を少くして最初から適確な決定的な色を出さうとしてゐる風が見える。
特に花の潤ひ、葉裏の表現は美事である。花の潤ひは最初に黄色を塗り次に紅色を濃く又淡く塗り黄色の暗い部分を畫いたもので、葉表は最初濃緑に塗つて、次にくつきりと白く残して置いた葉裏の部分をあつさり淡色で塗り、之に濃淡を施したもので何れも技巧の冴えが見える。
4. 光は左斜上から來て、右下に陰影をつくつてゐる。紙の白地をそのまま残して實物と影だけをかいてゐる。周囲のものを省略したので、このやうな描法は日本畫の表現では殆ど常識となつてゐる。

寺内萬治郎

5. 構圖は畫用紙の中央に殆どセンチメートルに扱はれたので極めて落つた安定感を與へてゐる。

6. 寺内萬治郎氏 洋畫家、帝展審査員。(詳細は巻末1頁)

指導

1. 鉢植のチューリップを教室内所々のモデル臺に置いて寫生せしめる。初め鉛筆を直線的に軽く使つて位置、構圖、各部の割合を決定し大體から細部へ下描の上十分訂正して更に仕上の線を引き陰影を描いてから着色する。
2. 鉢の口と底の透視、葉と花との姿態の特徴はよく觀察して表現する。着色は濁らぬやうに注意し、決定的な色調を可成長く出すやうに指導する。
3. バックとして特殊な表現をしないで、紙の地をそのまま残しておくこととする。

注意

1. 花は長く同一状態に置くことは出来ないから、その寫生はなるべく二週間に亘らぬ方がよい。生徒は寫生の技術にも相當馴れたことであるから本教材は一時間仕上げとする。
2. そのためには緻密な描法は出来ない。又花の背後に複雑な背景装置をしてこれを描かせる時間も無い。それで可成は背後から臺上へ白布をかけてそこに鉢を置くことにしたい。
3. チューリップが得られない場合は他の鉢植でも差支はない。シクラメン、ヒヤシンス等も適當な畫材である。
4. 本圖は寫生の參考圖ではあるが臨畫の手本としても好適である。

準備 鉢植の花其の他

参照 巻末1頁



1 チューリップ

寺内萬治郎

2 パレット

要旨

パレット及びその他の學用品を寫生せしめて畫面構成と水彩による表現の力を養ひ、且つ直方體に屬するものの描寫法を確實にする。

説明と鑑賞

- この圖は開いたパレットと水彩筆とを美的に組合せて描いたもので、線の方向に統一があり、物の配置に變化があつて自由に伸び伸びとした構圖をつくつてゐる。
- パレットを開いて繪具の排列を見せたところが、この繪の狙ひどころである。白い瑛瑯質の上に絞り出されたとりどりの繪具と、瑛瑯質を取り圍むラツカーの黒縁との調和は本當に美しい。更に畫面の單調を破るためには筆の穂と軸とが取り合はされた。
- 描法は鉛筆で輕妙な線描をし、其の上へ要約された筆法で水繪具を塗つてゐる。潑刺とした新鮮感と一種の氣品とが畫面に横溢した作品で、水彩畫の特徴が遺憾なく發揮されてゐる。
- 筆者板倉贊治氏は最も穩健妥當な方法で水彩畫を圖畫教育上の描法に採り入れて居られる。本圖にも流石にその正確な寫實力と瀟灑な表現力とが窺はれる。(板倉氏に就ては卷末2頁参照)
- ここに描かれたパレット及び筆は普通中學生用の品で、パレットは十二仕切のもの、筆は軸が抜き差し出来る式のものである。パレットに出してある繪具はレモンエロー、シトロシエロー、カドミウムエロー、ヴァーミリオン、ローズマダー、デーブマダー、ライトレッド、コバルトブリュー、ウルトラマリン、ブルシヤンブリュー、インデゴ、ビリデイヤンの十二色である。ビリデイヤンはかため

板倉贊治

たものはこのやうな色に見える。

指導

- 机上にパレット及び筆その他を生徒の好みによつて組合はさしめる。なるべく教科書の構圖を避けしめる。
- 其の特性、形狀、色彩、明暗等を觀察させながら、順次下描から本描に進んで線描を完成し、或は陰影をも描かせ着色させる。パレットの透視法は困難なものであるから十分注意させ訂正させ正しい形を取らせるやうに導く。彩色は可成筆数を少くする。
- 所謂特別なバックを描かせてもよし、或は本圖の如く紙の地色をそのままとしておいてもよい。但しその場合の影は餘り濃くない筈である。

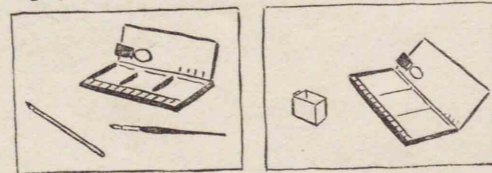
注意

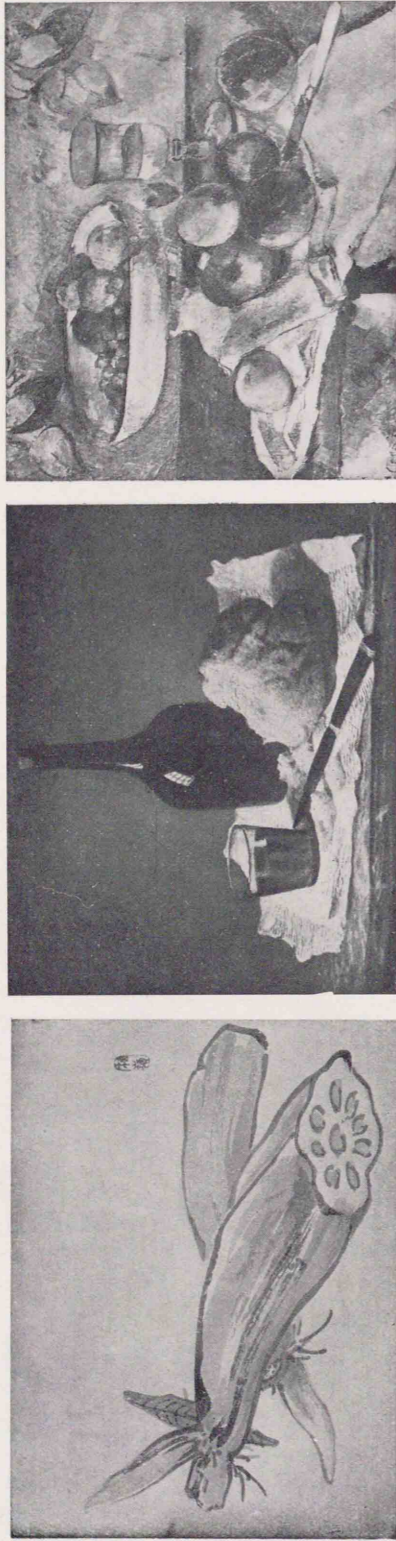
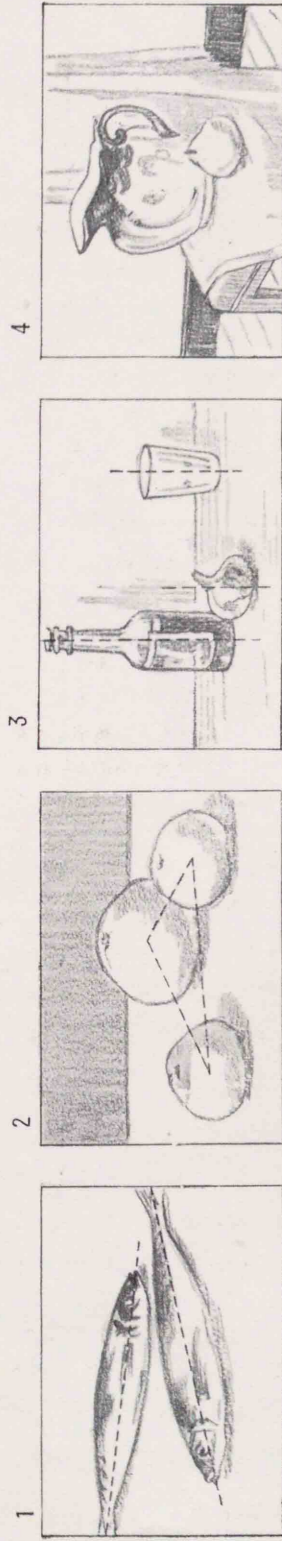
- 本教材は臨畫として取扱ふこともよい。生徒各自のパレット及び筆をモデルとして使用することに不便を感じる場合は殊にさうである。
- 紙の地の上にそのまま實物だけを描かせる場合は、實物を白紙又は白布の上に置く方がよい。
- 直方體の透視は誤のないやう特に指導上の注意を要する。
- パレットに替へるに他の文房具を教材としてもよい。

準備 パレットその他學用品

参照 卷末2頁

参考 下圖は各種の構圖





● 1 は二個の組合せて斜線の交叉形構圖である。
 2 は三個の組合せて所謂三角形構圖である。二個を接近させ一個を離したものは釣合上の用意である。
 3 は垂直線と水平線の交叉形構圖である。大小の

變化がある。4 は曲線的變化があり且質の異つたもの組合せて特異の例である。● 下段の三圖は基本的構圖を巧に應用したした實例である。

3 静物の構圖 その一 (説明用)

3 静物の構圖 その一 (説明用)

要旨

第四課に於て各種静物の構圖を指導するのであるが、その説明教材として略畫、寫眞、及び文字を載せたのが本課である。

本課では次課と聯絡をとり、變化、統一、釣合等の構圖上の知識を與へるのを眼目とする。

説明

1. 構圖とは畫面の組立のことで、モデルとなつた物體を如何に組立てるかといふことは繪畫上の大きな要件である。ここには次の課の準備として各種の實際を擧げてゐる。
2. 挿入の活字によつて説明してゐる通り1より4まで上段四種の圖は夫々の場合の構圖例である。次課四種の繪畫に對する構圖の骨法を説明したものである。
3. 下段の三圖は何れも東西大家の作品を示したもので、夫々1は幸野株嶺、2はシャルダン、3はセザンヌの筆によつて基本的構圖が其の静物畫に巧に利用された實例である。
4. 株嶺の作品は大小二本の蓮根をX形に交叉させた圖柄で、二個の物體のよき組合の實例である。水墨淡彩畫。この場合蓮根の大小に主副があり、交叉に親しみが現はれ、左右釣合が取れ、しかも單調を避けるための用意として大きい蓮根の左端に當つて根や葉を見せて變化をつけてゐる。
5. シャルダンの作品は、所謂ピラミッド構圖(三角形)で三個の主要物體の組合せ例である。中央に瓶を置き左右にコップとパンとを配し、畫面は中央に統一され左右に變化を見せて、安定の中に柔か味が現はれてゐる。尙こ

の圖は全體が茶がかつた滋味と黒の中に明るい卓上が描かれた落ち着いた作品である。

6. セザンヌの静物畫は著名であるが、これも其の一つ。多數の物體の組合せの例である。果物やナイフや皿やコップや布が無雜作にして卓上に置かれてゐるやうで、其の實非常な嚴格さで布置配列が研究されたものである。即ち畫面は非常に變化に富んでゐるが、卓上の布と果物とに視覺の中心があり、皿上の果物がこれとよき釣合を保つて畫面を統一させてゐる。テーブルラインが水平に置かれてゐるのはこの作品に安定と穩和との感を與へる様樣 明治初頭の四條派の大家である。元梅嶺と號した。竹内栖鳳の師。二五〇四—二五五五。シャルダン Chardin 第十八世紀のフランスの畫家。忠實な静物描寫は有名である。晩年はパステルを多く描いた。西紀一六九九—一七七九。セザンヌ Cezanne フランス後期印象派の畫家である。彼によつて静物畫の價値が高揚され尊重されるやうになつた。西紀一八三九—一九〇六。
7. 構圖の概念は引續き次課に於て述べることにするが、以上の實例について變化、統一、釣合等の構圖上の知識を與へた。美を構成する要素は變化と統一に歸し、畫面に變化統一あらしめるために、均衡(釣合)、均齊、平衡、律動等の手段が生ずるのである。その詳細は理論篇 32 頁美の要素に述べてある。

注意

1. 構圖の研究は同時に物の配置の研究である。どう置いたならばよいか寫生上に頗る必要なことである。
2. 構圖の好みは個性的なもので、其の作品には大抵配置上の癖があるから、可成種々の構圖に接せしめて構圖の見識を豊富にするやうに導く。

準備 各種構圖の作品
 参照 卷末 3 頁、理論篇 32 頁

4 静物の構圖 その二 (説明用)

要旨

第三課と聯絡をとり構圖の知識を授け、種々の場合の静物構圖を例示して構圖法を會得させる。説明教材であるが、寫生の参考として、又略畫練習に利用してもよい。

説明

1. 構圖とは普通の意味では繪畫に關してのみ考へられてゐるが、美學上では其の概念を更に擴大して、藝術的表現の要素を種々配合安排して作品に於ける所謂形式上の美的効果を大ならしめんとする手段にいはれる。
2. 構圖は所謂コンポジション Composition のことで繪畫、彫刻、圖案等に於ける形式上の組立である。即ち視覺に訴ふべき線、形、色、光等の排列をいふのである。
3. 繪畫に於てこれ等線、形、色、光の排列は頗る重要で、其の如何によつて繪畫の性質又は反映の度合に種々の相違が出来る。それ故古來構圖については東西の巨匠を初め幾多の畫家が色々に研究してゐる。そして一般的な定説乃至約束はこれを示してゐるが、さうかといつてどう構圖しなければならぬといふ規則はない。
4. 上段左の圖は二個の物體を組合せたもので斜線の交叉形構圖である。總じて細長い形のは緩やかな傾斜に組合すのがよいとされる。二尾の鱈は大きさと方向とに變化を見せ畫面を釣合あるスペースに分けてゐる。
5. 下段左は各異なる物體三個を組合せたもので垂直、水平兩線の交叉による構圖である。總じて水平の構圖は安定と平和と穩健を現は

し、垂直の構圖は端正、嚴肅、莊重の感あるものである。この圖は其の兩特徴を折衷して巧に變化と統一とを見せてゐる。

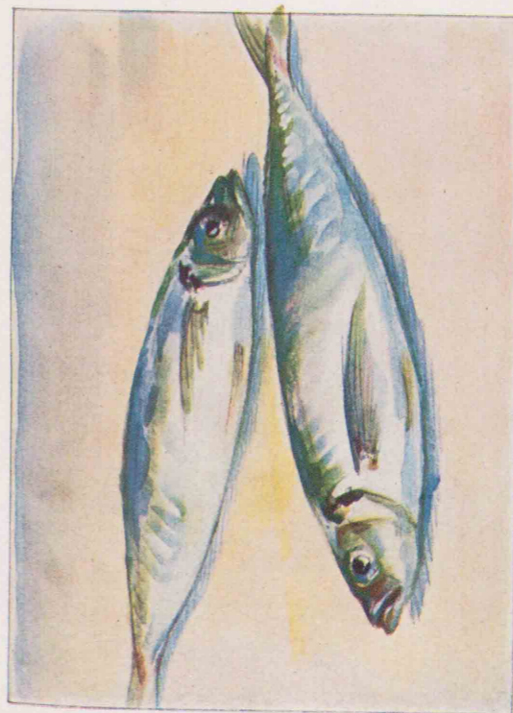
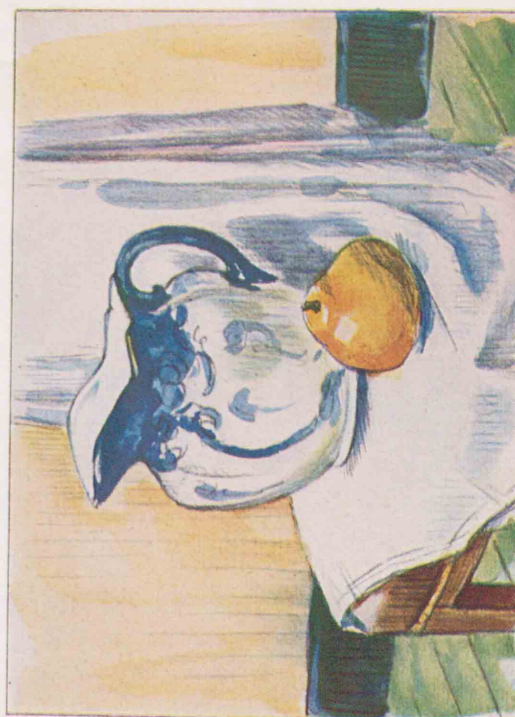
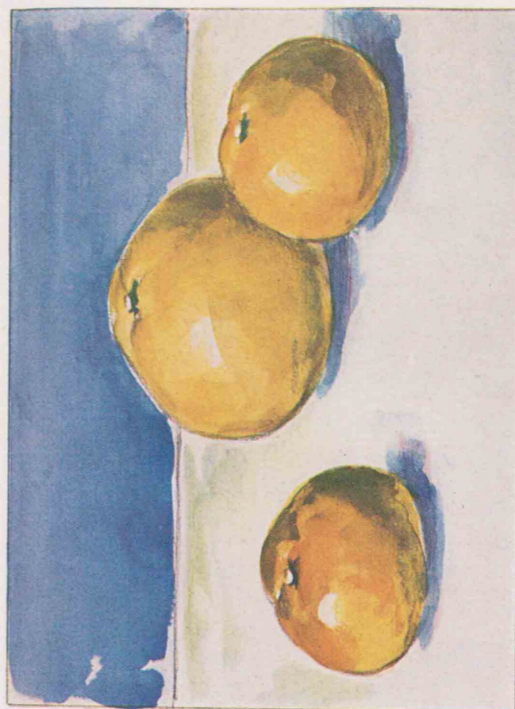
6. 上段右の圖は一個の夏蜜柑と、二個の蜜柑とを配した所謂三角形の構圖で、中央の大きい蜜柑が主となり其の兩側のものが副となつて安定な感じを見せてゐる。二個を接近させ一個を離れたことは釣合上の用意である。釣合は楨杆の方則によるので、この場合左の一個は右端の一個より量的に大きくなければならない。
7. 下段右の圖は質の異つたもの多數の組合せで、曲線的な變化ある構圖である。視覺の中心は白い陶器と果物、それを取り巻いて椅子や白布や床や壁が見えるが、それ等には少しも獨立的割據的のところがなく畫面はよく統一されてゐる。
8. 構圖は形の上のみでなく、色も調子も大切な要件である。

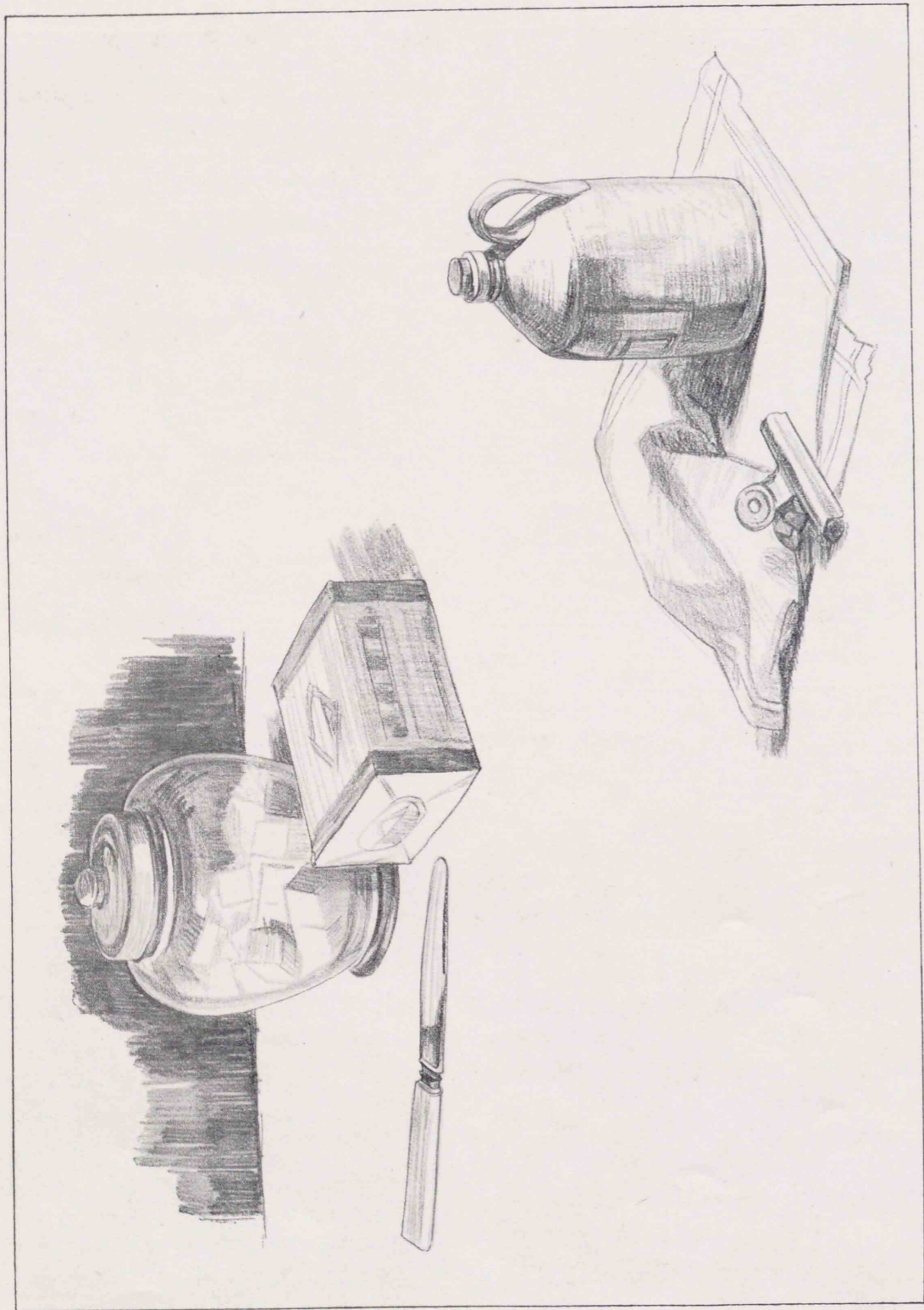
注意

1. 本課は説明教材であるが、略畫の手本としてたり又は短時間の臨畫に利用することには絶好な材料である。
2. この後生徒の寫生の場合には特に構圖に關心を持つやう指導する。
3. 理論篇第二篇第二章構圖の章には種々の場合を詳しく説明してゐる。参照されたい。
4. 實物を用意し實際に配置せしめて構圖の指導をする方がよい。

準備 卷末 3 頁、理論篇 32 頁

参照 各種の物體及び參考圖





5 硝子壺その他 (参考用)

5 硝子壺その他 (参考用)

田原輝夫

旨

次課「茶器」の寫生を指導する場合の参考畫として載せたもので、次頁と聯絡しつゝ構圖のとり方、質感の表現、曲面と平面の扱ひ方等について知らしめる。

説明と鑑賞

1. 靜物寫生に於ては題材の決定、其の組合せが最初の仕事である。題材を選ぶことは手近なものでもよく、特に用意したものでもよいが、二つ以上を寫生する場合にはその個々に形の上、色彩の上に變化あるものを選びたい。そして又何等か個々の間に聯絡ある方がよい形の大小の甚だしい變化は面白くない。
2. 構圖は自然で、しかも相互間相親しむやうに置きたい。大は背後に、小は前方に、畫面は變化があるがしかし十分纏つてゐなければいけない。圖示したものは兩圖共三角形を基礎とした穩健な構圖である。
3. 左圖は硝子製の砂糖壺と、角砂糖のはいつた紙函と、果物用のナイフとを組合せて寫生したもので、質の上からは透明體、不透明體、光澤あるもの又、硝子、紙、金屬、骨質で、形の上からは四角なもの圓いもの、細長いものとの畫き方を示したものである。
4. 壺は高さ十八程の球形のもので、蓋もまた硝子製、磨り硝子によつて壺の口に密着してゐる。中に見えるのは白い角砂糖である。角砂糖函はボール紙製でこれにペーパーを貼つたもの、果物ナイフは白い骨柄がついてゐる。
5. 硝子壺の背後に強いバツクを描いたのは、硝子の透明感を出すのに必要である。壺の曲面に反射する光線の描寫が、質感を説明してゐる。

これに比べると、紙函に當つた光は溫和で、その表現も硝子とは異なる。ナイフの光澤は其の基部に塗られた鉛筆の濃さによつて一層強調されてゐる。光線は左上から來てゐる。

6. 右圖はインキの親壺と、ハンカチーフとクリップの組合せである。質の上からは陶器と布帛と金屬、又は不透明體、半透明體、光澤あるもの、形の上からは圓錐の合成體と廣さのあるものと、小形のものとの畫き方を示したものである。
7. 壺は高さ 18 程位、茶色の陶製で、木栓がしてある。ハンカチーフは水色縁取りの麻製でクリップはニッケル鍍金の紙挟みである。光線は右上からこれ等の物體を照してゐる。バツクを省いた。
8. 兩圖共極めて手堅い着實な描き方であるから生徒の参考用として適當のものである。

注意

1. 本課は説明教材であるから必ずしも特別な時間を設けなくて、次課に附帶して其の描方について指導することとする。
2. 右頁の「茶器」其の他の寫生が出来上つたものには、短時間で之を臨畫せしめる。又これを参考として各自家庭に於てこれに類するものの壺等の寫生をさせることもよい。
3. 寫生材料として面白いものは硝子器ではコップ、ビーカー、藥瓶、ランプ、金魚鉢等があり、紙箱では菓子折、砂糖箱、商品の外装、又光澤あるものとしては小刀、ピンセット、自轉車ランプ、鏡其の他種々なものがある。布帛の描寫には風呂敷、風呂敷包、テーブル掛、窓掛など夫々好適の材料とならう。

準備 硝子器、紙函、陶器、金屬器、布帛其の他
參照 卷末 5 頁、理論篇 48 頁、55 頁、62 頁

6 茶器

要旨

盆、茶碗、急須等の茶器類を組合せ鉛筆によつて寫生せしめて、圓い球體のものの配置を研究させ、其の觀察力及び描寫力を養ふ。

説明と鑑賞

1. この圖は木の盆の上に一個の急須と二個の茶碗とを載せたもので、盆は松の刳盆、茶器は瀬戸焼の無地の淡色物である。盆も茶器も極めて普通のもので特殊の形状や品質のものではない。家庭の日用器具である。
2. 構圖の上からこれを見ると、盆の上の右によつたところに急須を置き左及び前に茶碗を添へて變化と釣合とを考へてゐる。二つの茶碗の中一個を伏せ、一個を起したのも平凡を避けて畫面に變化あらしめた所以である。
3. 急須の手が右に、口が左にといふ置方は極めて自然である。すべて我等の生活に關係ある器物はなるべく平常使用する自然の位置に置く方がよい。畫面に於ける繪畫の位置についても同じことで、高いところにあるものは畫用紙の上の方に、低いところにあるものは畫用紙の下部にといふのが普通である。この場合稍々下方に位置をとつたのもそのためである。
4. 光線は左上から來てゐる。従つて器物の内側は左に、外側は右に陰影が描かれてゐる。盆には強い光澤はないが、茶器には強い光澤があるからその表現に注意が拂はれ、特に陰影の描寫に於て其の質感を表はしてゐる。急須や茶碗の右側に急に強い陰の描かれてゐるのはその手法の一例と見るべきである。
5. 形は楕圓形が基礎になつてゐる。大小夫々の楕圓が極あて自然に描かれ些の不安もない

田原輝夫

鉛筆は4B程度の軟かいものを稍々太目に削つて使用してゐる。大膽に大まかに表現してゐるが、猶描線の強弱、細太、緩急について十分注意して描いてゐる。

6. 田原輝夫氏 現に東京高等師範學校助教授として學生を指導してゐられる。(詳細は巻末)

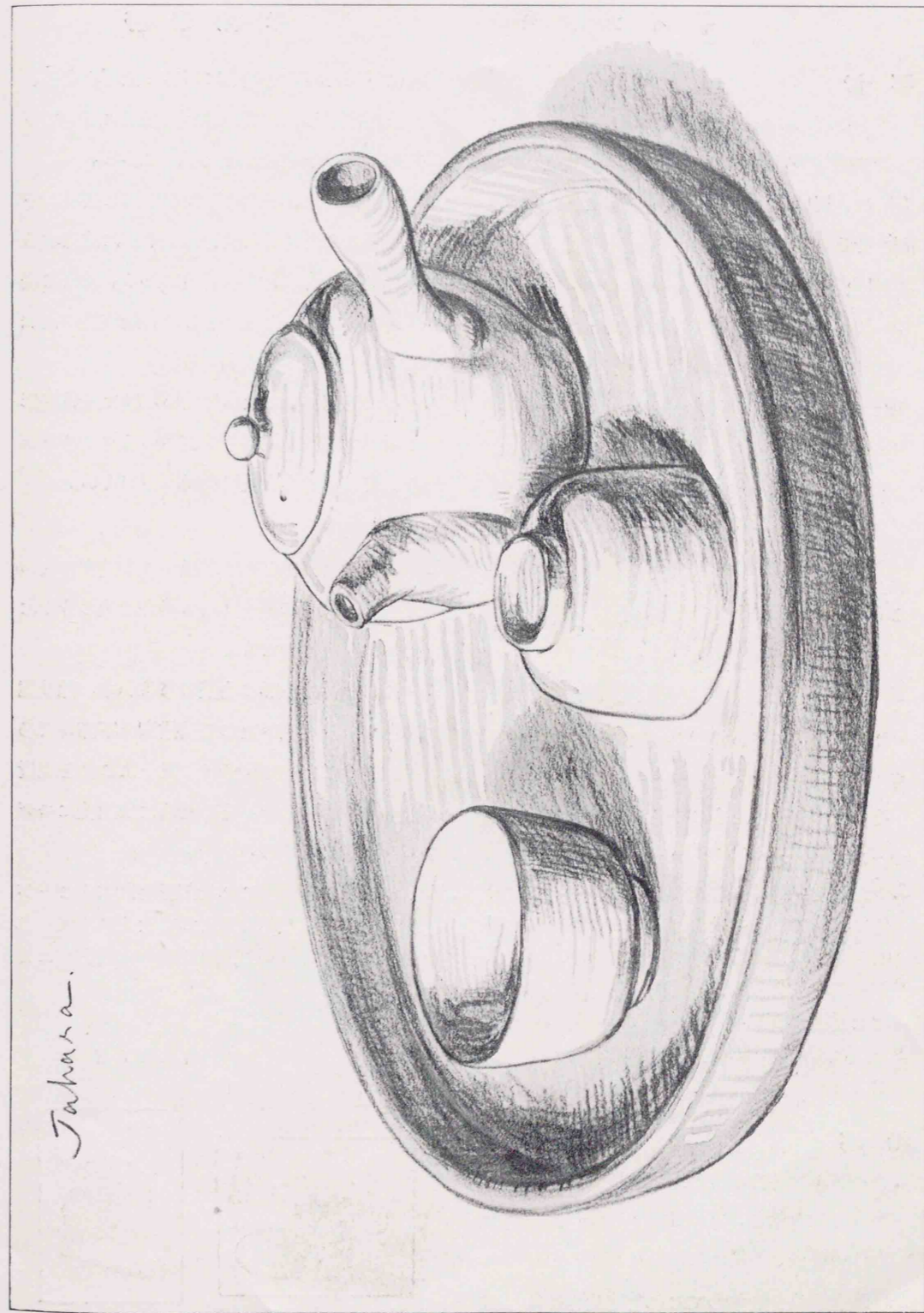
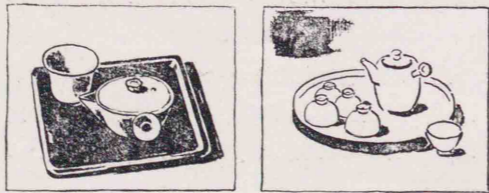
指導

1. 生徒數名に命じて家庭から茶器を持參せしめ、これを自由に配置させ、構圖の指導をして決定させる。
2. モデルの形状、大小、調子につき觀察させ畫用紙上の位置を決定し鉛筆を軽く用ひて形の大要を寫し、十分訂正して後線描をさせ陰影をつけさせる。
3. 描線は單調にならぬやう注意させる。折揚ある線を用ひ、且つ流麗な曲線を引くやうに指導する。陰影と器物夫々の調子につき十分觀察して表現させる。
4. 右については手本をよく觀察させ表現の手法を會得させることも必要である。

注意

1. 鉛筆は3B乃至4B位を用ひさせる。餘り軟いものは畫面を汚すので面白くない。鉛筆の用ひ方は自由でよいが、鉛筆を倒して三本の指でつまんで擦りつけるやうなことはよくない。(理論篇 48 頁参照)
2. 臨畫教材として扱つてもよい。
3. 鉛筆畫に於ては特に調子の表現に努力させたい。

準備 茶器其の他
参照 卷末 5 頁、理論篇 48 頁 62 頁
参考 下圖は各種の構圖例



7 インキ壺

要旨

インキ壺とインキの紙箱とスポイトとを寫生させて鉛筆淡彩による表現の力を養ひ、且つ角なもの、圓いものの構圖法、描寫法について練習させる。

説明と鑑賞

1. こゝに圖示した三個の物體は何れも萬年筆用インキの壺及び其の附屬物で、箱は壺を入れるために厚紙でつくつたもの、他はガラスとゴムとで出来てゐるスポイトである。インキを萬年筆に注入するに用ひる。
2. 構圖は所謂三角形構圖で、中央が紙箱、左はインキ壺、右はスポイトである。夫々に異なる物質ではあるが、よく構圖が研究されて、物と物との取合せもよく、配置上に變化あり統一あつて落ち着いた構圖である。
3. 紙の質、ガラスの質、ゴムの質がよく現はれてゐる。手堅い着實な描法である。
4. 鉛筆の線を強く濃く用ひて形状明暗を描きその上へ着色したものである。机にも色を塗つてゐるが、バツクは省略してゐる。
5. 光は左上斜前から來てをり陰影は其の反對側についてゐる。光の方向によつて面には明暗の變化が出来る。角なものの場合にはそれが確然としてゐるが、曲面の場合には其の變化は緩漫である。
6. 赤城泰舒氏 現代水彩畫壇に於ける第一人者である。(詳細は卷末 7 頁)

指導

1. モデルを各自の机の上に配置せしめて構圖上の研究をする。可成教科書の構圖例を避ける方がよい。
2. 配置の決定を俟つてこれを寫生させる。初

赤城泰舒

めは鉛筆を軽く直線的に用ひて位置を定め、大小を検討し、大體の形から細部に互つて下描をし、十分訂正した上本描に移る。

3. 本描の場合、不用の下描線は消し去り、下描に準じて決定的な線を引くやうに注意する
4. 形を描き陰影を添へ着色に移る。線には緩急強弱あることをも知らしめ、鉛筆畫の技法についても絶へず指導する。
5. 色は混濁させてはいけない。特に鉛筆淡彩の場合は鉛筆の技巧をも利用するのであるから、繪具はこれを透明に扱ふ方がよい。

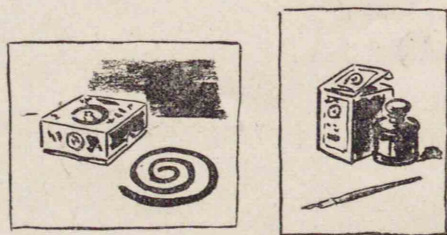
注意

1. 本教材は臨畫として取扱つても差支はない又適當な材料が得られない場合は他のものに替へて寫生させてもよい。
2. この教材は小形の物體であるから、餘り遠いところへ置いたのでは描寫上不都合である。従つて可成生徒各自の机上にこれを配置するやうにしたい。そのためには生徒にモデルを持參せしめる。
3. インキの紙箱はこれを剖展圖に描くことが出来る。時間の都合によつてはそれを考へさせることもよい。(正式には四年の投影圖に於て指導する。)

準備 インキ箱、インキ、スポイト其の他

参照 第一卷第一圖、第1圖、卷末 7 頁

参考 下圖は各種の構圖



要旨

壺に挿したアネモネを写生せしめて水彩による表現の力を養ひ、植物の特性と其の新鮮な雰囲気を描くやうに注意させる。

説明と鑑賞

1. 本圖は壺に挿したアネモネを描いたものである。アネモネは毛茛科の植物で春四、五月の頃美しい花を開く。
2. 卓上に特殊な形の陶器の壺を置き、それに二輪の花と一つの蕾と葉とを取り合はせて挿したものである。
3. これは無雑作に挿入した投入であるが、二輪の花と葉群のマツスに對して、蕾が一つ離れてよい釣合を保ち、テーブルラインが畫面のづつと下方に引かれたこともこの構圖に一層安定感を與へてゐる。
4. 色彩の取り合せは實に美しく、白い壁を背景にして赤と紫と桃色の花、緑の葉がくつきりと鮮かな形を見せ、壺の黄色と白色も花と葉により調和を保つてゐる。光線は右上から投じてゐる。
5. 特にこの作品中重要な役割を果してゐるのは卓子の色で壁と壺の白に對して明暗の對比をなし、花や葉のマツスに對して均衡を保ち畫面に變化と落ち着きを與へてゐる。
6. みづみづしい筆致で大きい調子に描き分けられ、輕妙なうちに寫形の確實さと、色感の鋭敏さが現はれ、潑刺新鮮なアネモネの感じがよく窺はれる。
7. 松村 巽氏 洋畫家、靜物を得意とされる。文展無鑑査。(詳細は巻末 8 頁)

指導

1. 教室内適當なところ數箇所にモデルを配置しこれを寫生せしめる。モデルは可成一方より見せるやうに裝置して背後へは壁、布等を置く。
2. 形態、色彩、明暗、花の特性等をよく觀察させ鉛筆で軽く下描をさせて着色に移る。總じて花のやうな題材は下描の鉛筆を硬く濃く細密に使つては質感が現れにくいものである。
3. 花の描方、葉の表現等は、本圖を参考にして可成簡単な筆法で要領を得るやうに力めしめる。
4. パレットや筆を度々洗つて發色を新鮮にし畫面を濁さぬやう注意せしめる。

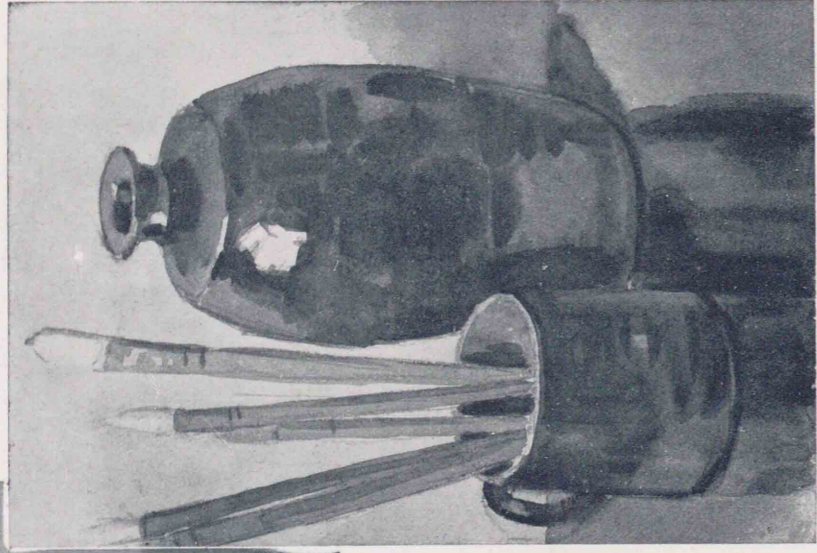
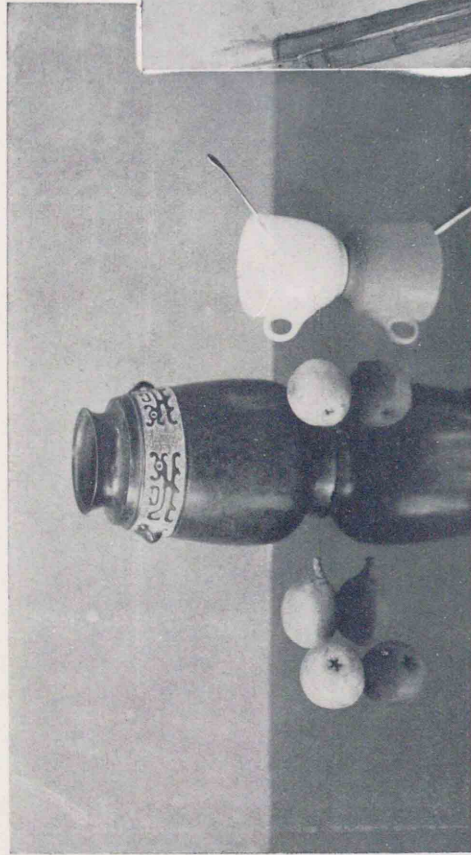
注意

1. アネモネが得られない場合は他の花を以てこれに替へる。壺の形や色は必ずしも一定でなくてもよい。卓子、バツク、壺等の色の配合は題材決定の際十分の注意を要する。
2. 本圖は臨畫教材としても絶好な資料である水彩畫の正常描法による着實な作品で、しかも調子が大きく扱はれ、適當な省筆が行はれて生徒の技術指導には誠によい範畫である。これを臨畫する場合には構圖、筆法、色調等すべてこれを描寫するやうに指導する。
3. 寫生の場合の花の挿し方はそれ自身一種の美術的な作業である。従つて場合によつては生徒にこれを試みさせ、如何に挿せば美的であるかを指導することも無意義ではない。

準備 アネモネ其の他

参照 巻末 8 頁





●この図は光澤あるものの有様を表現して、その背景に於て物との親みを表して、これと同一色に映るものがある。この有様は物を賑かに見せ、又鮮やかに置かれたか、かへて暗く、その背景に於て物との親みを表して、これと同一色に映るものがある。この有様は物を賑かに見せ、又鮮やかに置かれたか、かへて暗く、その背景に於て物との親みを表して、これと同一色に映るものがある。

●この図は光澤あるものの有様を表現して、その背景に於て物との親みを表して、これと同一色に映るものがある。この有様は物を賑かに見せ、又鮮やかに置かれたか、かへて暗く、その背景に於て物との親みを表して、これと同一色に映るものがある。



9 倒像 (説明用)

9 倒像 (説明用)

要旨

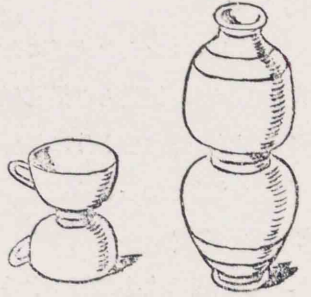
墨一色の構成による静物の構圖について調子と倒像との基礎的知識を與へようとするのがこの課の眼目である。

説明

1. 調子はトーン Tone ともいふ。もと音楽用語であつたが、それが繪畫上に轉用せられたもので、色や明暗が我等の目に淡く感ずるか或は濃く感ずるかの度合をいふやうになつた。淡く感ずる時は調子が弱いといひ、濃く感ずる時は調子が強いといふ。調子を決定すべき主なる條件に三つあり、一は色調それ自身、二は遠近、三は光である。(理論篇64頁参照)
2. 倒像とは光澤ある平面上に置いた物體が其の平面に映する像のことで、光學上ではこれを虚像又は映像といふ。光線が之を通過せざる物體の表面に於て反射作用を起す場合に虚像が出来る。鏡や靜止せる水面に於ては極めて明瞭である。もともと虚像は實體と同體積を示すものであるが、其の平面が平滑でない場合には虚像の大きさや形とに變化を生ずる。
3. 本圖上段の寫眞は青銅花瓶とコーヒー茶碗と、枇杷とを配した静物の構圖で明暗と倒像の調子が窺はれる。個々の物體に夫々の調子があつて立體感を出してゐるが、畫面を大きい調子で分けてみると、その強さは、1 花瓶及び其の倒像、2 枇杷の倒像、3 卓上の面、4 壁、5 茶碗の倒像、6 枇杷、7 コーヒー茶碗の順となる。
4. 倒像の形は2に述べたやうに實體と同體積を示すものであるが、其の位置は實體の眞下へ映る。描寫上の便法としては、同形のものを二つを互に底合せに重ねたと假定して描けばよい。

5. 實體と倒像

この調子は一般に倒像の方が強い(暗い)ものである。それは實體を置く卓上なり



鏡面なりの色が倒像に作用するからである。即ちこの圖について考へれば、枇杷+卓子の色>枇杷といふことになる。

6. 下段の圖は白いコップと黄色のレモンと黒い卓子と、緑のバツクと、それに青い線を配した静物畫(第10圖)を寫眞にして黒一色による調子を示したものである。これによれば黄と白とは調子上に接近して居り、黒と青も同様であることがわかる。鉛筆畫や木炭畫は單色の調子を以て物體を表現した繪である。倒像は暗い面に明るい形を映した例。

7. 右の圖は黒釉をかけた光澤ある陶器の壺に筆と水呑とを配したもの、モデル臺も壁も明るく、その中央に黒い器物を置いた。光澤ある面の調子上の變化がよく分る。倒像は明るい面に暗い形を映した例である。

注意

1. 本教材は説明用のもので、これが取扱ひは一時間を充て、もし又隨時取扱つてもよい。さし當り次課水呑とレモンの豫備教材となるものである。
2. 種々の器物果物等を用意して調子と倒像を實驗する方がよい。

準備 花瓶、コップ、果物、鏡其の他

参照 卷末9頁、理論篇64頁

10 水呑とレモン

要旨

水呑とレモンとを水彩によつて寫生せしめて配色と調子と倒像との描寫を練習させる。特に色と調子の關係を十分に理解せしめ、大きな調子の構成法を知らせる。

説明と鑑賞

1. この圖は大小二個の水呑と、一個のレモンとを組合せたもので大きな調子の構成によつた快適な水彩畫である。水呑は琺瑯式の鐵器、レモンは芸香科に屬する果實である。
2. 構圖の上から見ると畫面の左寄りに水呑とレモンを置き、これに對して右端に小形の水呑を配してうまく釣合をとつて畫面をまとめてゐるが、テーブルラインの位置や水呑とレモンの置方に變化があつて少しも窮屈になつてゐない。
3. この繪は配色に大きな特色がある。バツクの緑色に對してオレンジ色のレモンと水呑の白、それにバツクの緑を映した黒いテーブル。主要な色はこの四色であるが、色感が極めて新鮮である。緑や黄や白といふ色は鮮麗であるために、その配色は卑俗になり易いが、この場合調子の強い黒の使用は畫面を引締めて聊かも生硬な感じが無い。殊に水呑の縁や手に群青を用ひたのも頗る効果的である。蓋し十分な考慮のもとになされたよき配色の實例である。倒像の色調も描法もよく畫面の調和を助けてゐる。
4. 調子上からいへば強く視覺に訴へるものは白い二つのマツスである。テーブルの黒とバツクの緑が畫面を暗くしてゐる中に眞白い水呑の配置は實に効果的である。その中間の明度を以て黄色のレモンがあり、テーブルの黒

板倉 贊治

と釣合はせるためには群青の縁が見える。すべては計畫されたよさである。

5. 描法は齒切れのよい筆觸で大きな調子を描きわけ、細部にはこだはらないが、急所急所をおさへて要領を得てをり、質感も十分現れてゐる。生徒の技術指導上絶好の資料である。作者板倉贊治氏に就ては巻末2頁参照。

指導

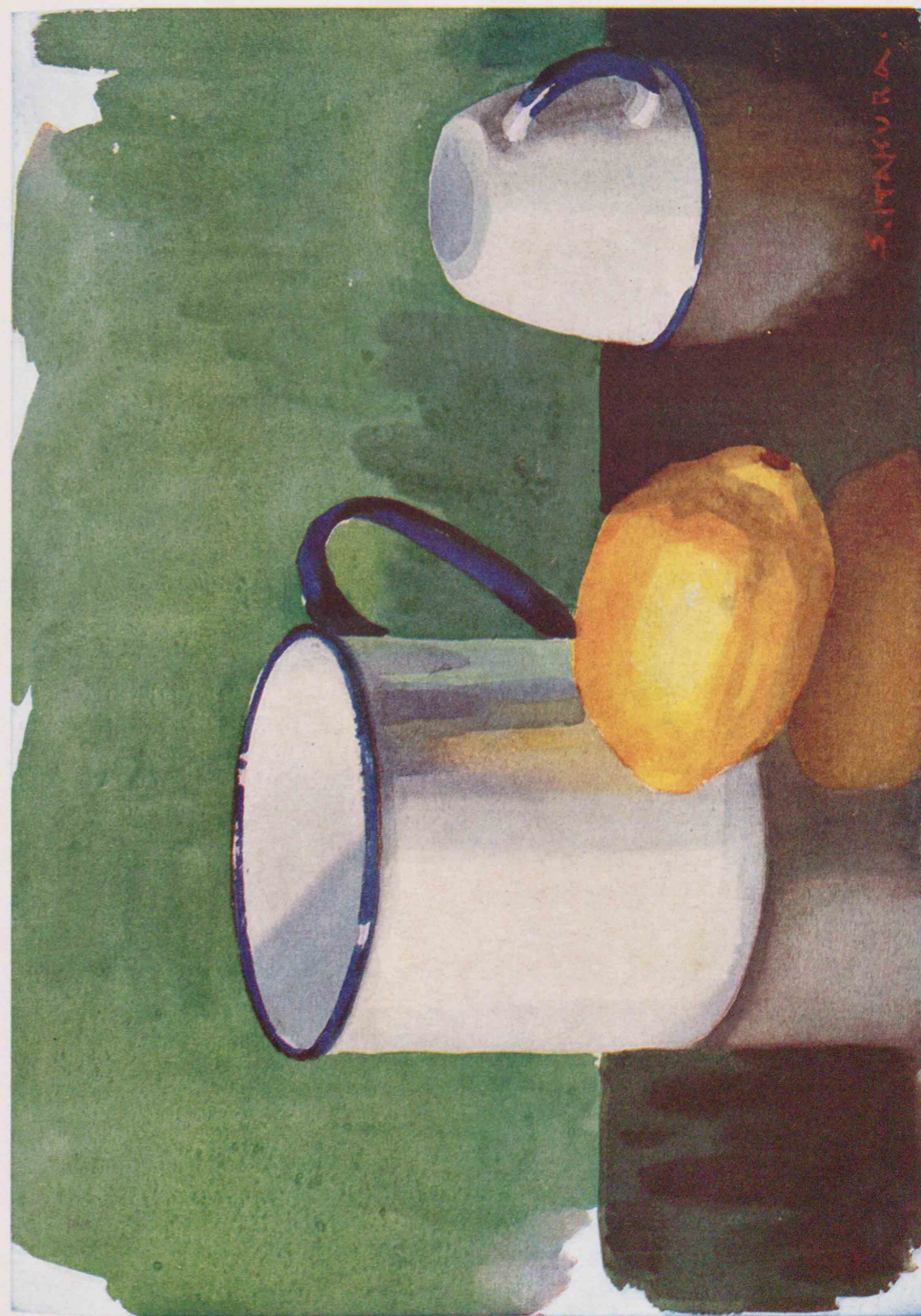
1. 卓上に水呑とレモンを配し適當な距離から寫生させる。その組合せは生徒に考へさせるのがよい。本圖に倣つてバツクも濃いものとする。
2. 形狀、色彩、明暗及び質感についてよく觀察させ、畫面に於ける位置の決定及び下描の上着色させる。
3. 着彩の順序は生徒夫々の習慣もあるが、暗い畫面に明るい物體を現はす場合は、先づ周圍の暗部を塗り例へば白い水呑の形だけ紙の地を残して大きい二つの調子に分けてみるこゝが効果的である。
4. 倒像を描くには先づ卓上に塗つた繪具の乾かぬうちに倒像自身の色を接いでゆくのがよい。さうすれば像が硬くならない。

注意

1. 水呑やレモンが得られない場合は、茶碗や夏蜜柑其の他のものと替へてもよい。
2. 本圖は水彩畫の描き方を指導するのに絶好の資料であるから、これを臨畫させるのも効果的な取扱である。

準備 水呑、レモン其の他

参照 巻末9頁



11 塗盆と果物 (参考用)

清水良雄

要旨

水彩によつて塗盆、林檎、枇杷等を寫生させ、構圖、配色、倒像、光澤等表現上の諸條件を総合的に練習させようとするのが目的である。

説明と鑑賞

1. 本圖は黒い塗盆の上に林檎と枇杷を載せ、卓布の上の枇杷と取合せて描いたもので、今までの圖のうちでは最も複雑な構圖である。盆の外にこぼれた三粒の枇杷は畫面に變化あらしめる重要な役割をつとめてゐる。かなり強い光線が左上方から來てゐる。
2. 黒い盆と、暖色の果物の二系統に色彩を分けることが出来る。黒と赤との二色の配合は暖かく、しかもはつきりした感じを與へる。
3. 倒像は前課で習つたことの應用である。倒像によつて盆面が複雑に構成されてゐると共に盆面の光澤をもそれによつて説明してゐる。光澤のない面には像は映らないからである。
4. 光澤ある面の表現については一般的に倒像を描くことと、其の面には反射があるから色を固有色より淡く、或は白く現はすことである。殊に光線の直射を受けた部分には強いハイライトを入れる。明るい面の倒像はづつと暗く描く。
5. 鉛筆で決定的な線を引きこれに鮮かな設色が施されてゐる。構圖が込み入つてゐる関係もあつて表現上に細かい筆觸をも用ひてゐる。前課の水呑と果物が大きい筆致表現であるのに對して、面白い對照である。
6. 卓布の描方、皺の扱ひにも要を得、黒盆と果物との取り合せはかがやくばかりの美しさ

である。清水良雄氏は優れた技巧の持主で、其の作品は實に巧である。(清水氏に就て詳細は卷末 10 頁、卷一 18 頁)

7. ここに描かれた枇杷は小粒の種類、林檎はやや長形のものである。(詳細は卷末 10 参照)

指導

1. 教室内數箇所モデル臺を置き、これに盆と果物を配置する。モデル臺の上には白い布をかける。
2. 形狀、色調、明暗、物體の特性等をよく觀察し、畫面上に位置と大きさを定め鉛筆を軽く使つて下描をし、場合によつては輪廓を線描して着色する。
3. 色は濁らぬやうに、細かい調子にこだはらぬやうに、筆觸が硬化せぬやうに注意して彩色する。
4. 光澤面及びその倒像は特によく觀察して果物と比較し色調明暗を誤らぬやうに導く。

注意

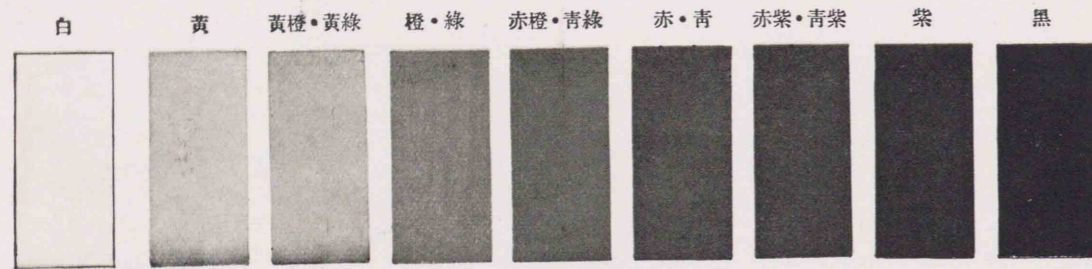
1. 林檎や枇杷が得られない場合は他の果物又は野菜と替へ、盆は黒盆でなくてもよからう。この頃は巴旦杏や茄子、胡瓜、西瓜、南瓜等の出盛りである。
2. 臨畫として扱ふ場合は一般生徒の描寫力から見て多少新教材と思はれる。
3. 寫生二時間に互る際には同一モデルの保存は困難であるから第一時に果物を描き第二時に盆を仕上げるといふ方法も止むを得ない。
4. 畫面上の署名の位置、大きさも適當の機會を見て指導しておく方がよい。

準備 布、盆、果物其他

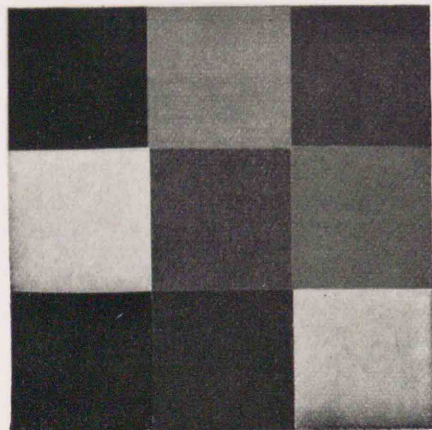
参照 卷末 10 頁



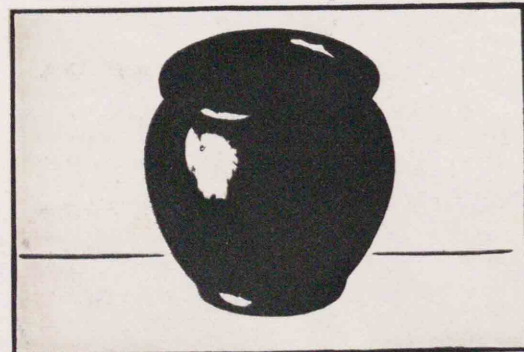
色相の調子（明暗の九階段）



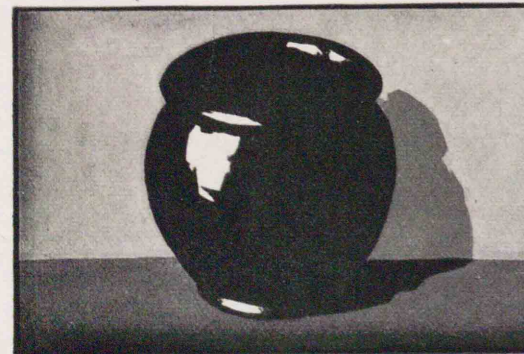
格子の組立



二階段

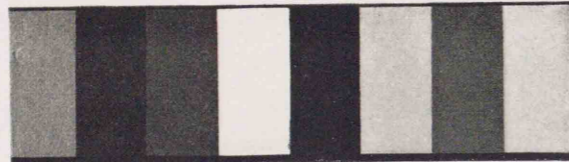


四階段

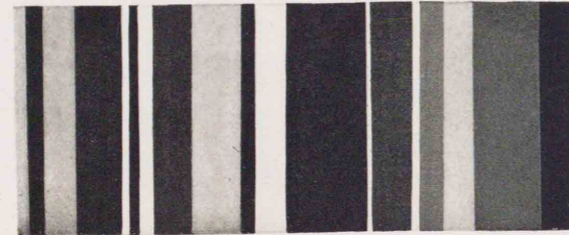


明暗の調和と對比の練習

同一分量による帯の組立



不等分量による帯の組立



明暗の調子による表現

三階段



五階段



12 調子とその表現（説明用）

要旨

物象の色の調子を観察しこれを正しく表現する能力を持つことは極めて必要であるから、特に次課と對向せしめてこれを説明し、單色によるこれが表現を練習せしめようとするのが本課の眼目である。

説明と鑑賞

1. 音に高低緩急あることを調子といふが如く色に濃淡明暗あることを又調子といふ。音の美的な諧調によつて音楽が生じ、色の調子のよき組合せによつて繪畫は生れる。
2. 同じ色相であつても明るくも暗くもなり、又異なる色相に於ても自ら濃淡の差がある。これが調子 Tone である。この言葉は又繪畫の色に見られ華やかさ、強さ、効果等にも用ひられる。暖かい調子、寒い調子、硬い調子などいふのはこれである。
3. 調子の研究は常に單色の濃淡が用ひられる圖示したものは黒一色の濃淡によつて調子に關する色々の場合を説明したものである。
4. 上段は各色相を示したものである。即ち白、黄、黄橙（黄緑）、橙（緑）、赤橙（青緑）、赤（青）、赤紫（青紫）、紫、黒の十四色が九階段の明暗となる。最も明るいのは白、最も暗いのは黒で、その中間に於ける各色相の明暗順位は以上の通りである。
5. 中段は明暗の調和と對比を示したものである。左端は九階段の調子による格子の組立でこれは鉛筆によつて白から黒に至る九階段の調子を書き別ける表現練習に兼ねて、各九個の楕が互に調和するやうに明暗を配置する基

本的な感覺及び構成練習の見本である。

6. 中段右は二條の帯に明暗の對比を試みたもので、上は同一分量による各調子の組立、下は不等分量による各調子の組立である。明暗のよき組合せによれば假令單色のみと雖も快適な縞を得る。
7. 下段は器物を同一色で表現した實例である。左は黑白二調子によつて描いた甕、右はこれを三調子によつて描いたもの、左下は四調子、右下は五調子によつて表現したものである。
8. 表現技術の要素としては形と色と調子とを認識し描寫することである。しかし色はなくとも形と調子だけでも繪は出来る。木炭畫、鉛筆畫、墨繪の日本畫等はこれである。

指導

1. 鉛筆による調子の表現は極めて必要であるから、畫用紙上に調子表現の練習をさせる。鉛筆は4B乃至6B、なるべく消ゴムを使はぬこと。すべての生徒に少くとも九階段は表現させたい。進んで三十階段位までの調子をかきやうにしたいものである。
2. 格子、帯に於ける調子の表現、器物の寫生等は墨又は繪具を用ひて練習せしめる。繪具を用ひた場合は同一色の濃淡とする。

注意

1. 調子に對する認識と表現力との不足は現今の生徒の通弊である。特に力を入れて指導したい。
2. 寫眞、墨繪、一色畫等の實例につき調子の重要な所以を知らせる。

準備 調子に關する説明圖及び範畫

參照 卷末11頁、理論篇48頁、64頁

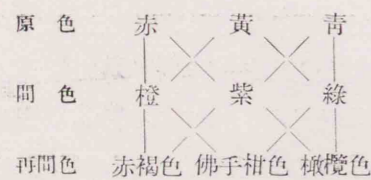
13 色 圖 (説明用)

要 旨

本圖は色彩に関する説明圖である。これによつて色彩一般の知識と配色上の基礎的理解を與へようとする。即ち知識的の方面としては原色、間色、再間色、色相、色度、明度、餘色、色の名稱等、配色上の方面としては對比、調和、色の寒暖、色彩に伴ふ感情等を知らしめ、延いては人生生活に對する色彩の重要性について自覺せしめたい。

説 明

1. 原色は光學上では赤、緑、青を指し、繪具の上からは赤、黄、青の三色をいふ。
2. 三原色が二つづゝ互に混合し合ふと三間色が出来ゑる。又間色を二つづゝ混合すると再間色三種を得る。



左上の色環中三原色三間色は明瞭にこれを求めることが出来る。

3. 色相とは其の色固有の色素の發現を指す言葉。赤、青、紫等と呼ぶのがそれである。
4. 色度とは一つの色相に於ける色の強弱である。色相の性質を十分發揮したのを色度が強いといひ淡いか、暗いかを色度が弱いといふ。
5. 明度とは色光が眼に反映する分量の多寡をいふ。白は光度最大で、黒は最小、各色相はその間に排列される。
6. 光學上では混和して白光となる二つの色光を互に餘色又は補色といふ。色環圖では互に

向き合つた色例へば赤と綠、黄と紫等がそれである。

7. 色の名稱は實に多數に上つてゐるが世界各國一定してゐない。基本的の赤、黄、青、橙、綠、紫の用語を基準として明暗濃淡又は原色の含有量によつて呼べば分り易い。

8. 對比とは二色が相對する時に互に其の色相に變化を感じさせる現象をいふ。一般的に次の現象がある。

濃淡ある同一色 濃淡の差が一層強く感じられる
異なる色相の對比 互に其の餘色を呼んで固有の色に變化を生ずる。

上圖右は色の對比の例を示したもので、同じ色でも周圍との對比關係によつて、其の明度と色相に變化を與へることが分る。

9. 色の調和は人の感情によつて定まるものであるが多數の經驗を綜合すると次のやうな規範が見出される。

同色及び類似色調 同じ色の濃淡及び似寄りの色の配色には上品で、穩健、優美な調和がある。

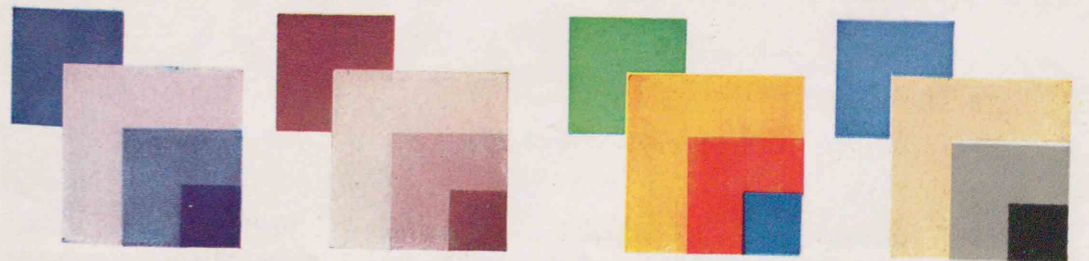
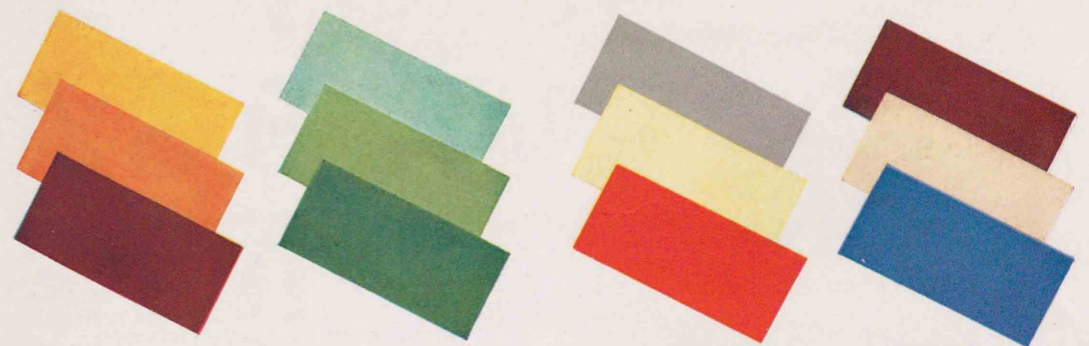
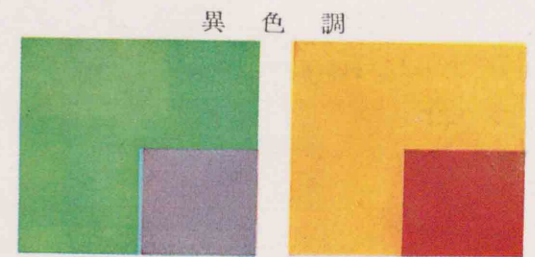
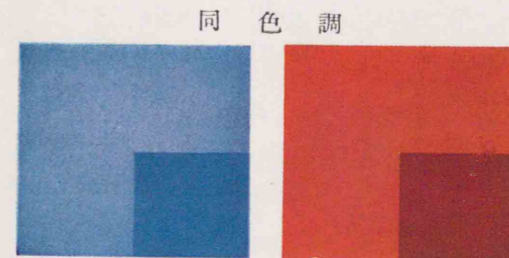
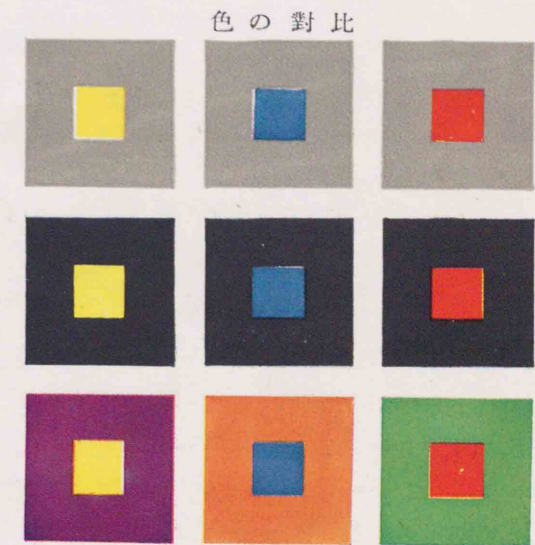
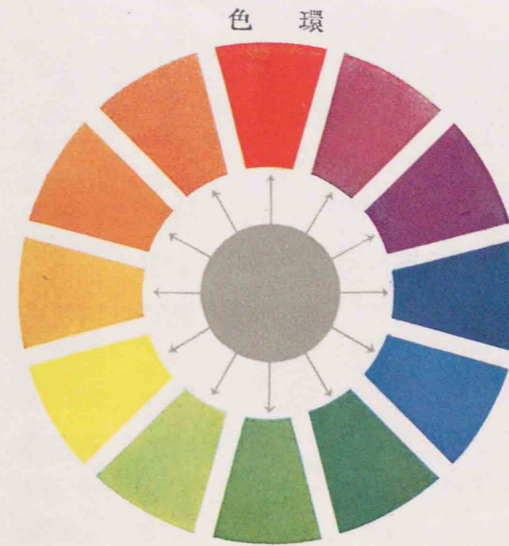
異色又は餘色調 派手な調和を得る。餘色は快活で刺戟的、異色は色によつては調和が俗になる場合がある。圖は以上の兩者の例で、二色及び四色の場合である。

10. 色には寒暖の感じがある。暖く感ずる色を暖色又は熱色といひ、寒く感ずる色を寒色又は冷色といふ。暖色は黄、橙、赤系の色、寒色は綠、青、紫系の色である。

注 意

1. 色は我等の感情に刺戟を與へるものであるから我等の周圍がよき色感を與へる場合に其の生活は人生を明るくする。我等は色彩上の常識を持つて衣食住を處理するやうにしたい
2. 本課の指導に於ては各種の教便物を用意して生徒の直觀に訴へたい。
3. 色彩については理論篇第二篇第三章に詳述してあるから参考に資せられたい。

準備 色彩指導上の各種教便物
 参照 卷末 12 頁、理論篇 97 頁



● 橙色を中心として左右の色環の半は暖色、その反對側の青色を中心として左右の色環の半を寒色といふ。● 配色には色相ばかりでなく色の調子(明暗)をも考慮しなければならない。

A B C D E F G H I J K



要旨

文字を特殊な書體で描寫し、文字そのものの使命を果すと共に、装飾的効果を發揮せしめ、所謂實用と美との調和を圖り、實生活に役立つ圖案技術を養はんとするものである。

説明と鑑賞

1. 裝飾文學とは文字を便化して裝飾的に表現したもので、文字本來の實用的意義に、美的、創作的意味を加へたものである。
2. 裝飾文字は宣傳、裝飾の目的に使用される。實例としては看板、ポスター、廣告の文字、書籍の題字、圖面の署名等種々の場合がある。
3. 圖示したものは何れも墨一色を以て表現した例で、書體も其の構成も多分に獨創味をもつてゐる。
4. ABCDEFGHIJK 及び 123456789 及び画の文字は佛蘭西の圖案家 A.M. Cassandre カツサンドル氏の創作にかかゝるもので、幾何的描線と明暗の二調子とによつて構成した裝飾文字で、明快新鮮な感じをうける。
2年、3月、4日、五回、6等、7才、8人、9點、MOON も同じスタイルである。
5. Fine Art の中FINEは直立體から地上につながり印した影の表現、ARTは文字に奥行を添へた立體的表现である。
6. 興亞は陽線を用ひず陰の線のみを太く引き明暗によつて立體的に表現したもので、方眼を基礎として描いたものである。立方體を積み重ねて作ったやうにも見え、その文字の持つ内容にも相應はしいスタイルである。強く確固たる感じを受ける。
7. Lonely moon は圓と直線による 黒味勝の裝飾文字で強いうちに清新な感じがある。Lの文字を長く延ばして畫面全體を引き締めたことは注意すべき手法である。

8. 其の他、名曲鑑賞は健實なゴシック風、スポーツニュースは自由明朗な書體、abc には充實した感じを受け、Colour には着實さ、動的なリズムには文字通りリズム的な感じがあり、圖案の圓形強化殊に面白く、イロハニホヘトチ及びりぬるをわは平明な二重文字である。スターには稍々鋭さがあり、其の右は作者のモノグラムである。

文字の裝飾化は我國に於ても西洋に於ても古くから行はれて、或は裝飾の用に供し、或は宣傳のために行ひ、或は標識のために用ひられた。モノグラムや料理の文字や都市の紋章も裝飾文字の一種である。

指導

1. 裝飾文字の意味、其の便化、構成について説明し、新聞、雑誌、ポスター、レツテルマーク等から多數の實例を示し、考案及び描寫をさせる。
2. 生徒各自の氏名、校名、地名、家庭生活、學校生活から文字を選び獨創的な表現をさせる
3. 初め鉛筆にて全體の輪廓を描き、これを文字の數に割り、その枠に文字を嵌め込む。其のスタイルは生徒の考案に俟つ。仕上は墨又は着色。
4. 文字の描寫には定規、コムパス、烏口等を用ひてもよい。文字の便化は餘り細かい部分に煩瑣な技巧を弄さないのがよい。
5. 大智浩氏 新潟高工卒業後東京美校圖案部出身の圖案家である。(詳細は卷末14頁)

注意

1. 彩色は一つの文字或は一語一句内に多數の色を用ひないのがよい。色の多いのは品位がなく又散漫になる。
2. 裝飾文字を意匠するには其の實用を妨害しない範圍内に於て美的加工をなすべきで、其の文字本來の目的を忘却して美觀のみに因はれては折角の意匠も用途を誤る。

準備 文字の便化例多數
参照 卷末 13 頁

要旨

ポスターに関する知識を授け、且つ装飾文字の応用として其の考案及び描寫を練習させる。

説明と鑑賞

1. ポスター Poster とは廣告ビラといふ意義で、繪畫、模様、文字を描いて、宣傳、廣告、募集、警告等に使用するものをいふ。印刷によるものを普通とする。
2. ポスターは古くから行はれたのであるが、歐洲大戰に於て獨逸が舉國一致國民奮起を目標として盛に宣傳に用ひ英米佛もこれに倣つたために世界のポスター界は大いに進歩した
3. ポスターは大戰後は産業戦の前線に立つて宣傳戦のために活躍することになった。のみならず漸時社會機構のあらゆる宣傳機關として利用されてゐる。
4. 従つてポスターはその圖案も向上し製作技術も進歩するやうになつた。ポスターに應用せられる印刷の種類は石版、寫眞平版、オフセット版、三色版、グラビヤ版、木版等である。(理論篇 87 頁参照)
5. 本圖右上は音樂會のポスターである。古代ギリシヤの樂器のリーラを圖案化しこれに雲と星とを配して夜の音樂會を現はしてゐる。色調は白、黒、青、黄の四色ですつきりとした美しさがある。
6. 左上は美術展のポスターである。パレットとバラの花を扱つたもので、これを上下轉倒して描いたところにこの圖案の特異な配置が見える。
7. 中央のポスターは財團法人日本文化中央聯盟の二六〇〇年記念懸賞募集に最優秀を以て當選し賞金一千圓を得た作品である。作者は大阪の圖案家沖原薫氏。圖は金地に黒と朱の極く簡単な配色で、八咫鳥と太陽を描いたも

ので便化や構成に從來の型を破り、構圖、表現共に新鮮で力強いものがある。そして光輝ある日本文化の精髓、就中我が國體觀念を中外に顯揚し皇紀二千六百年を迎へようとする我が民族的躍進と、之に伴ふ民族的感激を現はしてゐる。

8. 右下は陸上競技大會のポスターである。中央に選手をヴオリウム化して扱ひ、その背後に白線のトラックを描いて陸上競技の意を顯してゐる。
9. 左下のポスターは健康週間宣傳用のもので群青の地色に緑の堤と其の倒像淡桃色の櫻の花と遠見の富士を現はして清澄な大氣と健康との關係を強調してゐる。「吸へよ大氣」「健康週間」の文字もしつかりしてゐる。
10. 中央沖原氏のポスターを除いた他の四枚は何れも、大智浩氏の作品である。大智氏は東京美校出の新進圖案家である。(詳細は巻末)

指導

1. ポスターの題目を與へ任意の意匠によつて考案描寫せしめる。
2. 實地ポスターとする紙の大きさを定め、その比例によつて生徒の實習する畫面の大きさを定めしめる。
4. 資料の決定、便化、構圖の研究、記入文字の決定、かくして鉛筆で下圖を描かせる。
5. 地塗をした畫用紙の上へ下圖を轉寫し、これに従つて繪具を塗らせる。(理論篇 86 頁)

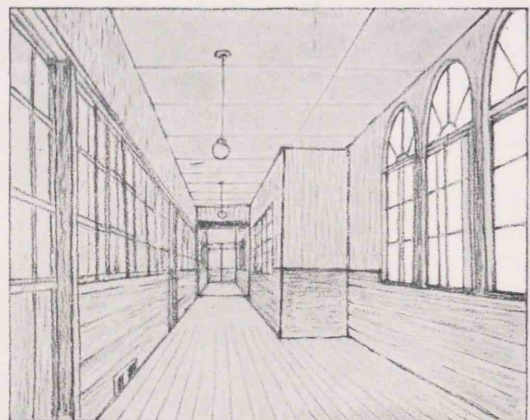
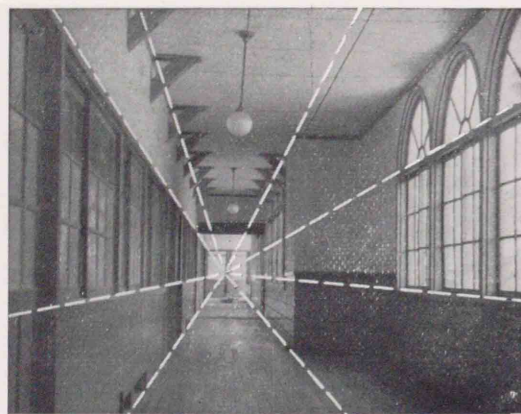
注意

1. ポスターは常に心掛けて、よい参考品を集めることにしたい。そして整理分類して保存する。
2. 題材はなるべく生徒の生活に即して定めることにした方がよい。
3. 圖案は簡明直截なものが効果的である。くどくどした盛澤山のものはよくない。

準備 ポスターの實物其他

参照 卷末 14 頁





● 上圖は廊下及び校舎の實景とスケッチである。● 建築物を畫くには地平線へ向つて集注する各種の直線、その他相互の平行線等をよく觀察して、正しくこれを畫くやうに工夫すべきである。

要旨

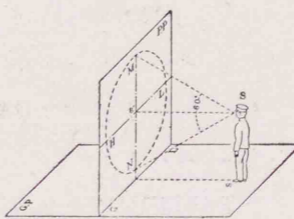
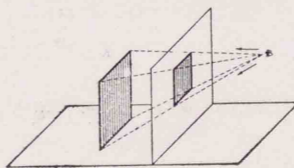
本圖は建築物の描寫に關する説明圖であるが特に遠近法につき知らしめ、次課に於てこれを實習せしめる。

説明と鑑賞

1. 建築物を描くには遠近の理法を知つてこれに従はねばならない。遠近の理法は、物の形が遠近に従つてどう見えるかといふことであり、その描き方は見える通りを寫すといふことである。

2. 總じて遠いものは小さく、近いものは大きく見える。又對照物が遠ざかるに従つて自分の目より上のは下り、自分の目より下にあるものは上つて見える。そして地平線の一點でこの兩者が合することになる。地平線といふのは自分の目の高さに視點を置き、これを通つて地平面に平行に引かれたと假定した線である。所謂實際上的地平線や水平線がこれに當る。

3. 以上の關係を圖學的に説明したものは透視圖である透視圖は右の裝置によつたものであるが詳しくは卷末に説明する。



G.P	地平面	S'	中視點
P.P	畫面	H.L	地平線
S	視點	SS'	眼ノ高さ
S	停點	MN	視域

4. 圖は廊下と校舎の實景、及び其の鉛筆スケッチである。遠近によつて建築物の平行線が地平線の一點へ向つて集注する實例と其の描き方を示したものである。眼より上の線は遠くへゆく程下り、眼より下の線は遠くへゆく程上つて見えること圖の通りである。

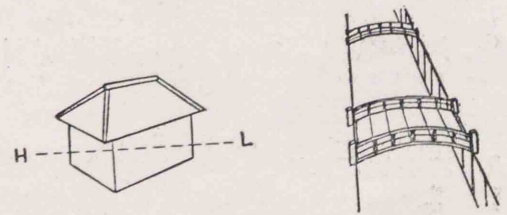
5. 左上の寫眞は東京府下某中學校の階上廊下左側は教室で、右側張出の部分は玄関上のバルコニーになる。突當りは教室である。下圖は鉛筆による略畫、特に明暗をやめ又細部は省いて、遠近説明用に供したのである。

6. 右上の寫眞は東京某校の古い建物で、屋上には煙突など見ゆるが、入口は左、右方には物置小屋が附いてゐる。前方の木の枝は櫻である。二月の撮影でまだ花はつけてゐない。

下の圖は上圖の略畫で、多少調子をつけて描いたものである。寫眞の場所より稍々遠ざかつて寫生したものと見てよい。

注意

1. 特に説明のために一時間設けず次課に附帯して指導したい。
2. 建築物の描寫上最も注意すべきことは遠近法であるが、その中心となる問題は平行線が地平線の一點に集注するといふ點である。この説明はなるべく實際について生徒の實驗によつて指導するのがよい。
3. 生徒の寫生に於ける形の上の誤りは遠近法の不備による場合が非常に多い。そして其の最も多い實例は次のやうな缺點である。



地平面に立つて見た場合これは誤りである。これは川の寫生であるが、甚しい誤りである。

準備 遠近法説明用教具

参照 卷末 15、16 頁、理論篇 61 頁

17 学校の玄関

石井 柏亭

要旨

学校の玄関を描かして屋外寫生の初歩練習をなし鉛筆による建物、樹木の表現法に馴れさせ、尙建物の透視法を會得させる。

説明と鑑賞

1. 東京市内に於ける某中學校の玄関を寫生したもので前景に校庭を見せ、中景に玄関と樹木、遠景には段々遠くなつてゆく樹木の並木と塀とを配してゐる。
2. 所謂何でもない場所を捉へた作品で、特に珍しい題材といふわけではない。この筆者は常にありふれた自然を卒直に描いて健康な美しさを出すことを主張してゐる。生徒にとつては最も参考になる作品である。
3. 中景を主とし、左右對照のスペースをつくつた安定した構圖である。鉛筆の調子が玄関に強く、遠景が弱いから遠近感がよく現れ又コンクリートや樹木や地面の質がよく描かれてゐる。點景人物も要を得てゐる。
4. 描法は穩健で手堅い。建物の表現には多く直線を用ひ、樹木には曲線を用ひてゐるがよく調和してゐる。
5. 建物の消失點は當面の右端中央から稍々下にあり、階段、ポーチの屋根、窓枠等の線が夫々その方向に集つて見える。
6. この建物は鐵筋コンクリートの建築の玄関が本屋から突き出てをり、所謂ポーチになつてゐる。
7. 石井柏亭氏に就ては卷末16頁參照。

指導

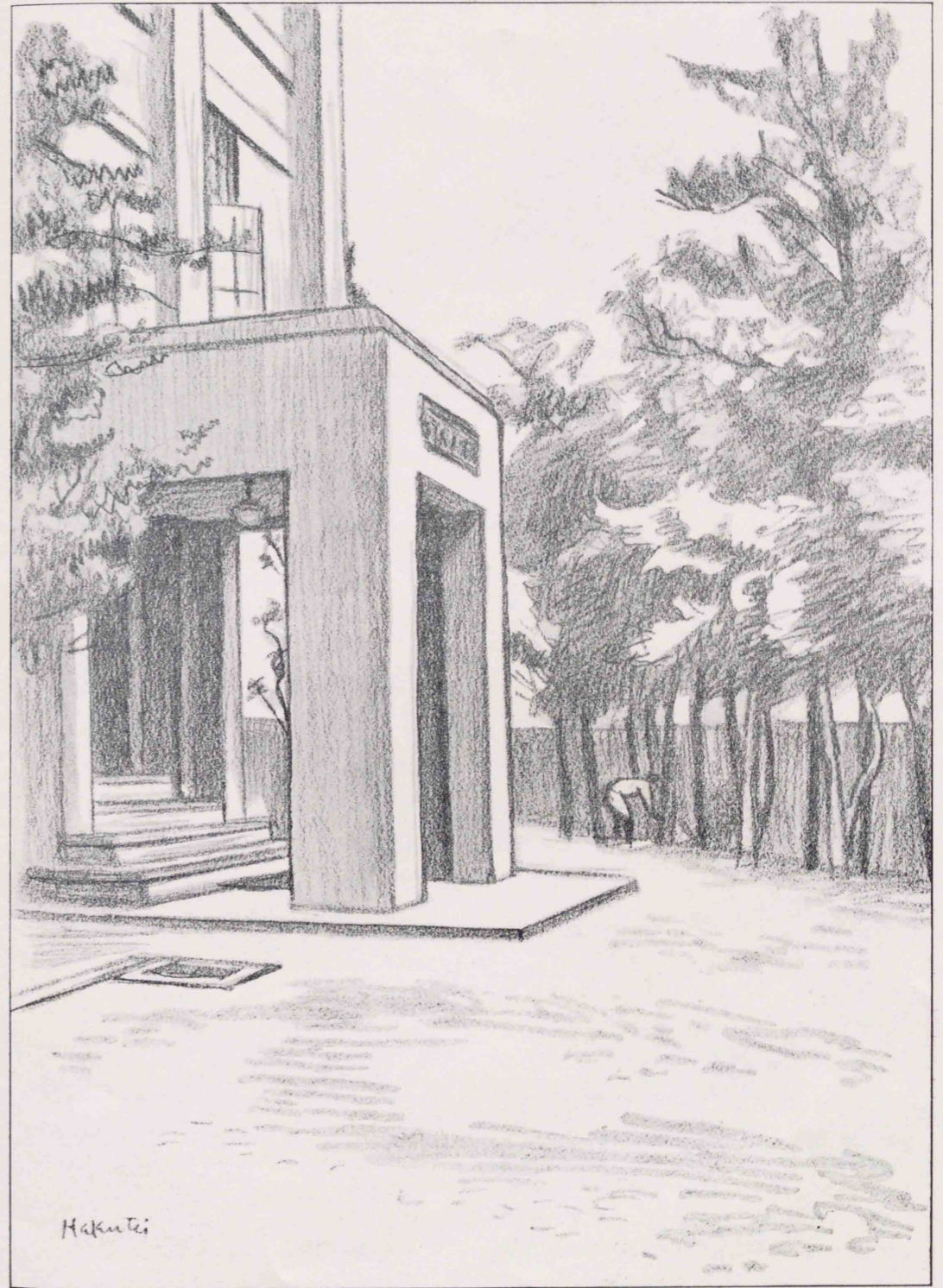
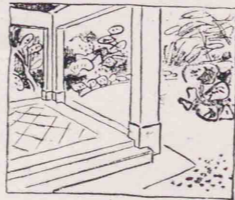
1. 寫生は必ずしも玄関とは限らない。校舎の一隅、玄関、奉安殿、物置、溫室其の他、ありふれた平凡なものでも畫題になり得ることを知らせ實地について指導する。

2. 題材を決定させるには形の面白さ、色のよさ、陰影の妙等を考へ、又對象の變化や、まとまりを條件にする。
3. 初學のものは何處から何處まで畫くべきか見當がつかないもので、總じて廣々とした場合を取り入れ、細々とまとまりもなく色々なものを描き入れるものであるから、これについては實地につき十分指導の必要がある。
4. 自然をどう區切るかといふ練習については見取枠を持たせて研究させる。
5. 建物を畫くには特に透視上の注意を要する。大抵の場合生徒の繪には透視法上甚だしい缺點が見える。
6. 寫生の實際に當つては下描をし、十分訂正した上線描をし、更に陰影をかくのであるが靜物の場合と同じく大局から小部分に描き進み、各部の釣合に注意させる。

注意

1. 本課は水彩又は鉛筆淡彩を以て寫生してもよい。
2. 生徒の共通缺點として餘りに細部に互つて描く癖がある。そのために時間を要することも多い。風景寫生に於ては總じて略筆、省筆の意義を知らせたい。
3. 本畫は臨畫教材として取扱つてもよい。その場合は十分技巧を練磨するやう、忠實に臨摹させる。

準備 範畫數枚其の他
參照 卷末15頁
參考 他の構圖



17 学校の玄関

石井 柏亭



18 樹木のスケッチ (参考用)

寺内 萬治郎

18 樹木のスケッチ (参考用) 寺内 萬治郎

要旨

本圖は鉛筆による各種樹木の表現法を示したもので、樹木寫生の参考資料として載せたものである。

説明と鑑賞

1. 樹木は其の種別によつて、姿勢にも枝振りにも葉の形にも夫々の特徴がある。葉の形は極めて近い位置で寫す場合にのみ區別されるが、枝振りや姿勢は餘程離れた位置から見てもそれと分るのである。尤も遠景の森や林は概して一様に見える。従つて樹木は其の種類其の遠近によつて表現の形式に差異がある。
2. 上段左は松である。常緑喬木で其の姿勢には特徴がある。これに雄松(黒松)と雌松(赤松)とがあつて、雄松には男性的の壯美があり、雌松には女性的の優美さが感じられる。古來畫材とされることが多い。圖例は雄松を寫したもので、鉛筆を強く用ひて其の特性を表現してゐる。總じて松は枝振りの描寫に注意を必要とする。四季を通じて其の形に殆ど變化がない。
3. 上段右はハツ手である。常緑灌木で掌狀の廣葉をつけてゐる。丈が短いから自然その寫生は接近してなされ、従つて比較的細かに描かれる。これは初夏の寫生、濃り重なつた葉の特徴がよく表はれてゐる。
4. 中段左は竹である。竹は禾本科植物、稈も葉も樹木と比べて弾性に富んでゐる。姿態は弓形に曲る傾向があり自然これに應じて表現をせねばならない。これは夏日のスケッチであるが、四季を通じてその姿に大差はない。
5. 中央は杉である。常緑の喬木であるが、冬は葉の色が著しく褐色を帯びるものがある。

圓錐狀に繁茂するのが杉の特徴である。圖例は初夏のスケッチである。杉の木の上部を寫生したもので、遠近感と立體感と、杉の葉のかたまりとを、鉛筆の使ひ方で説明してゐる。

6. 中段右は檜の幹である。檜は落葉喬木である。樹皮は黄褐色で所々に緑白色の斑點があり、扁平の切目が見える。圖は其の根元のスケッチで、簡素な筆致のうちに樹幹の特徴が出てゐる。笹の葉との取り合せも面白い。地面との接觸面の描寫も巧である。
7. 下段左の圖はあききのスケッチである。あききは常緑灌木で、光澤ある濃緑の葉の間に眞紅の實の見えるのはまことに美しい。これは早春の寫生、輕快な筆致で、葉の叢つた描寫は誠に要領を得てゐる。
8. 下段右の圖は繻である。常緑喬木で四季其の姿勢に大差はないが、これは初夏のスケッチである。葉がこんもりと繁茂して樹幹や樹枝を蔽ふ。日向と蔭との明暗の描寫がこの樹のこんもりとした形を見せてゐる。
9. 寺内萬治郎氏 文展審査員。(卷末1頁参照)

指導

1. 生徒を校庭に連れ出し諸種の樹木を選んで一枚の紙に何本もスケッチさせる。
2. 可成手早く其の特徴を寫すやうにさせる。
3. 省略法について指導する。

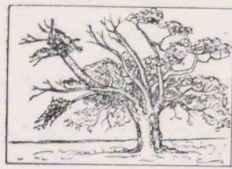
注意

1. 本圖は参考用であるが、都合によつてこの一部を臨畫させてもよい。短時間の臨畫には好適な材料である。
2. スケッチの場合にはこれを傍に置いて技法の参考資料とさせてもよい。
3. 鉛筆は3B又は4B位を適當とする。

準備 鉛筆數枚

参照 卷末17頁

19 樹木



要旨

水彩によつて樹木を寫生させ、其の表現法を會得せしめると共に

風景寫生へ入る準備の第一歩とする。

説明と鑑賞

1. これは楓の木である。群青の空を背景にして深緑の美を誇つてゐる初夏の風景、枝や幹の間を透けて明るく空が見える。
2. この繪の主題となるものは樹木である。樹木の描寫練習の資料として擧げた教材ではあるが、亦一枚の風景畫としても纏りを見せてゐる。
3. 楓の木を中心にして遠景や左右に種々の樹木が小さく描かれ、又前景には小灌木や草叢が描かれてゐる。
4. 畫面の左上部から投じた陽光によつて葉群の一部は明るくかどやき、草原には濃緑の蔭をつくつてゐる。
5. 初め軟い鉛筆で大體の形を畫き、葉の明るい部分には鉛筆の點々をつけて楓の葉の感じを出し、暗い部分へは鉛筆で陰影を描いた。その上へ繪具を塗つて仕上げたものである。
6. 色調は殆ど緑の類似色のみで、唯僅かに赤い花の點々が見える。畫面の感じは潑刺として強い夏の氣分が十分に現れてゐる。
7. 中西利雄氏 東京美校出の新進水彩畫家である。その作風は清新豁達、水彩畫家として我國の現畫壇に一つの地位を得てゐる。(詳細は巻末)

指導

1. 生徒を校庭に連れ出し、庭園の中から最も

中西利雄

形のよい樹木を選び出させ、これを中心として、その左右の情景を調べさせる。

2. かくして決定した題材につき其の姿態、色彩、明暗、樹木の特性を十分觀察させ、下描を完了して着色させる。この場合必ずしも水彩風でなく、鉛筆淡彩の方法によつてもよい。
3. 小部分の描寫にこだはつてゐて大局に目を通すことを忘れてはならない。常に畫面全體の釣合を考へつゝ描き進める。
4. 生徒は部分的に細か過ぎる技巧を平氣でやつてゐる。省筆、略筆を十分運用して調子を大きく現はすことに注意させる。

注意

1. 本圖は楓の木を主題として居るが、生徒の寫生はどの木でもかまはない。二時間
2. これを寫生する頃の陽光はまだ強烈で、一時間その直射を受けることは相當の打撃であるから、可成木蔭や建築物の陰に居て寫生出來る位置を選ばせたい。
3. 屋外寫生用の畫架や三脚が用意出來れば好都合である。

準備 範畫其の他

參照 卷末 19 頁

參考 カット及び次の圖は各種の構圖



19 樹木

中西利雄

要旨

昆虫類を毛筆を以て線描し着色した様々の範
例を示し、これを参考として昆虫描寫をなさし
める。

説明と鑑賞

1. こゝに示された昆虫類はてんとう虫、おほ
かまきり、くませみ、ほしかみきり、もんし
ろてふ、をながあげは、いなご、あしながば
ち、しやうじやうとんぼ、あめんぼの十種と
せみの殻、及びみすぢまいまいである。
2. てんとう虫は翅は橙黄色、斑紋は黒で、こ
れは斑點が七つであるからななほしてんたう
むしといふ。
3. くませみはせみの中で大形のもの、俗にシ
ヤ－シヤ－ゼミといふ。
4. おほかまきりは體は緑色か又は黄褐色で本
邦最大種である。俗におがみ虫ともいふ。
5. ほしかみきりは又ごまだらかみきりともい
ふ。體は黒色で光澤がある。翅に白い小紋が
ある。
6. もんしろてふは白い翅に黒い紋をもつてゐ
るが春型のものには黒紋のないがある。
7. をながあげはは前翅の裏面は淡色で、後翅
に橙黄色の弦月紋がある。春型は小形で夏型
は大形。
8. いなごは稻の害蟲である。後脚が長く、こ
れではねるのを特徴とする。
9. あしながばちは中脚を下げてとぶので脚が
長く感じられるから其の名がある。
10. あめんぼはくもに似てゐるので一名かはぐ
もといふ。

11. しやうじやうとんぼは雄と雌とで色が違ふ。
雌は腹が黄色である。この圖は雄。
12. みすぢまいまいはかたつむりとして普通な
ものである。
13. 何れも毛筆を以て眞面目に寫生し着色した
もので、これ等小動物の姿態が實によく寫さ
れてゐる。殊に描線の巧さ、其の強弱緩急が
自由に驅使されてゐるのは流石に多年描線鍊
磨の結果に外ならない。
14. 小泉勝爾氏 東京美術學校教授。(詳細は卷
末21頁)

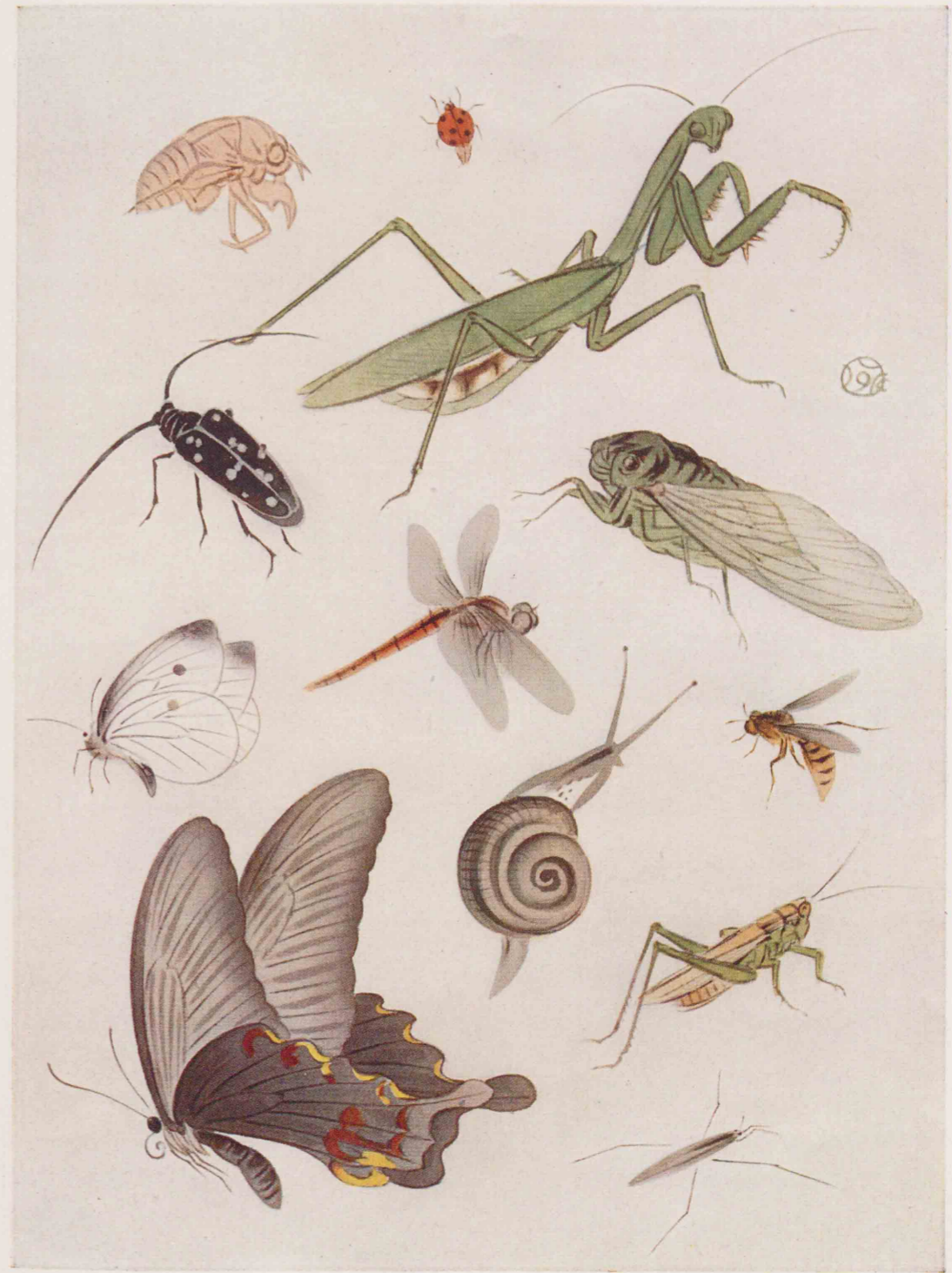
指導

1. 生徒各自に蝶、蝸牛、蟻螂、かみきり蟲、
蜻蛉、其の他の蟲類を持參せしめこれを二つ
以上寫生させる。
2. 初め、鉛筆を軽く使つて下描をし、それか
ら毛筆で線描をする。それが終れば鉛筆のあ
とを消し去る。線描に用ひる毛筆は削用又は
面相筆がよい。習字用の毛筆でもよい。
3. 着色させる。繪具は水彩繪具でよい。パレ
ットや水をきれいにし發色を美しくするや
うに指導する。
4. 大きさは實物大位に描かせるのがよい。

注意

1. 説明圖風な博物學的描寫は必要でない。眞
面目に客觀的に描くことはよいが、そこに繪
としての潤ひをも持たせたい。
2. 博物標本でなくなるべく生徒各自が蒐集用
意するやうにさせたい。
3. 墨一色を以て略畫の練習をもさせたい。

準備 蟲類各種
参照 卷末20頁





秋有黄色

21 菊 その一 (参考用)

21 菊 その一 (参考用)

要旨

次の課に於て毛筆畫による菊を扱ふので、これと聯關して日本畫に於ける各種の表現法を知らしめて参考に供する。

説明と鑑賞

1. 菊は菊科に屬する植物で、其の種類頗る多く、八百二十六屬凡そ一萬種の植物を含み、我國に自生又は栽培されるだけでも概ね九十六屬三百五十種を算するといはれる。
2. こゝに載せたものは何れも栽培種のものである。これ等は皆芳香強く花美しく、姿が面白いので、古來詩歌の題材となり繪畫の對照となつて所謂四君子の一に數へられてゐる。
3. 四君子といふのは蘭竹梅菊で、これ等は何れも節操の高い植物として君子に擬せられ畫人に愛され、特に漢畫の入門としては四君子の墨繪から始めるのが原則であつた。
4. 上段の圖は瀧和亭作、秋有黄色と題された小品である。南畫に屬する簡素な筆法のうちに、よく菊の特徴を捉へてゐる。墨を基調としてかいたもので、花は線描、葉は所謂沒骨を主とし、これに葉脈を配したものである。
5. 原畫は淡彩畫で、葉は淡い藍色、花は淡い黄色である。線は勿論墨であるが、同じ墨を使つても部分部分によつて濃淡と強弱とがあり、畫面を變化あるものにしてゐる。
6. 作者瀧和亭は幕末から明治年代へかけての南畫家で、近世の大家である。(詳細は卷末)
7. 下段のものは川端玉章作の墨繪淡彩の小品である。筆者玉章に關しては其の詳細を卷末に述べるが、四條派に屬する近代の大家で、和亭と同じく幕末から明治年代へかけて活躍

した畫家である。

8. 描法は自然四條派が基調になつてはゐるが多分に南畫の風をも取り入れてゐる。線描及び沒骨の手法がよく調和し、又色彩の濃淡が一層畫面を引立ててゐる。
9. 原畫は花瓣が黄色、蕊が緑、葉は濃い綠によつて表され、竹には淡墨が用ひられてゐる。菊の種類は寒菊である。
10. 中段は白菊である。結城素明畫伯編の花樣集第一の中からとつたもので、細い描線を以て忠實に寫生したものである。
11. 以上三種の菊を比較してみると、表現上夫々の特色がある。中段の寫生は菊の形態を如實に描いてゐるが、稍々潤ひに乏しく、他の墨繪二圖はこれに比して深き味ひがその筆端にうかがへる。而も和亭の菊には素朴枯淡が感ぜられ、玉章の菊には情趣豊かなものがある。
12. 和亭の作品中「秋有黄色」の如く題したものを一般に讚といつて、漢畫派(南畫や北畫)の畫家は好んで自分の詩句を題したものである。

注意

1. この三圖は説明教材として載せたものではあるが、生徒の臨畫教材に利用してもよい。特に和亭、玉章の兩圖の如きは墨繪として取扱はせて絶好のものである。色紙にも丁度手頃の畫材である。構圖上の参考にもなる。
2. 南畫や四條派についてのまとまつた説明は學年が進んでから取扱ふ方がよい。ここでは簡単に概念を授ける。

準備 複製又は肉筆による數葉の菊の作品

参照 卷末 22 頁

要旨

菊を観察し寫生せしめて毛筆による植物描寫を練習せしめ且つ日本畫の趣味を養ふことを眼目とする。

説明と鑑賞

1. これは大輪の黄菊一莖を毛筆畫によつて寫したものである。一つの花は十分に開き、他はまだ蕾である。菊は秋の花の首位を占むる品位と美しさと嚴肅さを持つてゐる。
2. 大輪の花と長い莖とが畫面の中央を占め、これに對して蕾をつけた短い莖が添へられて主副の關係に置かれてゐる。兩者よく釣合を保ち構圖は自由でのびのびとして居る。
3. 描き方は眞面目な毛筆描寫で、先づ鉛筆の下描をし、毛筆の線描をした後に彩色を施したものである。かういふ表現を日本畫では勾勒法と呼んでゐる。(理論篇 49 頁)
4. 渡邊香涯氏 近年まで東京美校教授たりし大先輩で日本畫及び圖案に關して練達の士である。描線流麗、莖、葉、花の自然の姿が如實に表現されてゐる。しかも花瓣の遠近感、葉裏と葉表の描方、重なり合つた葉の調子などを仔細に觀察すれば其の筆法設色に十分の用意が拂はれてゐるのに氣がつく。(渡邊氏に就いては詳細卷末 22 頁)

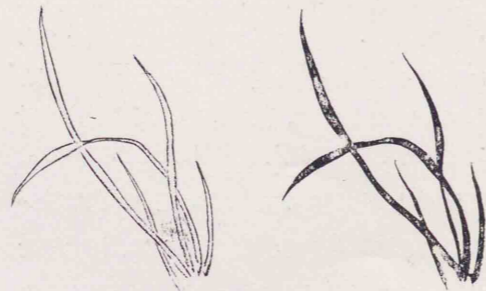
指導

1. 菊はこれを花壇に求めてそのままを寫生してもよく、切花として描いてもよく、尙又鉢植の菊を寫してもよい。無論切花は手に持つか花瓶に挿さねばならない。
2. しかし線描を主とする毛筆畫に於ては、花瓣の一枚一枚、葉脈の一本一本をも忠實に寫すのであるからモデルは極めて接近した位置になければならぬ。従つてモデルの共用は不便が多い。

3. 又下描及び線描に時間を要することが多いために、同一の姿勢のままで仕上げることも困難である、自然線描だけに同一のモデルを用ひ、着色には別のモデルを用ひることも止むを得ない。
4. 初め形、色彩を觀察しつゝ畫用紙上に鉛筆で輪廓を描き、下描をなし、これを辿つて毛筆の線描をする。實物の形や感じに即して線の濃淡、強弱、緩急を工夫する。
5. 色彩の濃淡は遠近によつて區別し、又物の表裏によつても區別する。同一平面でも濃淡異なる場合がある。陰影はこれを描かないが、その氣持を色の濃淡で現はすのが毛筆畫の普通の持法である。
7. 紙は地色のまゝ残しておいてもよく、又淡い色で塗つてもよい。

注意

1. 毛筆畫の描法は本圖の如く勾勒法による場合と沒骨法による場合とがある。前者を線描着色ともいひ後者を附立ともいふ。沒骨法によつて練習させるのもよい。



勾勒法

沒骨法

2. 本圖は臨畫教材として扱つてもよい。その場合は手本に忠實に勉強しなくてはいけない
3. 畫用紙の代りに日本紙を用ひさせるのもよい。繪具は水彩畫用のもので代用させる。筆は削用か面相があれば都合がよいが、習字用の縮筆で代用させてもよい。

準備 菊の花其の他

参照 卷末 22 頁、理論篇 49 頁



要旨

開いた鱈と鮨^{かます}を寫生させて干魚類の水彩描寫を練習させ、且つ魚類表現法の概要を會得させようとするのが目的である。

説明と鑑賞

1. 板の上に三尾の鮨と一尾の鱈(青海ではあぢ、普通にはあじ)とを置いたもので、何れも開いて生干とした魚である。干魚にはからからに乾燥させたものと、生干のものと二種あるが、生干の方は多少水氣もあり餘り色も變らず寫生資料として特に適當である。
2. こゝに描いた鱈は**まあじ**といふのが學名で體側に光澤ある鱗模様が並んでゐるのが特徴である。腹をさいて両面に開いたもので、両面とも背を見せてゐる。
3. この鮨は**やまとかます**といふ種類である。これは背を切り開いたもので圖には腹の内部を見せてゐる。頭から口へかけて大へん尖つてゐるのが特徴である。
4. テーブルラインと交叉する方向に鮨を置き更に角度を變へて鱈を載せ、構圖上の單調を破つてゐる。
5. 一體が濃い色調で類似色が多く、靜かな落着きを感じさせる作品である。バック、卓上、干魚の順で明暗が交互に繰返へされてゐることや、鮨の腹の上に鱈の背を見せて色の變化を工夫したことなどこの繪を一層美しいものとしてゐる。
6. 透明描法で數回色を重ねた力作品である。大きいタッチで全體の調子をまとめ、要所所には微妙な筆を入れてこの作品に生氣を與へてゐる。
7. 殊に切り開かれた肉の色及び背の光澤は眞に迫るものがあり、實によく質感を現はして

ゐる。第一巻に於けるスーパパンと共に伊原氏の健實な畫風を味ふことが出来る。(筆者に就ては卷末 24 頁参照)

指導

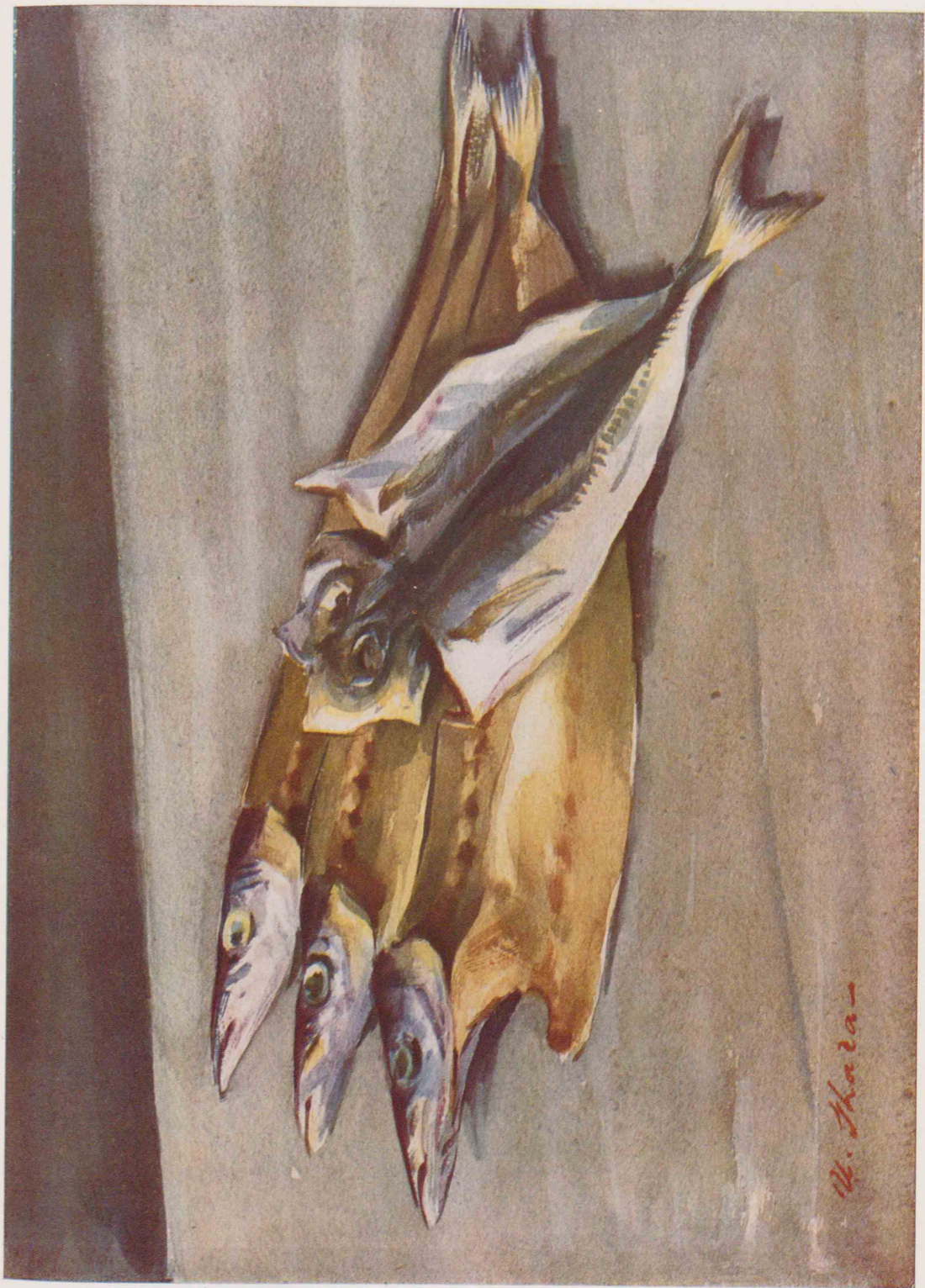
1. モデルは小形のものであるから餘り遠いところから寫生させないやうに工夫してモデル臺を配置する。その上へ干魚を置く。
2. 形狀、色彩、調子を十分觀察して鉛筆で正しく輪廓をとり畫面を大きい調子にわけて全體の統一を考へながら着色し、漸次濃い色、影の色、細かい部分を描き上げさせる。
3. 何回も塗り重ねて淡い色から濃い色を出すといふ方法も水彩表現の一方法ではあるが、最初から決定的な色を目指して着色し、筆数を少くして仕上げる方法は畫面に潑刺味を持たせることに効果がある。しかしこの場合全體の調子について常に注意を忘れぬやう指導する。
4. 主題となつた干魚の描寫にのみ専念して、これが出来上つても周圍は少しも繪具が塗られてゐないやうではいけない。卓上も背景も繪の一部であることを十分に知らしめる。

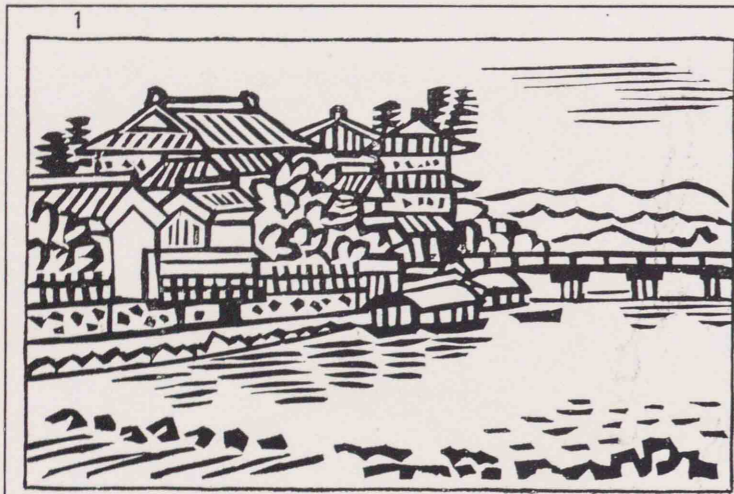
注意

1. 干魚は種類が色々あるから(卷末24頁)適當に買ひ求めて材料とする他のものを添へてもよい。尚ほ其の代りに臨畫をさせてもよい。
2. この作品は臨畫教材としては稍々困難と思はれるが、技巧の練習には絶好の資料である。
3. 臨畫の場合は手本をよく觀察して、形、色調、筆致を十二分に見習ひ、範畫の畫趣を寫すことに努めしめる。

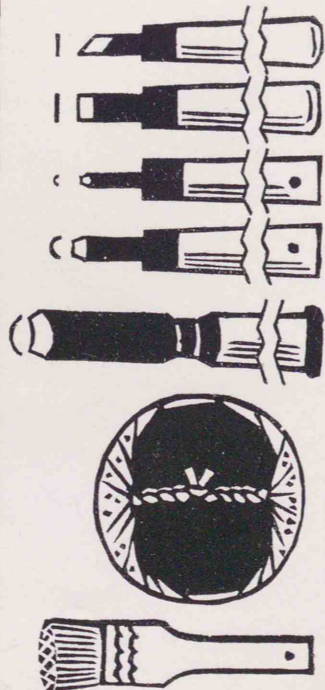
準備 干魚其他

参照 卷末 24 頁





4
謹賀新年迎春賀正
 あけましておめでとう元旦
慶福
壽
巷
賀
新
幸
 12345



●木版畫その他——1は印刀を使用,2は駒透(こますき)を使用,3は間透(あひすき)を使用して板ぼかしとした木版畫である。4は年賀狀用の文字,5は木版畫用具で,上より印刀,間透,駒透,丸鑿,同,ばれん,版摺刷毛である。

要旨

繪葉書を題材として木版畫一般の知識と技法とを授け、これを實習せしむると共に次の數課に關する豫備教材として取扱ふ。

説明と鑑賞

1. 木版畫は木に彫刻した繪畫を紙に摺つたもので、繪と、彫りと、摺りとがいつしよになつた趣味豊かな藝術品である。
2. 版木は桂又は朴がよい。これに版下を貼るか、或は直接繪をかい、これを版に彫る。彫刻刀及び用具の主なるものは挿圖の通りである。尙彫りや摺りの技法については第26課に詳述する。
3. 圖は何れも平塚運一氏の作品である。平塚氏は現代版畫家の第一人者、その作風は直截明快で要約し洗練された描線と調子の美しさは他の追隨を許さぬものがある。(平塚氏に就て詳細は巻末)
4. 1は九州大分縣日田の風景で印刀を以て彫つたものである。齒ぎれのよい素朴な線によつて川沿ひの風景がまことに美しく、土藏や樹木の倒影、遠山や橋の調子、近景の岩などにも要領のよい手法が用ひられてゐる。
5. 2は静岡縣の伊豆奈良本の風景である。畑と並木とを寫生したもので、遙かに大島が見える。駒透のみを用ひて彫つたもので、手法は素朴勁健である。下の方の枝を下ろした特色ある樹の姿が並んで、主要な題材となり、畑の畝と作物とが畫面に變化を添へ、樹幹を透して相模灣が見える。
6. 3は椿の寫生である。間透を使用して彫つたもので技法上の特色としてはぼかしが用ひ

てある。ぼかしには板ぼかしと拭きぼかしとがあるがこれは板ぼかしである。墨一色で實によくこの植物の姿態や感じを寫してゐるのに驚く。

- 板ぼかしは版面を間透で少し斜に削る。拭きぼかしは版畫の繪具を拭き取つたり、版面の繪具をぬる時豫め水を引いておいてぼかしたりする。
7. 4は年賀狀用の文字を木版としたもの、肉筆では眞似られない素朴な味があつて面白い
 8. 5は版畫の用具である。上から順次に、印刀、間透、駒透、丸鑿、丸鑿(大)、ばれん、版摺刷毛の各種である。其の使用法については次の天守閣の處及び理論篇に詳しく述べてある。
 9. この三圖は何れも版畫繪葉書で黒一色の繪であるが、夫々に特殊の味がある。

指導

1. 風景、花卉、果物等をスケッチせしめ、これを下繪として版下をつくり、版を彫らしめる。大きさは葉書判以下とし、一色畫とする。
2. 圖柄は極めて簡素なものがよい。線の數をなるべく少くして畫面の煩雜を避ける。
3. 繪葉書臺紙は畫用紙を切つてこれを利用してもよい。摺りは墨一色。

注意

1. 下繪及び摺りは學校に於て練習せしめたいが、時間を多く要する教材であるから、全部を教室内の仕事とすることは出来ないので、彫りだけを家庭に於ける自習とする。
2. 次課繪葉書及び後出の天守閣(前川千帆作)の諸課は何れも木版畫に關係ある教材であるからこれと聯絡上の考慮を拂ふ。工作科とも同様である。

準備 版畫用具及版畫の作品
 参照 卷末 25 頁、理論篇 52 頁

要旨

年賀繪葉書を描かして繪葉書圖案の知識と技法とを授け、考案創作の力を養成する。

説明と鑑賞

1. 我國に私製葉書の認可されたのは明治三十六年で、この時から繪葉書が民間に行はれるやうになつた。
2. 葉書の大きさは世界各國殆ど共通の大きさで、天地十四糎、左右九糎が普通である。
3. 繪葉書を其の用途から分けると、記念繪葉書、年賀繪葉書、名所繪葉書、廣告繪葉書及び普通繪葉書の五種とすることが出来る。これについては更に巻末(26頁)に説明する。
4. こゝに挙げたものは年賀繪葉書である。年賀繪葉書は大抵其の年の干支、勅題、瑞祥的資料、新春に因める資料等によつて圖案するのが普通である。印刷圖案とするばかりでなく肉筆によつて作られることもあり、種類は多種多様である。
5. 上段左は紺青の地に四本の若松と横雲を配し、赤く賀正の文字を表はしたもので重厚な感じの繪葉書である。右は波に日の出、題材は古いが手法が新しく、殊に群青、綠青及び赤と白の配色が新鮮である。
6. 中段左は草色地に黄色と桃色の梅花をあしらつたもの木版趣味の雅致ある作品である。右は赤地に黒のスキーマンを圖案化して入れたものである。文字は A Happy New Year である。
7. 下段左は暗い鼠色地に朱と緑を用ひて獅子頭を描いたものである。獅子は新春の景物、

趣味的な圖案である。

右は牡丹色の地に白い四羽の鶴を配した優美な圖案である。其の構成は續き模様風で左上の圖と同傾向である。

8. 筆者關口謙輔氏は新進圖案家で七人社の同人である。(詳細は巻末)

指導

1. 圖案資料は生徒各自の自由選擇に任せ、これを便化し排列することを工夫させる。
2. 地塗として繪葉書地の上に(白地の場合はそのまゝ)下圖を轉寫し着色させる。
3. 文字を挿入することを忘れてはならない。賀詞、紀元年數、年號等を入れる。其の書體は圖案と調和するやうに工夫する。
4. 圖案は葉書の大きさに描かされる。二種乃至三種の圖案を描かせる。

注意

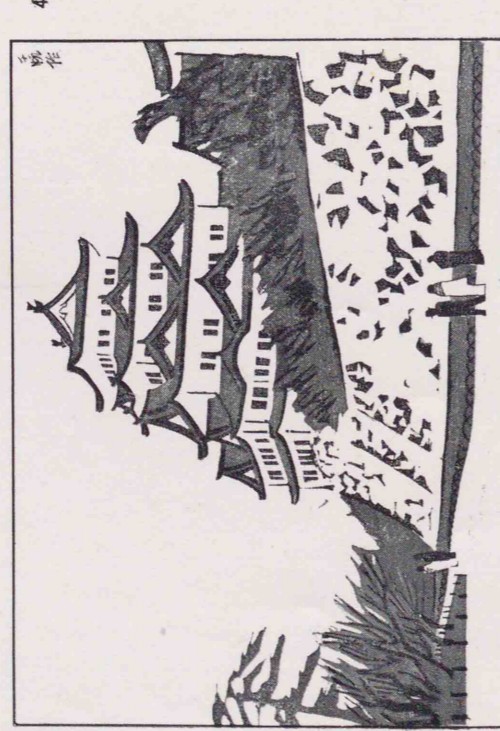
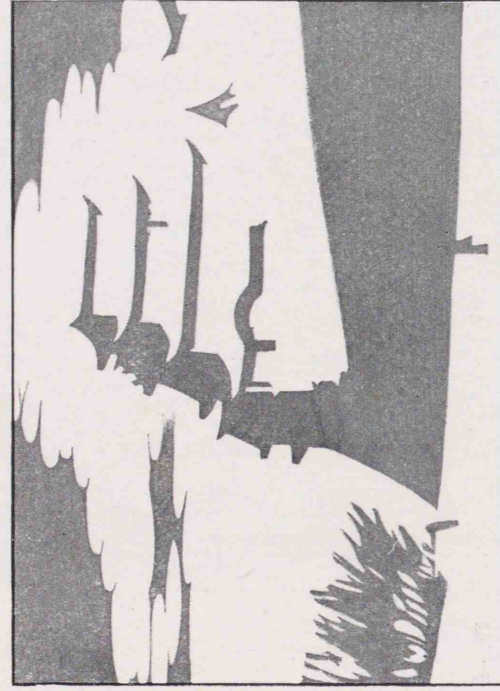
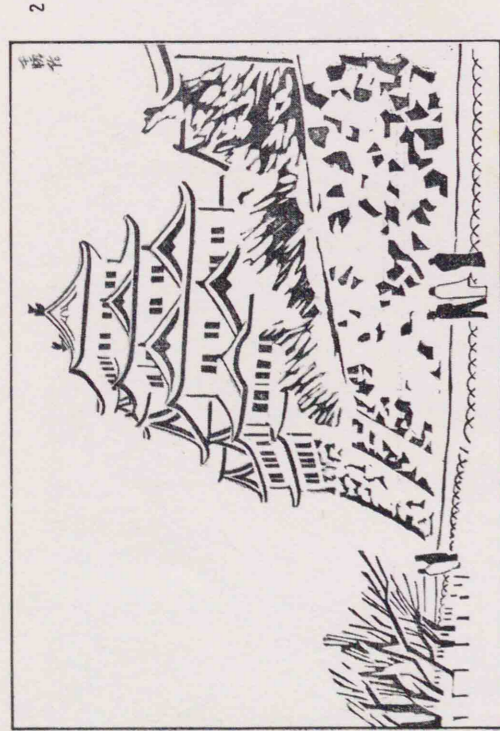
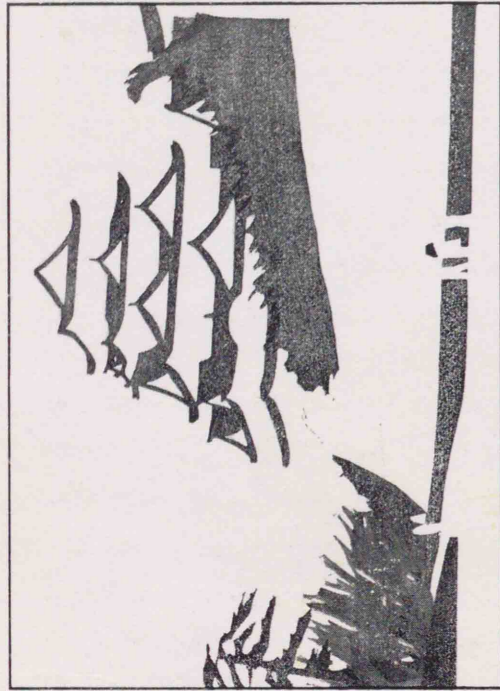
1. この教材は十一月末又は十二月に取扱ひ、來るべき新春の年賀狀として其の考案描寫を試みさせるのがよい。
2. 版式の概要を話して(理論篇 52 頁)自分の圖案が何れの版式によるかを豫定させる。
3. 其の圖案を各自木版、リソリウム版、芋版等として實地製作させるのもよい。

準備 各種繪葉書

参照 巻末 26 頁

参考 圖案例三種





前川千帆の如き作
天守閣の図次を順次に摺り重ねるの
一色版を作るのである。

この如く種々の摺り
墨版、緑版、2は墨版、3は緑版、
4は鼠版である。(説明用)

要旨

本圖は木版畫製作に参考圖として載せたもので特に彫り及び摺りの過程を示してゐる。これによつて木版畫の知識を與へ技法を知らしめようとするのである。

説明

1. 木版には板目木版と木口木版とがあり、前者は板の目に彫り、後者は木口面に彫るのである。こゝに載せた版は板目木版である。
2. 木版畫は一版一色が原則であるから何色も使つた版畫を作らうとするには其の色の数だけの版を必要とする。
3. 次圖は名古屋城を寫生した前川氏の版畫であるが、これに用ひられた版の数は三色三版である。
4. こゝに載せたものはその中の二枚で1は墨版、2は緑版、この二版を重ねたものが3である。これに尙一枚鼠版を摺り重ねて次圖天守閣の如き作品を得る。
5. 版畫の過程 最初に版下をつくる。版下とは下繪のことである。これを描くためには普通に寫生が基礎になることはいふまでもないこの版畫の下繪をつくるためにこの作者は態々名古屋城を寫生に行かれた。版下は美濃紙の礮水引などを用ひる。
6. 版下が出来るとこれを版木に貼りつける。版木は桂や朴の板を用ひる。先づ板の上に糊をよく引いて、その上に版下を裏がへしに貼る。或は膠氣のない墨で版下を描き、それを濡した版木の上へあて、上からパレンで摺ると繪が版木に轉寫される。
7. 次に版を彫るのであるが、一枚の版下によ

つて出来る版畫はブラック・アンド・ホワイトと稱する一色畫である。色をかけ合せて何度摺かにするためには版下も一枚ではすまない。色摺の版下については次の用意がある。

8. 先づ基調の黒版(これは最初の版下)を最初に彫り、これを色の数だけ礮水引の紙に摺る。その紙に各々色の来るべき箇所を朱で記して又色版の版下とする。
或は出来上りの繪(原稿)を一枚作り、それを基として薄色に各色別に透寫し、色の数だけの下繪をつくつてそれを板木に貼つて彫り、摺り合せて見てから訂正して完全な版にする方法もある。又主要な部分の一枚を彫り上げて摺り、それに次の色の部分を記入してそれを下繪として彫り、これを摺つて次の色の下繪を作る方法もある。
10. 版を彫るためには印刀、間透、駒透、三角刀、丸鑿等を中心にして他に二三の双物を用ひる。(理論篇 52 頁参照) 又版を重ねるためには繪がずれると困るので、各版面に紙の合せ目を彫る。これを見當といふ。(理論篇 53 頁参照) 彫りの順序は畫面のどこから手をつけてもよい。馴れた習慣によつて彫つてゆく。
11. 摺る時は先づ版面に濕りを與へ、刷毛で墨や繪具を塗り、紙にも濕りを與へてこれを版面に載せ、これを西洋紙又はパラフィン紙で蔽ふて、その上からパレンで摺るのである。パレンは日本紙と竹の皮でつくつたもので摺りの場合最も必要な品である。かくして版畫が出来上る。

注意

1. 本教材は既習の繪葉書及び次課と聯繫して取扱ふことが必要である。
準備 版畫の道具、版の實物、版畫等
参照 卷末 27 頁、理論篇 52 頁

要旨

本圖も亦木版畫に關する參考圖である。前課に於て説明したことと聯絡をとり、木版畫の知識を與へ技法を知らしめると共に版畫の趣味と鑑賞力を養ふことを目的とする。

説明と鑑賞

1. 版畫とは印刷された繪畫の總稱で、即ち木、石、金屬、ゴム其の他の物質を借りて轉寫した繪畫のことである。木版、石版、銅版、デック版、モノタイプ等何れも版畫である。版畫には肉筆では到底現はせない特別な効果や味や魅力があり、又木とか石とか、その素材によつて夫々異つた趣が見られるのである。
2. 版畫はこれを版式の上から分類すると大體凸版、凹版、平版の三種となる。凸版は木版のやうに版を凸起させて作り、凹版はエツチングの如く版面に凹く繪畫を彫つて印刷するもの、平版は版面に凹凸を作らず、石版の如く藥品の作用によつて平面のまま印刷するのである。詳細は理論篇印刷圖案の部を参照されたい。(理論篇 87 頁)
3. 我國の版畫として世界に珍貴されてゐるものに錦繪がある。江戸で刊行した木版刷の浮世繪をいふ。江戸繪とも東錦繪ともいはれてゐる。
錦繪は畫家の自刻自摺ではなくて、畫家が原畫を描き、彫師がこれを刻り、摺師によつて印刷されたもので三人の藝術的氣合と手腕が合致したところによい版畫が生れたのである。歌麿、廣重、北齋、寫樂、其の他不朽の作品を残してゐるが、何れも版畫日本の誇である。(理論篇 121 頁参照)
4. 由來我國の版畫は一枚繪といはれた慶長の頃から我國獨特の味を織込んで發達して來た刀漣に對する技法の冴え、構圖、設色の巧さは蓋し我國人の特質であらう。
5. 日本木版が板目彫刻に發達したのに對して

西洋木版は木口に發達してゐる。一般に西洋木版といへば木口木版を指すやうになつた。

6. 版畫を複製版畫と創作版畫とに區別する場合がある。これは制作態度によつて分れるのである。前者は一つの原畫を大抵其の作者とは別人によつて寸分違はないやうに多數複製される場合に用ひられ、後者は油繪や水繪を描くと同じ氣持、同じ態度で畫家自身、自刻自摺に當り出來上つた作品をいふ。
7. 我國古來の木版畫は複製的方向に發達して來たので、その技術は殆ど絶頂にまで達した。錦繪も亦複製版畫の形式をとつては居るが、刻師摺師自身にも独自の藝術があつたことに對して我等は藝術的價値を認めるのである。
8. 天守閣の圖は創作版畫である。作者前川千帆氏は文展無鑑査、其の作風は健實豁達、我國版畫壇の第一人者である。(詳細は卷末)
9. この圖は金鯢かじやく名古屋の巍然たる姿である。天守閣を主題として中央から右に樹木と建物を見せ、左端の大きな松の木がこれをうけ、空のスペースには左右對稱の雲を描き構圖上の釣合を保つて堂々たる威容を示してゐる。石垣と路傍の草との間にはお堀がある。(卷末 27 頁参照)

注意

1. 生徒に版畫を作らせる場合には最初は黒一色の版がよい。版木は油繪のスケッチ板が便利であるが大きさは葉書判でよい。リノリウムで代用してもよい。
 2. 既習の繪葉書と聯絡して年賀狀の版畫を試みさせるのもよい。
- 準備 複製版畫數種、錦繪數種、創作版畫數種
参照 卷末 27 頁



要 旨

鯛と蛤と笹とを寫生せしめて組合せの練習をなさしめ、且つ魚貝植物の特性に對する觀察力と、水彩による表現力とを養ふ。

説明と鑑賞

- この圖は一枝の笹の上に一尾のまだひを置き其のうしろに三個のはまぐりを配したもので、鉛筆をもつて輪廓をとり、簡単な陰影を描き其の上に着色したものである。
- この圖の主題が鯛であることはいふまでもない。しかし鯛一尾では畫面が如何にも單調であるから、隈笹を配し蛤をあしらひ、構圖を複雑化すと共に感じを賑かにしてある。
- 殆ど眞上から來た光によつて描かれてゐる作者の目の位置も相當高いところにありモデルの配置が少しも重なりを見せて居ない。蓋しこの種のモデルを描くとしては最も美しい見方である。
- 南薫造氏 東京美校の教授である。氏の作風は常に溢雅明快、殊に其の水彩は輕妙な筆致、瑞々しい色彩、水彩らしい雅致、總じて氣品のある點生徒にとつて絶好の指導資料である。(南氏に就ての詳細は卷末 29 頁)
- 全體の色調は暖色の類似色であるが、笹の葉が綠色を交へて畫面に清新さを出してゐることや、鯛の描寫を念入りにしながら笹や蛤に筆数を省いて遠近の調子を考へた點、魚鱗の光や貝殻の光澤など描寫上の細心な用意が窺はれる。

指 導

- モデルを適當に配置し、其の特性、形狀、色彩、明暗等を觀察させ、位置を決定し輪廓をとらせる。

- 描寫の形式は水彩である。下描の鉛筆は克明に使はず弱く且つ軽く用ひ、實物の色調を十分觀察し、濃淡に従つて着色する。部分的に仕上げないで全體的に描き進めるやうに指導する。
- 着色の順序は魚を描き、笹を描き、蛤を描き、バツクに及ぼす。次に影を描く。更に繪具の乾くのを待つて再び加筆して、この仕事を數回繰り返へして仕上げさせる。
- 場合によつては繪具の乾くのを待たずに加筆する方法も効果的である。鯛の背や腹など最初の描寫にはこの方法によれば軟かな感じが出る。
- 物質感の表現に注意させる。特に魚の新鮮潑刺とした感じ、鱗の鋭さ貝殻の光澤其のハイライト等は表現上の要點である。

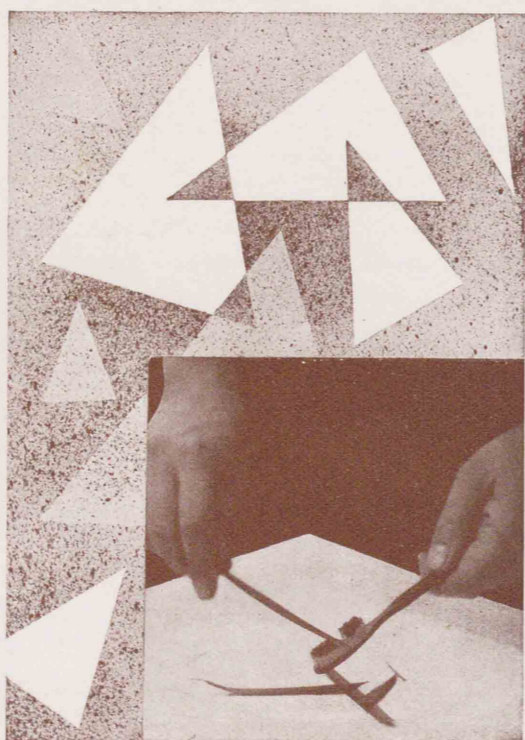
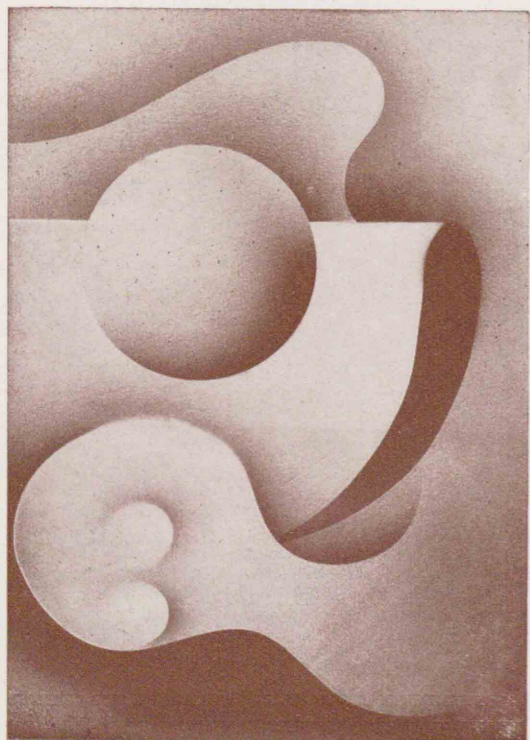
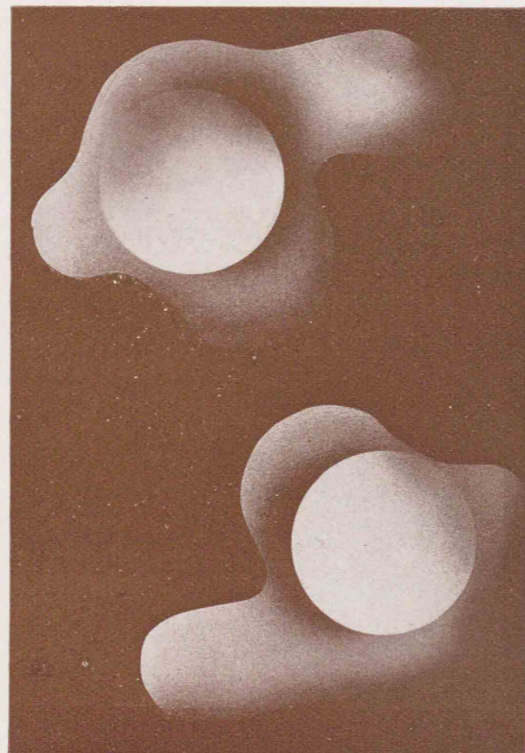
注 意

- モデルは鯛や蛤でなくてもよい。又適當な魚貝の得られない場合は本圖を臨畫させる。
- 臨畫の場合、形を正確に描くことは無論であるが、繪具の使ひ方、筆致、色調等を十分觀察して本圖の畫趣を寫すことに努めさせる。
- 本圖に於ては魚貝の周圍に黄系統のバツク(魚を置いた卓上の色)を塗つてゐるが、白布或は白紙を敷いてその上にモデルを置き畫用紙の生地を生かしてバツクとしてもよい。
- 二週に跨る魚貝の寫生は取扱上困難である描寫を早くする練習や、第一時に於て重要な部分をかいてしまふやうな指導が必要である。

準備 魚貝其の他
参照 卷末 29 頁
参考 下圖は各種の構圖例



KUNIO MINAMI.



29 霧吹法

29 霧吹法

要旨

圖案描寫の技法の一つとして霧吹による方法を知らしめ、且つこれを實習せしめる。

説明と鑑賞

- 霧吹法といふのは噴霧によつて圖案を描かうとする方法で、圖案製作の新しい技法である。即ち色霧をつくり、これを刷毛と金網、又は噴霧器等によつて畫用紙上に吹きつけて圖案をつくる。
- 左上圖はひばの葉を紙上に散らし霧吹法によつて圖案したものである。濃淡種々のひばの葉が紙上に浮き出てゐて面白い。最も濃い色のひばの葉は實物に繪具をつけて押捺したもの、淡色の廣い部分は木の葉の跡である。
- 右上圖は圓及び雲形曲線の二種の切紙をつくり、これを紙上に置いて霧吹したものである。即ち先づ畫用紙でつくつた雲形曲線を置いて霧をかけ、次に圓形の紙を置いて霧をかけたものである。新感覺のジュエル模様。
- 左下圖は切紙の曲線的のものや直線的なものを重ねたり、置きかへたり、又切り殻を置いてみたりして霧を吹いたものである。セルロイド紙を用ひれば下が透けて見えて便利である。

右下圖は各種三角形の切紙を散らして霧をかけたものである。

- 左上の寫眞は金網とブラシを利用して霧吹をするところで、畫用紙上に笹を置き、更に左手に細かい金網を持ち、右手にブラシをもつて霧をかけてゐる。ブラシは古筆の先端を切つたもの、繪具は水彩繪具をとかしたものでよい。

よい。

- 右下の寫眞は齒ブラシと笹とを以て霧をかけてゐるところである。笹は弾力のある金屬か竹製がよい。ブラシは繪具を含ませて、これを笹で扱けば霧が立つ。金網による霧は粒子が細かく、笹によるものは荒い。
- 廣い畫面に霧を吹く場合には噴霧器（スプレー）を利用するのがよい。スプレーには手押と動力用とがある。空氣ポンプによるものである。

指導

- 自然物、切紙、器具等を用意せしめ、且つ金網に刷毛、ブラシに笹等を各自教室に持参せしめて實習させる。
- 自然物は木の葉、笹等面白く、切紙は思ふまゝに各種の新しい形が得られ、器具では鉛筆、コンパス、定規等の文房具が恰好である。
- 繪の具は水彩繪具でよいが、圖案用の繪具でも差支ない。刷毛は特別なものを用意しないでも、古筆を利用して結構である。
刷毛にあまり水を含ませるのは結果がよくない。
- 霧をかける際、實物や切紙が動くとき模様が出来がよくないから豫めピンを以て固定する

注意

- 説明と實習とで一時間を充てれば十分である。金網その他生徒自身用意すべきものは忘れしめぬ様に注意する。
- 切紙による圖案は出来るだけ自由な、そして獨創的な作品をつくるやうにさせたい。
- 金網は灰ふるひを用ひて差支ない。齒ブラシは古くなつて用に立たぬものでよい。

準備 霧吹用具及び成品

参照 卷末 30 頁

要旨

表紙圖案を描かして考案創作の力を養ふと共に書物の装幀及び表紙に関する知識を與へる

説明と鑑賞

1. 書物の装幀とは表紙、見返し、扉、被紙、帙、外箱などに關する材料、意匠、模様、文字、色彩、構造などを處理することをいふ。
2. 表紙は書籍の表裏に添へて綴る紙のことで普通には文字通り紙を使用するが、板や革や布を用いたものもある。表に附けたものを表紙、裏にあるものを裏表紙といふ。多く印刷圖案が應用される。
3. 書籍は知識の泉であると共に書齋を美化する裝飾品であり、内容の良否と共に其の装幀の如何は購買心、讀書慾にも多大の關係を持つものである。
4. 従つて書籍の條件としてはその内容が立派なものであることは勿論であるが、洗練された装幀、感じのよい表紙が要求される。
5. 装幀や表紙は内容と相應はしいものでなくてはいけない。嚴肅な科學書に優美な表紙は似合はないし、又明るい少年讀物に暗い装幀は不向である。
6. 装幀には洋本、和本、横形、縦形、右開き、左開き等構造上の違ひがあり、又菊判、四六判其他大きさの上に區別がある。(詳細は第一卷第二圖、第三圖及び本卷卷末 31 頁を参照せられたい。)
7. 上段は郷土的の内容を扱つた大和の今昔といふ書物である。日本歴史に華やかな足跡を留めてゐる大和地方の今昔を語るに適はしい櫻の枝と五重の塔と大和繪風の横雲が、黄色い表紙の上に落つた美しさを見せてゐる。
8. 中段左はアルバムの表紙、新らし味のある

幾何學的構成の上に睡蓮を配したもの、睡蓮には心の潔白といふ意味がある。右はからたち(枸橘)を便化構成したもの、銀の花が圖案を引立てゝゐる。隨筆、詩集等の表紙に適す。

9. 下段左はスケッチブック、二色刷の落ついた表紙である。資料は水に黒鶴と其の雛、一羽の親鶴のために構圖が統一されてゐる。右は趣味の日本史といふ題名の所謂日本趣味の書物で、唐本仕立の雅致あるものである。濃い紫地に山櫻と鳥が便化されてゐる。

10. 杉浦非水氏 (卷末 33 頁参照)

指導

1. 校友會雜誌、郷土研究、本縣の産業、名勝案内、趣味のスケッチ等、生徒の生活に關係ある題目を選んでその表紙圖案を描かせる。
2. その本に適はしい圖案を目的として資料を選定し、これを便化構成して下圖を作らしめ、別紙地塗をした紙に下圖を轉寫し、繪具を以て本描をさせる。
3. 繪具は圖案繪具を用ひるか、若くは水彩繪具に圖案用の白を混じて描寫させる。
4. 題字は注意してこれを描寫し、且つ内容及び表紙圖案の傾向に適はしい書體とする。
5. 色は餘り多數を使はず、僅少の色を効果的に用ひるのがよい。

注意

1. 成るべく本の實際の寸法によつて描かしむるのがよい。
2. 圖畫の資料はその本の内容を説明するものであつてもよく、或は全く關係がなくて只その本を裝飾するに適するものであつても差支ない。
3. 必ずしも白い畫用紙を用ひず、色紙を利用し、これを地色として圖案をかいてもよい。又この圖案を實際化する上の版式其他を考へて圖案に當るやう指導する。

準備 各種の書籍、雜誌數冊
 参照 卷末 31 頁、理論篇 87 頁、第一卷第二圖第三圖



31 文房具その他

鈴木豊次郎

要旨

電気スタンド、インクスタンド、ブックエンド
その他卓上小工芸圖案を描かして立體圖案
の知識及び表現形式を授け考案創作を練習せし
める。

説明と鑑賞

1. 立體圖案といふのは立體的のものを對照と
して圖案的表現をすることで、小は指輪、帶
留、ピンの類から、大は家具、建築の類に至
るまで木材、陶磁器、金屬、石材其の他に互
つて其の種類は實に多數に上る。大規模のも
のは特に設計圖案と呼んでゐる。
2. 其の表現形式は投影圖法により、平面圖、
立面圖、側面圖、展開圖、断面圖等を應用す
るのが普通であるが、繪畫的表現に近い等角
圖又は傾斜圖によつて描出することも多い。
こゝではすべて其の形式によつてゐる。投影
圖法を正式に學ばない生徒に對しては却つて
その方が理解に便であると思ふ。
3. こゝに擧げたものは文房具其の他何れも手
輕なもので、之を卓上小工芸といふ。
鈴木豊次郎氏は東京高等工藝學校助教授、其
の作風は平明輕快、何れもスマートな近代的
感覺をもつてゐる。(詳細は卷末 34 頁)
4. 上段左から 45 度の傾斜圖によつて表現し
た、電気スタンドである。直線で構成した新
らしい様式、臺と支柱に木材を用ひ、電球は
四角形の曇り硝子で圍んでゐる。
5. 中央も電気スタンド、木材の臺に金屬の板
をとりつけ直線と圓によつて構成した斬新な
形である。反射光線による軟かい光を利用し
たものである。

6. 右は大理石を立體的に刻んで貼り合せたブ
ックエンド。直線と圓との構成によつてゐる。
前者と共に等角圖。
7. 中段左からインクスタンド。ガラスを扇形
に刻んでこの上にペン置、インキ壺を貼りつ
けたもの、インキ壺は旋盤による木製、塗は
ニス、ラッカー、漆等とする。
8. 右は大理石製時計、矢張り直線と四分圓の
構成による新様式、表現法は等角投影。
9. 下段左からインクスタンド、自由な傾斜圖
である。木材を材料とした直線と弧線の構成
インキ壺は膠着によつたもの、中にガラスの
瓶を入れるのは無論である。
10. 中央はブックエンド、大理石を切つて貼り
合せて作つたものである。構成は直線と曲線
と球との組合せ、其の背後に黒いバツクを置
いたのは對象の理を應用して實物を明瞭に見
せようとした表現上の手法である。
11. 右は等角圖によるフロアスタンド、木材と
金屬とガラスとを用ひたもので幾何形の構成
による圖案である。

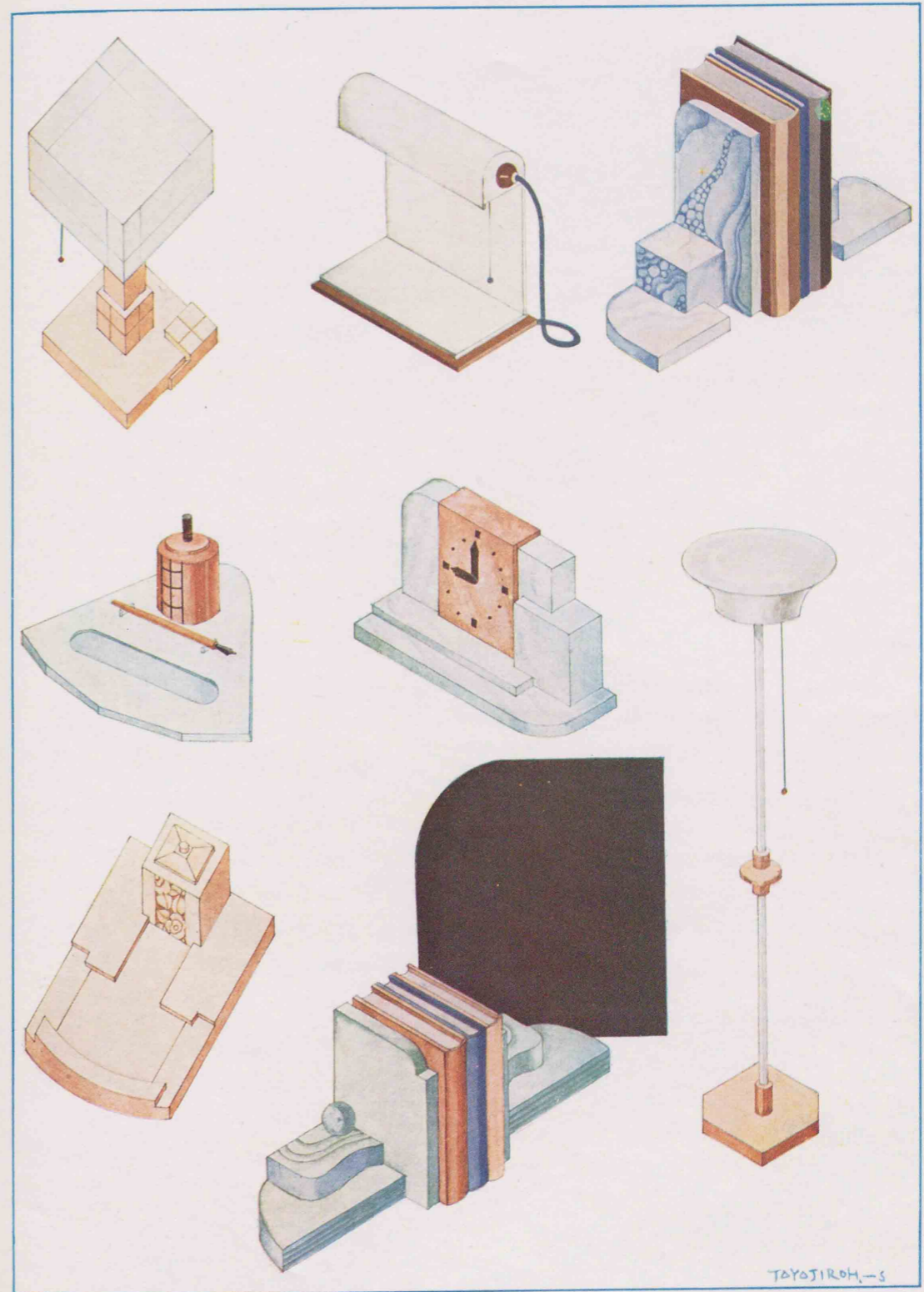
指導

1. 生徒に考案せしめるにはこの中一種を選定
させ、實際の寸法を調査させて可成獨創的に
構成させ、描寫着色させる。必ずしも定規を
用ひさせないでもよい。
2. 大體の形狀構造を考案し、それを見取圖風
に自在畫で描き、更に等角圖式に改めさせる
3. 等角圖法傾斜圖法の大様を説明し、且つ其
の製圖例を生徒に見せること。

注意

1. 作業科工作と聯絡すること。用材、構成、
塗裝、其の他實際上の知識を十分持たしめ、
製作上の無理がないやうに指導する。
2. 寸法を記入せしめる。

準備 實物各種、其の他圖案各種、參考品多數
參照 卷末 34 頁



31 文房具その他

鈴木豊次郎

教授指導の要項補遺



1. チューリップ *Tulipa gesmeriana*

百合科

和名をうつつこんこう(鬱金香)といふ。舶來の多年生觀賞用草本で高さは三十種餘りに達する葉は廣披針形で白色を帯びてゐる。四五月頃葉間より莖を抜き大形六瓣花を單生する。花の色は黄色・赤色・白色等種種ある。又重瓣花を叢生する。

栽培法 チューリップは球根であるから、花後地上の莖が黄變しに頃に掘り上げて藁に包んで貯藏して置き、十月前後取出して植込みをする。花壇に植込むには肥料を畦底に敷込むか又は土壤中に打込み、球の高さの二倍の覆土をする。鉢植込みの場合には砂質壤土に腐葉土をまぜ、油粕を腐らせたものを度々かけた土を作りおいて少量の灰をまぜ鉢に入れて植込みをする。寒い所では藁などを敷いて置けば開花を早くするによい。早咲種では三月中旬頃に開花を見る。



チューリップ

形の良否 チューリップは濃艶な草花で、葉の緑と花の赤や黄が美しい華かな對比を見せ春の觀賞用西洋種草花としてこれ以上のものはない。鉢植としてもよく、切花としても立派である。

寫生の材料としても絶好で、畫家は好んでこれを描く。鉢植としても又切花としても喜ばれる形は、割合に丈が低く、葉や莖が太つてゐてしつかりとして居り、花が大輪であることである。あまり伸び過ぎたのはよくない。

莖が長いのは花が不安定になり寫生にも感心しない。花は半開き位が特に美しい時である。

2. 植木鉢

草木を植栽する器の總稱である。昔時はセキダイと稱し底の狭き長方形の木製箱の四隅に把手を出したものを専用したが、元禄頃から陶製を用ひ形も圓錐形其の他となつた。徳川末期以來支那製が輸入され、又我國各陶器産地の藩主は競つて精巧なものを作り幕府に献上したこれを献上鉢といふ。現在種々の形を製し、釉薬有るものは濃尾地方に多く産し、又草花用としては素焼製が各地に産する。

3. 作家小傳

寺内萬治郎氏

明治廿三年十一月大阪市に生れ、大正五年三月東京美術學校西洋畫科卒業、文展無鑑査、日本大學藝術部教授、光風會々員として令名がある。

大正七年第十二回頁文「菜萸」が初出品で、爾來帝展第二回「某氏の肖像」、第三回「K 牧師肖像」を出品、大正十四年の第六回帝展に出品の「裸婦」は特選となり、翌年の第七回帝展へは無鑑査で「裸婦立像」外一點を出品、續いて昭和二年第八回帝展「インコと女」は再び特選となり翌年六月には推薦の榮を擔はれた。其の後毎回、鏡、水邊、裸婦、同じく裸婦、果物籠を持つ少女、二人の女等の出品をつづけ、八年、九年は共に審査員に擧げられ、又九年の帝展には「青衣姉妹」、十年の二部會へは「浴衣」「葡萄」を出品された。「浴衣」は黒田美術館買上同館より帝室博物館へ寄贈せられた昭和十三年第二回文展へ「赤いコート」を出品文部省買上となり、昭和十四年第三回文展へ「樂器を持てる女」を出品、同年文展審査員に任命。
〔住所〕 浦和市針ヶ谷八一八

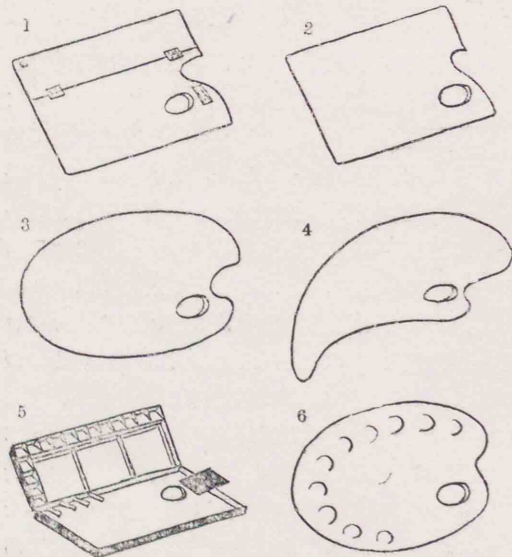
第二圖 パレット 板倉 賛治

1. パレット Palette

調色板と譯してゐる。西洋畫家が繪の具を絞り出し、この上で混ぜ合わせるに用ひる。日本畫の繪具皿に相當するものである。

これに油繪用のものと水彩畫用のものとがある。油繪用のものは普通胡桃、梨、柱等で造り方形のもの、楕圓形のもの、曲玉形のもの、二つ折形等がある。水彩畫用のものは木製にエナメルを塗つたものもないではないが、多く金屬製で、珪瑯鐵器若くはアルミニウム、角形二つ折を普通とする。圓形のものもある。

第二圖のパレットは水彩畫用二つ折の學生用のものである。よい品は珪瑯エナメルを焼付たものであるが、廉品は金屬板の上へエナメル質のもので塗装したのもある。中の仕切は繪具を入れるため、本圖は十二の仕切になつてゐるが、専門家用のものは更に多數に仕切つてゐる。畫家にとっては非常に大切な道具で、その手入には細心の注意を拂つてゐる。次の圖は各種のパレットである。



パレット 1, 2, 3, 4 は油繪用 5, 6 は水繪用

2. 筆

油繪用、水彩畫用共筆の種類と大きさは色々

である。畫家の最も重要な用具であることはいふまでもない。油繪筆として最も多く用ひられてゐるのは豚の毛筆で、豚の剛毛で造つたものである。水彩筆として最上の筆は貂毛である。其の他あなぐま、駱駝、栗鼠、たぬき等も用ひられる。何れにしても畫家の好みによつて選擇される。

筆には丸筆と平筆とが區別され、又大きさは號數によつて區別される。生徒用の筆は八號から一〇號位が普通である。

3. 作家小傳

板倉 賛治氏

明治十年一月愛知縣碧海郡新川町に出生された。初め愛知縣師範學校に學ばれたが、在學中から特に圖畫手工方面に天才的の才能を發揮され、卒業後は母校に留つて後進の指導に當られた。

後上京して東京高等師範學校圖畫手工專修科に入り、明治四十一年同校卒業、又囑望せられて母校に残り教諭、助教授を歴任して教授となり、現に圖畫手工專修科の主任として教員養成を擔當せられる外附屬中學校に於て親しく中學生の指導にも當つて居られる。

更に國定教科書編纂委員として、或は文部省圖畫科檢定試驗委員として、或は又各地の圖畫講習會講師として東奔西走の傍、日本水彩畫會々員、一曜會々長、日本手工研究會理事評議員、桐光會理事等を兼ねて居られる。藝道に功績を累ねられること實に四十年、東京高師だけでも三十年に餘る。實に氏の如きは少いであらう。正に本邦圖畫手工教育の最高權威、現に従四位勳四等に叙せられてゐる。

大正十一年第三回帝展に水彩畫「靜物」を出品、著書にはスケッチの實際、繪畫の手ほどき中等圖法教本、テーブル畫集、圖畫教育、板倉賛治畫集等がある。

猶趣味として工藝品の鑑賞、時計の蒐集と修繕、果物の通人としても著名である。

〔住所〕 東京市小石川區小日向臺町一ノ三〇

第三圖 靜物の構圖 その一

第四圖 靜物の構圖 その二

1. 蓮根

はす、おにぼすの地下莖を蓮根といふ。

はす 蓮 *Nelumbo nucifera* 睡蓮科

熱帯アジア原産の多年生草本で、我國には池沼水田等に栽培される。地中に肥大な根莖を有し、長く明瞭な節を具へ、節間には多數の縱行せる管状の空隙がある。葉は圓く楕圓形で水上に抽出し、大なるものは葉身の直徑七十糎に及ぶ。夏の日白色又は淡紅色の大花を開く。その品種は頗る多く單瓣、重瓣があり、花の色にも濃淡筋入等種々ある。

おにぼす 茨實 *Curatella ferox* 睡蓮科

みづぶき又はいばらぶきと言ひ暖地の土水中に自生する草本で全體刺を以ておほはれてゐる葉は圓形で蓮と同様で、下面は紫色をなし、脈が凸起し且つ皺を生じその大いさは二十糎位となる。花は紫色で花瓣の長さは六糎位である。

蓮根の調理法は砂糖漬、酢蓮根、蓮根の胡麻和へ、蓮根の海苔巻、蓮根の胡桃和へ等である。

2. あぢ鯨

體側の側線に沿つて並んでゐるゼンゴが側線の全部に存在することを特徴とする。まあぢ、むろあぢ、ひらあぢ、しまあぢ等がある。

3. たまねぎ *Allium cepa*

玉葱 百合科

畑地に栽培する多年生草本である。莖の高さは30—60糎に及ぶ。地下に扁圓狀の鱗莖を有する。葉は細く中空で秋日圓錐狀の花軸を葉間に立て、頂端に白色の小花を叢生し、その中に珠芽を交ふる地下莖の外嫩い葉も食用となる

玉葱の變種には左の如きものがある。

クウイン 女王 根莖は少しく扁球狀で外皮は帯緑白色、肉質は白色である。一種の光澤があり外觀が美しく早熟性である。

バンダースエロー 黄玉葱 根莖は扁平中大で、外皮は淡黄褐色滑かで一種の光澤がある。形は大で直徑が十糎に及ぶものがある。甘味があり貯藏にも堪へる品種である。

レッドウエザースフキルド 赤玉葱 外は紫赤色で肉は紫白色、軟かく香氣が高い。この種は栽培が容易で收穫が多く又よく貯藏が出来る。

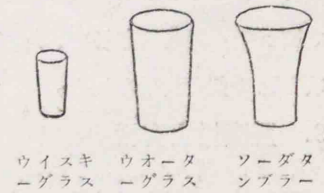
玉葱は煮て食する。又多く西洋料理に用ひられる本邦在來の葱と同じく一種の揮發成分を含み香氣があり、神經を刺激し消化液の分泌を促す効がある。又血液を清くし發汗を促し、不眠症を治し、下痢を止め、記憶力を増進し、有毒菌の防禦など其の効は多大である。

4. ガラス Glass

ガラスの飲用器、水、清涼飲料、果實水、洋酒用等、用途によつて大小形狀は種々で、特に水呑み用、其の他大型カップをタンブラーといふ。我國では通常すべてカップといふ。ウイスキーグラスはタンブラーの極めて小型のものである。家庭用には臺付のワイングラス、シャンパングラスも用ひられる。リキニーグラスは極めて小型グラスの臺附のものである。

タンブラー・

ウォータータンブラー Water tumbler は水呑



ウイスキーグラス ウォーターグラス ソーダタンブラー

て一般的で、大小種々ある。ソーダタンブラー Soda tumbler は水呑用の大形のもの、及び上部の開いたものである。(硝子器に就ては卷一第十九圖ハイライトの表現参照)

5. ソース Sauce

料理にかけ又は添へて俯める液汁で、これによつて料理に特殊な風味を添へる。ソースには二百種からの種類があるといふ。その原料となるものは煮出汁、調味料、香料、結合剤(つなぎ)、中實の各種で、中實は果實、野菜等の植物性のものと魚貝肉、鳥獸肉等の動物性のものがある。

6. 硬質陶器

本課にあるのは硬質陶器に屬する白い壺である。硬質陶器とは其の名の如く、質堅硬にして比較的熱の急變によく耐へ、且つ少しの打撃衝突等のために破損する憂少なき陶器をいふ。成形力を有し且つ耐火性なる粘土、白色を附與し且つ耐火性あるカオリン、釉面に生ずる龜裂を豫防する性ある珪石、更に以上各種の原料末を熔着すべき長石との四種を混じて製するもので、英國を主産地とし、北米及び我國のものも之に屬す。特に英國産は以上四原料の中長石中に少許の螢石末を混するは特筆すべき點である。また我國では石英或は珪石末をそのまま使用するのに對して英國は螢石を高熱に焼いて使用する等は最も注意すべき點である。

7. 三寶柑

夏蜜柑の一種、果實は稍大形で果梗部が著しく突出してゐるのが特徴である。果皮は濃黄色で質が脆く剥皮は容易で、四五月頃成熟する和歌山縣に多く栽培される。

8. 夏蜜柑と蜜柑

上段上の圖は夏蜜柑と蜜柑、何れも静岡産の

ものである。夏蜜柑は卷一第四圖参照、ここでは蜜柑について述べる。

9. みかん Citrus aurantium L. subsp. nobilis Makino

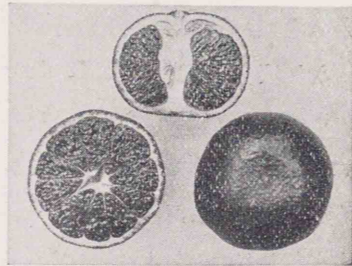
蜜柑 芸香科

暖地に栽培される常緑の灌木で、幹高さは三米餘に達する。葉は長卵形で互生し葉柄の左右に小翅があり、其の上端に節を具へてゐる。花は白色の五瓣花で熟すると黄褐色に變ずる。

この植物は我國の果樹類中多額の産出を見る果實で、その栽培變種が頗る多い。その重なるものは温州蜜柑、八代蜜柑、紀州蜜柑、絹皮蜜柑、紅蜜柑、

櫻島蜜柑等

である。その内温州蜜柑は樹性強健で豊産である。果實



早生温州

は中等大で扁圓形をなし外皮は薄く表面平滑で熟すると濃橙黄色となる。瓢囊は多漿で味が頗る甘く、その數十一、二個を有しその内に種子を有しないのを特徴とする。産地は紀州鳴戸地方相州地方は多産を見る。

蜜柑の栽培地は南面せる温暖な地が最もよいその點で紀州相州等がよいのである。土質は砂土、壤土、腐植質土何れの地でも生育はするが礫質土壤の地が最もよい品を産出する。肥料は人糞、尿過磷酸石灰、鯢粕を春秋二回に施すのであるが、鯢粕の多少によつて甘味に變化がある。即ち鯢粕が少く人糞尿の多い時は酸味が強い。優良な果實は樹齡七、八年以上を經過した樹に生ずるのである。果實は生食の外蜜柑の砂糖漬蜜柑のフライ蜜柑酒などを製する。新鮮な果皮は橙皮油の原料ともなる。

第五圖 硝子壺その他

田原輝夫

第六圖 茶器

田原輝夫

1. 硝子 Glass

硝子は支那では古來瑠璃、玻璃、頗梨等と書いた。其の昔西域から傳つたものといはれるが後魏の太武帝の時に月氏の人が石を鑄て五色の瑠璃を作つたとある。唐代には其の製法はかなり發達したが、最も精巧なものは清朝の康熙乾隆時代である。

我國ではもと支那から傳つたものであるが、延喜時代には内地で作つた形跡があり、後元龜年間には長崎で南蠻人から、又寛永年間支那人から又寶曆年間にはポルトガル人から其の製法が傳はり、嘉永年間には九州の島津、福岡藩で製作した。現今では東京、大阪、兵庫、神奈川、福岡等で製造される。そして外國製品に匹敵する立派な品が出来るやうになつた。

西洋に於ける硝子發達の経路について考へて見ると、其の發明地は詳でないが、(フェニキアともいひ、エジプトともいふ) 世界最古の硝子はエジプトから發見された。ともかく其の製法はフェニキアからローマに傳はり、又エジプトの技術はアラビヤを経てヴェニスにポヘミヤに、かくして十八世紀には英、佛、獨に製造せられ、現在は各國に於て其の技を競ひあらゆる種類のものが製出されるやうになつた。

硝子の主成分はアルカリ珪酸鹽で、これに熔劑を加へた非結晶、透明性の一種の固溶體物である。

製法の一般的なものとしては原料(珪石、アルカリ、石灰等)を細粉にして混和し、高温の窯内で熔融反應させて窯から取出し、成形冷却させる。硝子の用途種類によつて成形以後の工業的操作が異なるのは勿論であるが、使ふ原料の

種類やその純度の許容範囲に差異がある。

使用上からは板硝子、硝子壺、コップ、電球硝子、色硝子、光學用硝子等がある。又加工硝子としては縞板硝子、霰板硝子、雲板硝子、切手硝子、結晶硝子、エナメル硝子其他がある。

2. 砂糖

菓子原料、調味料、混成酒原料等として日常廣く使用されるもので、化學上これを蔗糖と稱する。砂糖は種々の植物に含まれてゐるが、經濟的に利用されてゐるのは甘蔗、甜菜、砂糖楓、砂糖椰子、蘆粟の五つである。この中甘蔗糖と甜菜糖とが大部分を占めてゐる。

商品としての種類は黒砂糖、赤砂糖、赤更目、黄更目、白更目、三盆白等である。更に再製して得たものに氷砂糖、角砂糖、玉砂糖があり、歐洲には棒状の砂糖がある。

製法による種別は含蜜糖、分蜜糖、精製糖の三つである。含蜜糖は原料植物の汁液を簡単な操作の下にそのまま煮つめ固結又は結晶させたものである。赤砂糖、黒砂糖はこれに屬する。分蜜糖は原料植物を汁液を煮つめて結晶を拵へ更に母液(糖蜜)と結晶とを分離して得たものである。黄更目、赤更目、和三盆等である。精製糖は粗糖を原料として一度溶解した後、脱色して再結晶させたもので白色である。三盆白はこれである。

甘蔗の主産地はキューバ、ジャヴァ、ハワイ、英領印度、フィリピン等で、甜菜は北ヨーロッパ、即ちドイツ、ロシア、フランス、ポーランド、アメリカ等である。

我國の産糖は約百萬噸、大部分は臺灣の甘蔗糖で甜菜糖は北海道や朝鮮に少量産する。

3. 角砂糖

白砂糖を小さな立方體に固めたものである。コーヒに入れて用ひる。

4. 急須

煎茶器で、葉茶を入れて湯をつき出す陶器製の小土瓶である。語源は明らかでないが、須は用で急の用に應ずる意であらう。又急燒の唐音であらうともいふのである。「きびしよ」といふのは急須即ち「きぶしゆ」の音の轉じたもので、急備燒・急火燒等の字を當ててゐる。支那傳來のもので、支那では若壺・茶注子・茶瓶・若瓶ともいひ、もと酒を温めるために用ひたが、我國に入つたのは室町時代かといひ、東山義政の愛器の箱等も残つて居る。各地の製品中、京都清水燒は最も精巧である。普通一般には伊勢の萬古燒が廣く用ひられてゐる。

5. 茶碗

茶を呑むに用ゐる碗である。種類に天目類といふ。建盞・曜變・灰被・油滴・黄盞・烏盞・玳瑁盞がある。唐物・高麗の類には青磁・珠光青磁・人形手青磁・雲鶴青磁・白磁・澁州・染付・吳須・祥瑞・安南・赤繪・宋胡録・井戸・井戸脇・熊川等がある。島物とは唐物と和物の中間である。和物類とは日本内地諸窯の産で唐津・瀬戸・信樂・織部・志野・薩摩・朝日・伊賀・萩・出雲・仁清其他國燒のもので樂燒類には長次郎とか、「のんかう」とかの樂家のもの、光悦其他がある。手造類の宗匠又は數寄者の自作のもの等で、名物茶碗としての各種ではその形状によるものには井戸形・筒形・鹽筒・馬蘭・平・鹿口・杵形・依形・編笠・筆洗・片口等がある。又季節によつて夏茶碗・冬茶碗の稱があり、前者は淺く後者は深く、寒中は筒茶碗を用ひる。平常用としては値段も形も多種多様である。

6. 盆

盆は水或は酒を盛る器である。鉢又は洗滌具として時々祭禮に當つて穢血を盛ることもあつた。現今では淺くして専ら物を盛るものとして用ひるが、元來洗・銅・盆は同種のもので、洗は淺く、銅は深く盆は中間である。現今は扁平で

縁淺く、専ら茶器、食器等を載せるに用ゐるものである。漆器類が最も多く、木製の割物・アルミニウム・ニツケル鍍金・銀鍍金及び陶器製もある。茶銚二個、茶盤六個を置くに足る寸法即ち横九寸から一尺堅七寸から八寸に作るが法である。金屬製のは洗盤ともいひ、寸法は同前である。流儀により一文字盆を使用することがある。茶盤五個を置くに足るのである。

7. 茶道

茶を點てこれを飲むには古來禮法があつてこれを茶道といふ。嵯峨天皇の御宇に煎茶が始められ、後鎌倉室町時代に及んで抹茶も隆盛を極めた。煎茶と抹茶とは夫々其の器具を異にする煎茶用として必要なものは急須、茶碗及び湯ざましで、現今煎茶器一組と稱してゐるのは茶碗五個、急須一個、湯ざまし一個である。抹茶用の器具は頗る多く其の主なるものは茶碗、茶筌、布巾、水差、湯こぼし、棗、茶杓、茶釜等であるが、手前によつては其他數多の茶具を要する。この外番茶がある。そして茶碗と急須とを要する。番茶器は煎茶器に比して柄が大きく、又抹茶碗は煎茶茶碗に比して其形頗る大きい。

8. 作家小傳

田原輝夫氏

明治三十三年三月佐賀縣佐賀郡大詫間村に出生された。大正八年佐賀縣師範學校卒業、更に大正十一年東京高等師範學校圖畫手工專修科を卒業され、大分縣立中津中學校教諭として赴任されたが、大正十三年四月同校を辭任の上上京東京高等師範學校と東京府立第七中學校の囑託として多年圖畫教育の實際に當られた。昭和十三年四月東京高等師範學校訓導兼助教授となり現に附屬小學校並に圖畫手工專修科の指導に關係してゐられる。

教務の傍ら畫道にも精進され、現に太平洋畫會會員である。大正十一年平和博に「靜物」を出品以來帝展に五回、二部會一回、文展に三回及び大正九年以降毎年太平洋畫會展に出品されてゐる。

〔住所〕 東京市瀧野川區中里町三八四〇

第七圖 インキ壺

赤城泰舒

1. インキ Ink

インキは書畫をかくためにペンにつけて用ひるものである。往昔は我國にはなかつたのであるが、西洋諸國の文物輸入と共に舶來し、其の製法も傳つて明治以後大いに廣まり、特に最近萬年筆の使用と共にインキの重要性は顯に加はつた。

昔學問に志し、研究に携るものが硯に墨、矢立に筆といふものを用ひたのに對して現今の人人がペンやインキに恵まれたことはどんなに便利なことであらう。文化の發達のためにペンやインキが盡した功績は決して尠くない。

インキとして主に用ひられるものは筆記用としてブリム・ブラック色である。描畫用とは専ら黒が用ひられ、又青や赤にも種々の用途がある。之等のインキの製法については卷一巻末の第一圖に述べたから参照せられたい。

インキの瓶には元瓶と小瓶とある。元瓶は普通二十四オンス入で陶器の瓶と、ガラスの瓶とがある。本圖は小瓶で無論ガラス製である。萬年筆用のインキで質は精選されてをり、瓶も體裁よく出來てゐる。

2. スポイト Spoit

萬年筆にインキを注ぎ入れるに使ふ。ガラス管の一端を細め、一端にはゴムのポンプをつけ空氣の壓縮によつてインキ瓶からインキを吸ひ込みこれを萬年筆へ移す役目をする。

3. 外箱

インキ瓶を入れる外箱は地厚の洋紙を展開圖によつて切斷し、胴は糊着とし上下兩端面は紙を折り合せたものである。

色目や模様は中に入れるインキの種類及び製造会社の關係によつて一定ではない。

4. 作家小傳

赤城泰舒氏

明治二十二年六月、静岡縣駿東郡長泉村に出生された。初め太平洋畫會及び日本水彩畫會に於て洋畫の研究を積まれ、明治四十二年第三回文展に水彩畫「高原の朝」を出品して好評を博され爾來毎年同展に「讀書」、「綠色の流」、「白き砂」、「夏の水」、「赤き村の午前」等を出品された。

帝展になつてからは大正八年第一回に「向日葵」、第二回に「霧深き夏の朝」、第三回に「山上の小洞」、第五回に「小兒像」、第六回「山上の湖」と次次出品され水彩畫のために大いに力闘された。又昭和二年第八回帝展には「鏡」を出品された。二科會へはその第一回に「山」と「畑」との二點を出されたが、その後長い間これへは出品されず、帝展にのみに出された、しかし昭和三年から帝展出品をやめて再び二科に歸り第十五回展へ「ギター弾く少年」と「赤い上衣」とを出され、引きつづき第十六回に「靜浦風景」、「内海遠望」、第十七回に「赤衣」、「少女と花」、第十八回に「少女像」、「靜かなる海景」、第十九回に「高原の青沼」、「夏装」、第二十回「アツコルジョンを奈く」、「夏季祭記念」、昭和九年第二十一回に「雨海を渡る」、昭和十三年第三回文展「雲根淨土」、昭和十四年第三回文展「城山」を出品。

現に文化學院に教鞭をとられ、日本水彩畫會及び光風會の會員に列せられてゐる。「水繪の手ほどき」の好著がある。蓋し多年水彩畫壇のために健闘されつつある斯界の重要な存在である。

〔住所〕 東京市澁橋區下落合三の二、一二五

第八圖 アネモネ 松村 巽

1. アネモネ Anemone coronaria

キンポウゲ科
毛茛科

地中海沿岸に自生する多年生草本で、莖の高さは20 匁より50 匁に達する。地下に塊根を有し葉柄を有し葉片はにんじんの葉の如く細裂し總苞は葉状で細裂してゐるが無柄である。春日楕形けしの花に似た五瓣花を着生する。花の色は、紅色、紫色、青紫色等種種ある。観賞用として専ら栽培されてゐる。

栽培法 十月中旬頃に、よく耕して腐熟の肥料を施した土壌又は鉢に根莖を植込み、霜除けをしておけばよい。繁殖は播種、株分け、芽挿などによる。



アネモネ

2. 作家小傳

松村 巽氏

明治廿六年一月東京に生る。初め白馬會研究所に入つて洋畫の手ほどきを受け、のち太平洋畫會研究所に移つて中村不折、満谷國四郎氏等の指導を受けられた。

明治四十四年文展第五回に「静物」を出して褒状を受けらる。

大正六年第十一回文展「静物」。

七年第十二回文展「花と果物」。

十年第三回帝展「果物を剥く女」。

十三年第五回帝展「浦島草」等出品。

大正十四年第六回帝展に「面のある静物」を出して特選の榮譽を膺はる。

大正十五年第七回帝展「洋花園」及び「盛果圖」の二點を無鑑査出品。

昭和二年第八回帝展「椅子の静物」。

昭和三年第九回帝展に「黄布の静物」を出して再び特選となり、昭和四年四月帝國美術院より推薦された。其の後帝文展への出品は左の通りである。

第十回帝展「卓上花果」。

第十一回帝展「窓邊」。

第十二回帝展「黄色の室内」。

第十三回帝展「朝鮮服の娘」。

第十四回帝展「窓邊の果物」。

第十五回帝展「石楠花」。

昭和十一年文部省招待展「菊花」。

昭和十二年第一回文展「菊」。

昭和十三年第二回文展「桃」。

昭和十四年第三回文展「芍薬」。

〔住所〕 東京市本郷區駒込林町一七七

第九圖 倒像

第十圖 水呑とレモン

板倉 賛治

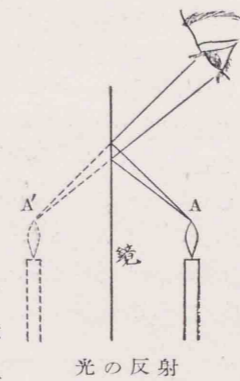
1. 倒像について

倒像については本欄に於ても其の大體を述べたが、更にこれを敷衍することとする。

光線が物體の表面に於て反射作用を起し、そのために水面或は鏡面の様なところに其の映像を作ることは能く人の熟知するところである。

凡そ平面鏡の前に物を置くと、その物と同じ形のもが鏡の背後にもあるやうに見える。

物體の一點 A からは四方に光を出してゐるが、その中鏡の一部の間で反射した光だけが眼に入る。この反射光



線の延長線は反射の法則から A の對稱點 A' に集まる。従つて眼には恰も A' から光が出たやうに感ずる。A' 點を A 點の像といふ。物體の他の點についても同様である。かやうにして平面鏡による像は鏡の後方に於て鏡から物體までの距離と等距離の所に生じ、大きさは物體と等しい。

光の反射の法則は次の通りである。

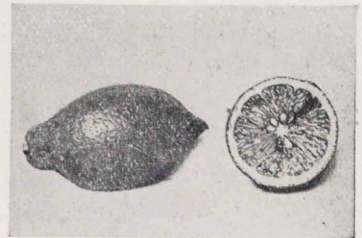
1. 入射光線と反射光線と、入射點に於ける垂線とは一平面上にある。
2. 入射角は反射角に等しい。

2. レモン Citrus medica

檸檬 芸香科

東印度原産の常緑灌木である。歐洲では地中海に面する地方亞弗利加北部に栽培される。樹間に長刺があり、葉は倒卵形で葉柄に翼がない

縁邊に僅かに鋸齒がある。果實は楕圓形で兩端がやゝ尖り、外面黄色で果皮がうすく光澤を有してゐる。



レモン

果實は芳香がある。酸味の強いために生食するに適しない。其の皮より一種の佳香ある揮發油を製する、これをレモン油と言ひ、清涼劑・魚鳥獸肉及び菓子の香味料とし、或は香水に調合する。果肉は枸橼酸を含み強い酸味を有する故この搾り汁を調味料とし、又藥用及び飲料に供する。リモナーゼといふ飲料はこれより製したものである。

3. 珐瑯鐵器 水呑

名稱と分類 珐瑯エナメルとは溶融し易きガラス質の總稱で、これを鐵器に融着した製品を珐瑯鐵器といふ。薄物珐瑯鐵器と鑄物珐瑯鐵器に大別する。鍋、洗面器、水呑等は薄物で、西洋風呂、ストーヴ用器具は鑄物珐瑯鐵器である。

着色珐瑯 これには種々の金屬化合物を加へたフリットを用ふ。草色には酸化クロムと酸化コバルト、また酸化銅のみを、青には酸化コバルト、緑には酸化クロムを、黄色には酸化カドミウムを用ひ、鮮麗なる紅赤色珐瑯は、硫化カドミウムとセレンより成る赤色顔料を上掛釉藥粉砕の時混合する。黑色珐瑯はマンガン、鐵、コバルト等の金屬を多量に加へ溶融して作る。

我國にては近年珐瑯鐵器生産及輸出が漸次多くなりつゝある。

4. 作家小傳

板倉 賛治氏

東京高等師範學校教授(本卷卷末2頁參照)

第十一圖 塗盆と果物 清水良雄

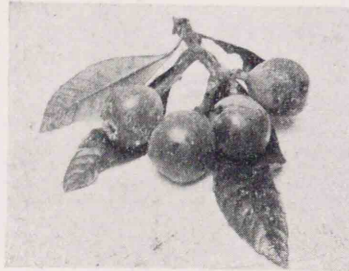
1. 塗盆

第一卷第六圖の部に詳述した。参照されたい。
(第一卷巻末解説 6頁)

2. びは *Eriobotrya japonica*

枇杷 薔薇科

莖の高さは六米に達する。葉は大なる長楕圓形で鋸齒を有し下面に褐色の毛を密生する。帯黄白色の小花を年末に開く、香氣ある單瓣花で短縮せる複總狀花序をなす。翌年の夏果實が成熟する。圓形で黄色を帯び外面に毛茸がある。



枇杷

味は甘酸で佳美である。この植物の改良種には、田中枇杷、茂木枇杷、福壽園などある。何れも果實は七〇瓦内外に達する。その内福壽園は早生種として風味が頗るよるしい。

生食する外、舍利別を作り又枇杷酒を作る。枇杷酒は熟果を桶に入れて潰し自然に醗酵せしめて作った一種の酒である。枇杷の葉の毛を去り乾燥したものを主劑として煎じ出した汁を枇杷葉湯といひ暑氣拂ひとして薬用にする。

枇杷の材は木剣などの料とせられる。

3. りんご *Malus pumila*

苹果(林檎) 薔薇科

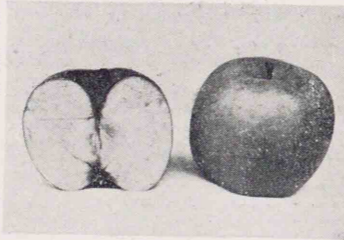
林檎は寒冷な氣候を好み、我が東北地方北海道の南部及び朝鮮には良品を産する。明治の初年米國から苗木を輸入して栽培したのが始めて、今や盛んに栽培せられてその需要が多くなり、我が國の果樹中主要なものとなつた。

林檎の品種は數百と稱せられるが我が國に栽培する主要な品種は左の通りである。

紅魁 早熟で、果實の形狀は扁圓で大、果皮は紅色地に深紅色の條斑があり、白粉を被つて美しい。品質は中の下、暖地に於ても能く結果する。

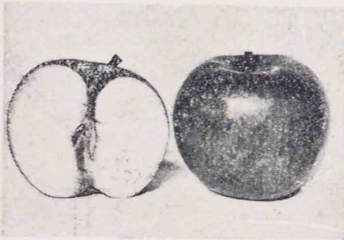
祝(中成子)

中熟で、形狀は楕圓で大、果皮は黒綠色で、紅色の條斑がある。品質は上等、未熟の際でも酸味が少なくて食べられる。



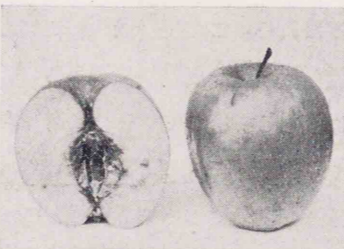
祝

紅玉(満江) 晩熟、楕圓で中又は大、果皮は満面紅色を呈し美しい。品質は上等果肉は黄色で芳香が高く貯藏に堪へる。



國光

國光(晩成子) 晩熟で、扁圓で中形、果皮は黄色地に暗紅色の條斑があり、斑點が著しい。品質は最上貯藏に堪へる。



鳳凰卵

4. 作家小傳

清水良雄氏

明治二十四年東京生。大正五年東京美術學校西洋畫科卒業。大正二年以來文展及帝展に出品をつゞけ大正六年に特選となり爾來度々特選を重ね、大正十五年には帝展委員に擧げられ、昭和十一年よりは新文展に出品されてゐる。詳細は卷一第十七圖参照。(卷一巻末解説 17頁)

第十二圖 調子とその表現

1. 調子

樂音を特性づける要素で、發音體の單位時間中の振動數によつて定むるもので、振動數の多い音は高く、振動數の少ない音は低く、發音體、音の強さが異つても、振動數が等しいと我々の感ずる音の調子は變らない。音の調子の差を音程といふ。

一般に調子とは音樂にいふ言葉であるが、色彩を同一色の濃淡に換算して考へてみる場合にこれを調子といふ。又繪畫上に於ては、墨繪彩色畫にかゝはらず畫は常に其の濃淡の統一がなければならぬ。その畫面に於ける感じを調子といふ。濃淡明暗とは離れて畫面全體から感じられる色調をも調子といふことがある。温かい調子とか、強い調子とか、寒い調子とかいふが如きである。

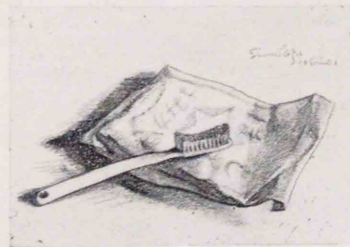


木炭畫(片岡徳郎氏作)

2. 調子の教育

生徒の圖畫では調子の教育が通弊として劣つてゐるやうである。繪畫表現の中心となる要素は形、色彩、調子であるが、そのうちで最も認識を欠き表現不十分なのは調子の問題である

深味の無い作品、奥行のない風景畫、扁平に見える靜物畫、とも



鉛筆畫(清水良雄氏作)

すれば速いものが畫面の一番前に乗り出して浮いて見えるやうな繪



寫眞

は多くの場合調子の表現の不十分に基因する。總じて遠いものは弱く、近いものは強くといふ常識、遠いものを淡く、近いものを濃くといふ定期を十分に心得させることが大切である。遠山の麓に見える白壁の家は、白には違ひないが、近景にある家の障子の白さに比べれば殆ど比較にならぬ程、弱くて淡い筈である。勿論純白に見える筈もない。

木炭畫や鉛筆畫は形の研究にも大切であるが又調子の勉強には何事も措いてもやらねばならない。黒い色の調子によつてあらゆる對象は立派に描き出される。古來日本畫中の墨繪と稱するものは調子に深い考慮が拂はれてゐる。四條派に於ても南畫に於ても其他に於ても、調子の表現は十分に顧慮せられ、日本畫家は常にかういふ勉強をしてゐる。



毛筆畫(横山大観氏作)

寫眞は多分に器械的のものであるが、これには自ら調子が表はれる。色を考へないで遠近明暗を取扱ふものとして寫眞もまた我々のよき參考資料である。

3. 調子の表現と實例

茲に擧げたものは木炭畫と鉛筆畫と日本畫の墨繪と、實景寫眞との例である。

1. 色の配合

如何なる色と如何なる色を組合せれば人に美感を起させ得るかといふことは困難な問題であるが、多数の人々の経験に徴して法則的な配合法を次に挙げる。

同種色の配合 同一色を明暗濃淡に區別して配合することで、この方法は最も簡単な配色であるが結果は高尚温雅で失敗がない。但し婉麗華美は望まれない。

類似色の配合 類似色とは同一の色ではないが似てゐる色である。即ち共通の色を含んだ色で、例へば黄と橙、青と緑のやうなものである。別にこれを關係色ともいふ。この配合は目の覚めるやうな華麗さはないが、上品で穩健優美である。

餘色の配合 餘色といふのは本圖色環に於て互に向合つた色、例へば赤と緑、黄と紫等といふので、之等の配色は互に色を引立たせるものである。即ち赤と緑に於て赤は益々赤く緑は益々緑の度を増すために濃潤とした感じがあるしかし稍もすれば卑俗に流れて高尚を缺く虞があるので比較的困難な配色法とされる。

白と黒との配色 白と黒との配合は嚴格、鮮明、直截で堂々たる配色である。白襟に黒紋付白チョッキに黒の上着等誠に端正の姿であるが場合によつては森嚴に過ぎることがある。更に中間色を加へれば其の感じを和らげ得る。白及び黒は他のすべての色と配合して結果がよい。

金銀の使用 金銀は何れも壯重、嚴肅、豪華の感じがあり、他の色と配合して何れにも調和する。

2. 色と教養

我等をとり巻く萬象に色彩があるといふことは我等の世界を美しい明るいものにしてくれる人類と色彩とは切り離すことの出来ないものである。原始人と雖も色彩を愛しこれを重視した。しかもその好みは何れも原色又はこれに近いものであり、其の配色は單調であつた。然るに文化の進展は人々に多種多様な色彩を教へ其の配色を複雑多岐に導いたのである。

けれども我等は自分の衣食住に色彩生活を取り入れこれを個性化することに於て遙かに原始人に及ばないとされてゐる。

例へば美しく着飾つた令嬢の衣服が、其の色彩は徒らにけげばしいのみで、そこには些の趣味も教養も認められず、選擇の標準が何處にあるか分らないやうな場合を我等は度々見てゐる。この着物にはこの帯、帯締はこの色、半襟はこれといふたしなみは多少とも其の服飾の上に出したいものである。

住宅の場合に於てもさうで、何か自分の好みの色といふものが具現された方がよい。

料理に於ける色彩の配合は相當進歩してゐるやうであるが、衣と住とに於て我等は一層其の教養を色彩生活の上にも及ぼしたい。即ち色彩の官覺を鋭敏にし、配色上によき好みを持つやうにしたいのである。

尙本課に關しては理論篇第二篇第三章色彩に關すること(37)頁に詳述してあるから参考に資せられたい。

1. 文字の主要目的

裝飾文字を意匠するにはすらすらと讀ませることと審美眼を満足させることとの二條件が必要である。讀み易くするためには文字の特徴をはつきりさせることと、且つ場合によつては省略法を用ひて簡約してもよい。美的にするといふことは必ずしも複雑であるとか、凝つてゐるとかといふことではない。瞥見して不快感を起させない形態美を發揮することで、一般的に單純簡素が喜ばれる。

2. 字體

漢字、假名、外國文字、夫々に各種の字體がある。しかも在來の書體の外に最近新しい書體が次々と考へられ、且つ裝飾文字に至つては自由に限りなく創作される。漢字の筆記體に楷書、行書、草書、隸書、篆書があり、印刷體に清朝、明朝、宋朝、草書、隸書、ゴシック、丸ゴシック、平ゴシック等があり、英字に筆記體印刷體があり、筆記體にも印刷體にも又種々の書體があるが、これ等の外相當知られてゐる書體を漢字について挙げてみる。(理論篇90頁参照)

拍子木文字 現今のゴシック文字で稍太目のもの籠字 二重に書割つた文字、二重文字のこと。

小路割(こうぢわり) 小路の區割圖の如きもの、印綵の腰字。

蟲喰文字 書割の所所に蝕ばまれたやうなところがある。

陰文字 白字に出した籠字の稱。

花邊文字 字の一劃毎がすべて花邊狀をなしてゐる

楔文字 一劃一劃が、くさびの形即ちV字形をしてゐる。

劍形文字 文字の端が劍先形になつてゐる。

刷毛書文字 刷毛形の平筆で書いたもの。英字のルンドペン書の如し。

針金文字 細線の書體恰も針先で書いたやうなもの
平文字 左右より天地の短いもの。

3. 意匠の順序

裝飾文字を意匠するには考案と技術との二段の順序が必要である。考案は技術に俟つ前に十分に熟慮工夫すること、技術は表現の技巧である。第一段の考案に於ては方眼紙 Section paper に縦横の想を練る。そしてスケッチ(略圖)を何枚ももつくり次に本描をする。

4. 用具

下描用として方眼紙、鉛筆、仕上用として製圖器械各種が必要である。墨入には烏口の外作者の好みによる各種のペン、毛筆等が使はれる。

5. 圖例の解説

圖示された裝飾文字の中解説を敷衍しよう。

Fine art 美術。

名曲鑑賞 名曲に接して精神的感銘を覺える意である。

スポーツニュース Sports news 運動の報導
Colour 色。

興亞 昭和十二年の七月に蘆溝橋事件を發端として支那事變が勃發した。この事變は我國が東洋永遠の平和建設を目標として起つた聖戰で、所謂興亞の大業に邁進したのである。興亞とは亞細亞の興隆の意で、事變が生んだ新造語である。

動的なリズム リズム Rhythm は律、節奏、即ち動きつつある節奏の意。

モノグラム Monogram 組合せ文字、氏名を圖案化したもので、多く頭字等を資料とする。サイン代りに使用する。圖例は大智氏のモノグラムと見るべきである。

スター Star 星。

Moon 月。

Loneiy moon 寂しい月の意。

6. 作者小傳

大智 浩氏 (次課に詳解してある)

1. やたがらす 八咫鳥

神武天皇御東征の時、これを導き奉りし靈鳥である。名は鴨建甕津身命といひ、神魂、命の孫なりといはれる。天皇熊野山中に入つて、険しい山路にお困りの時に、八咫鳥が来て、皇軍を導き、遂に菟田に出でさせ奉つた。次で天皇兄磯城を徴さんとするや、八咫鳥その營に來り、鳴いて天神の子汝を召す由を告げた。兄磯城、憤つてこれを射る。鳥避けて弟磯城の宅に行きこれを伴つて歸つた。一説に、鳥見に靈を現はした金鷄も亦建津身命なりといふ。天皇即位二年、功を賞し給はつた。子孫賀茂縣主となる。後慶雲二年八咫鳥社を大和の宇陀郡に建てて命を祀つた。

2. リーラ Lira

リーラは古代ギリシャやユダヤで盛に用ひられた弾弦楽器で古代洋楽器中の代表的のものである。古代のものは膝の上のせて弾いた小形なものであつたが、十七世紀に巨大なものが出てきた。

3. パレット

本巻第二圖(2頁参照)に詳解がある。

4. 富士

富士火山帯の盟主、高さ 3776.41 米、最近隣接の箱根山を含む 69100 町部の面積が富士箱根国立公園に指定せられた。富士登山は推古天皇六年秋九月聖徳太子が神馬によりて登山せられた傳説に初まり、近年は一般登山者増加して年數萬人に達してゐる。(詳細は巻一、31 招待券その他の項参照)

5. さくら Prunus

櫻 薔薇科

櫻は日本の花として大和心の表徴となつてゐる。山櫻、染井吉野、八重櫻、彼岸櫻、枝垂櫻其他種々ある。(詳細は巻一、三一招待券その他の項参照)

6. トラツク Track

競走の行はれる走路のことで、普通二つの半圓とこれを結んだ二直線から成り、一周の距離は四百米となつてゐるが、近來は三つの圓周を巧に組合せたものを用ひ一周五百米とする傾向がある。

7. 作家小傳

大智浩氏

明治四十一年八月、岡山縣に生る。昭和四年長岡高等工業學校電氣工學科卒業、昭和十三年東京美術學校工藝科圖案部を卒業。昭和十年圖案並に工藝に關する作家集團、銀跡會を組織し毎年展覽會を開催、委員として出品されてゐる。東京美術學校卒業の際銀時計を受けたる秀才である。

トヨタ自動車車體設計懸賞に應募二等賞を受又東京市水道局水道設置ポスター懸賞募集にけ應募一等賞を受け、國民精神總動員ポスターに一等當選、昭和十四年七月内閣情報部週報寫眞週報の合同ポスターに二等當選。同八月國民精神總動員主催時局ポスター三等當選。

現在味の素本舗株式會社鈴木商店廣告課員として活躍せられてゐるが、また雑誌「味」の編輯、一部の廣告行政をなしつつある。

[住所] 東京市目黒區上目黒七ノ一八

1. 透視圖法

建築物の描寫に當つては遠近の理法を知つてこれに従はねばならない。これを圖學的に説明したものは透視圖である。透視圖の理論と實際とは次の通りである。

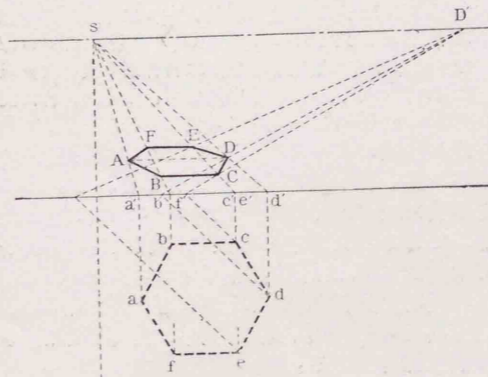
原理 物體の形狀をその遠近によつて區別し日常我々の眼に映するやうに一平面上に描出する圖法を透視圖法といひ、その圖形を透視圖といふ。即ち物體を有限の距離から望見して其の形を物體の前方にある平面上に描出する。即ち硝子窓に映じた形を辿つてそのまゝ外景を硝子窓上に描寫するやうに、物體と觀點との間に一つの透明な直立畫面を假設し、物體の各部と觀點とを結ぶ視線が、同畫面と交る諸點を求め、これをつないで透視圖を得る。この圖法によるときは畫面、觀點、物體の位置の遠近によつて圖形もまた大小種々に變化するを以て、この圖法を遠近畫法ともいふ。

畫面に對する物體の位置によつて研究の便宜上透視圖法を三種に別ける。平行透視圖法、成角透視圖法、傾斜透視圖法これである。普通には傾斜透視圖法は用ひることが少い。

2. 平行透視圖法

水平な直線が畫面に平行するやうに物體を置いたときに畫く圖法である。これは次の二定則を基礎として畫く。

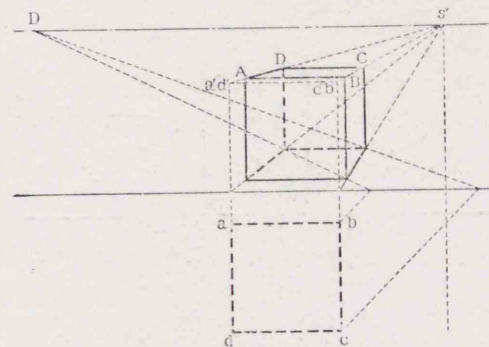
1. 畫面に直角なる凡ての直線は中視點に於て消失する。



正六角形の平行透視圖

2. 畫面に 45° をなす凡ての直線は距離點に於て消失する。

即ち先づ物體の位置を定めるために投影圖法を之に適用して畫面を立畫面、地平面を平畫面と見做し、その兩投影に基づき物體の各點を通り前記の二直線を引き、その交點を求めて物體の透視圖とする。一般的方法として次に正六角形及び立方體の透視圖を擧げる。



立方體の平行透視圖

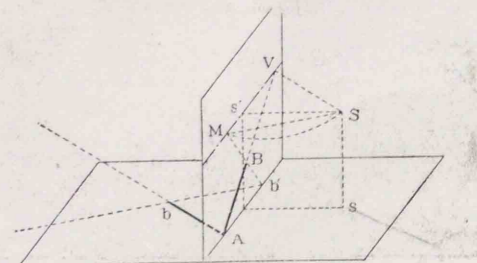
3. 成角透視圖法

水平な直線が畫面に傾斜する位置に物體を置いたときに適用する圖法である。これは消失點と測點とを用ひる方法である。

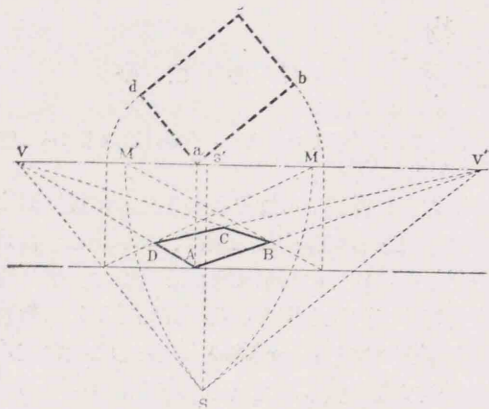
1. 消失點とは畫面に傾斜する直線が畫面に交る點即ち其の直線の消失する方向。
2. 測點とは畫面に傾斜する直線の長さを圖上に測定する點。

即ち畫面と α 角をなして地平面上にある直線 AB の消失點は V であり、M は測點である。S は視點、SS は眼の高さ、SS' は中視線、S' は中視點、而して $MV=SV$ である。

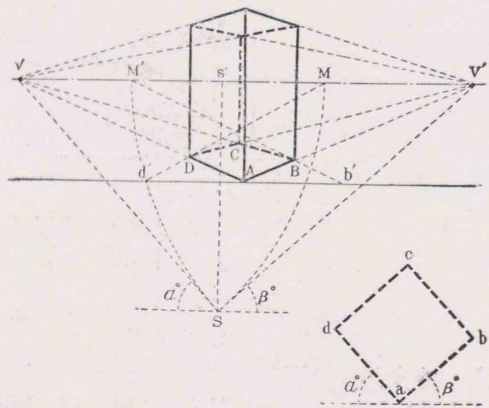
この圖法による矩形及び正四角體の透視圖は次の通りである。



直線の成角透視圖法



矩形の成角透視圖



正四角塔の成角透視圖

4. 玄関

家屋の出入口を玄関といふ。玄関といふ語は本来禪房の表入口を指したものであつたが、書院造以後次第に住宅の表入口を云ふやうになつた。我國の封建時代には、表入口の前に、地上15 糎から20 糎の高さに式臺と呼んで板敷を設け、こゝに駕籠を下したもので、この式臺付の



東京科学博物館の玄関

入口を玄関と呼んだものであるが、現今ではそのやうな區別はない。本屋から突出し屋蓋を有するもの、所謂我國の玄関前の屋根の下、それが柱立であると葺下しの庇であるとに拘はらない。玄関は英語のポーチ Porch に當り戸を開いて入つた中の土間の部分がヴェステイビュール Vestibule に當る。アメリカの住家に見るバックポーチ back porch 又はリアポーチ Rear porch と呼ばれるものは寧ろ臺所口にあたる。我國の住宅に於て表正面の主として訪客のための入口を表玄関又は正玄関といひ、これに對する家族専用の入口を内玄関又は裏玄関といふ。西洋諸國はこの様に表裏に玄関を設けることがない。

5. 作家小傳

石井 柏亭氏

石井柏亭氏は名を滿吉と云ひ、明治十五年三月東京下谷生。最初嚴父石井鼎湖氏に日本畫を學び、二十八年から三十七年まで印刷局に勤め専ら彫刻圖案に従事せらる。三十年に父を喪つたので翌年から淺井忠氏について洋畫を修め、更に中村不折氏の門に學んだ。その後先聲會に加入し、中央新聞に關係し、東京美術學校選科に一年在籍し雑誌「方寸」を出された。

明治四十三年渡歐、大正元年歸朝、國民美術協會を創立、水彩畫會を同志と共に起し、大正三年には時の文展に反對して有島生馬、山下新太郎等十氏と共に二科會を組織し、昭和十年帝展改組に際して帝國美術院會員の任命を受け同會を去り、昭和十一年安井、有島、木下諸氏と共に一水會を創立された。

文展へは明治四十年の第一回以來殆ど毎回出品して第三回「龍野川口」、第五回「サンミシエル橋畔」、第六回「荷蘭の子供」は共に褒狀、大正二年文展第七回に「滯船」「N 氏と其一家」「並藏」の三點を出して「滯船」は二等賞の榮冠を得た。二科會創立後は文展及び其の後の帝展へは全く出品せず、多く二科會に發表されたが、今は一水會に發表してあられる。

氏は油繪に長するばかりでなく、水彩畫、テンペラ畫、日本畫にも特技を有しされる。かの二等賞になつた「滯船」はテンペラにて描いたものである。又文筆にも長じ「我が水彩」「柏亭日本畫式」「歐洲美術遍路」「マネエ」「滯歐手記」結城素明・黒田鵬心兩氏との共著「美術辭典」、西村貞氏との共編「畫の科學」、自傳「明暗」等多數の著書がある。

〔住所〕 東京市荒川区日暮里渡邊町一〇五〇

第十八圖 樹木のスケッチ 寺内萬治郎

1. まつ Pinus

松 松杉科

山野に自生する最も普通の種類である。樹皮の赤色なるをあかまつといひ、樹皮の黒色なる種をくろまつといふ。何れも高さは三十米以上に、周囲は六米餘に達する。あかまつは雌松とも稱し、針狀葉はくろまつよりも細く少々柔軟である。山地に自生しその根元には、まつたけを生ぢしめるを以て知らる。くろまつは雄松とも稱し葉が強剛で太い。海岸地方によく自生する。

松は四季緑色でその姿の美と共に觀賞用に供せられ、材は乾燥しておく時又は常に水中にある時はよく久しきに堪えて朽腐せず、故に建築土木用として使用せらる。

2. たけ Bamboo

竹 禾本科

竹とはまだけ屬、くまささ屬、めだけ屬、とうちく屬、かんちく屬、やだけ屬其他數屬の種類の總括名稱である。莖を稈といひ、高さは十數種の小形種より大なるは十五米に及ぶものがある。何れも明瞭な節を有し節の間は中空で、稈は木質化して甚だ堅い。葉片は短柄を有し且つ葉鞘との間に明瞭な節がある。小形種では毎年開花するものもあるが大形の種類では主に周期的に十數年に開花し、結實と共に枯死するものである。我國に普通栽培される種は次の如くである。

まだけ 一名かたけといふ。東北地方以北を除いて各地に繁殖してゐる。

はちく 一名くれたけ、淡竹といひ觀賞、建築器具用として廣く栽培されてゐる。

まうそうちく くれたけ又江南竹といふ。はちくと共に一般に栽培される。

ほていちく 一名こざんちく、人面竹といふ。莖を釣竿、杖、傘の柄などとする。



まだけ はちく ほていちく

きつかうちく 佛面竹、龜紋竹と書く、まうさうちくの一變種で、節は斜に龜甲形をなす。觀賞用、釣竿、杖などにする。

きんめいちく まだけの栽培變種で莖は黄色で綠色の縦溝があり、葉には白色の線がある。

くろちく 地上莖は初め綠色であるが、年を経るに従ひ暗紫褐色を呈する。

しはうちく 一名かくだけといふ。莖の断面は方形をなす。

其の他雲紋竹、胡麻竹、皺竹、寒竹、大明竹、唐竹、業平竹、寒山竹、箱根竹、めだけ、箭竹などがある。

3. やつで Fatsia japonica

八角金盤 五加科

一名てんぐのはうちはといふ。暖地に自生する常緑灌木で高さ二米半に達する。葉は長柄を有し掌大に分裂し頗る大形で質が厚く光澤を有してゐる。冬日枝梢間に花莖を抽き小枝を分岐して、淡黄色の小花を繖形花序にひらく。花後果實は黒色に成熟し毒性を有する。庭木として古雅の趣を呈する。

4. すぎ Cyptomeria japonica

杉 松杉科

山野に多い常緑の喬木で、之を遠望する時は、恰も森の如く所謂杉形をなして一種特有の狀態を呈する。その成育は山間峡谷の陰濕の地が最も適し樹幹六十米、周囲十米餘に及ぶものがある。吉野杉、秋田杉などよく知らる。

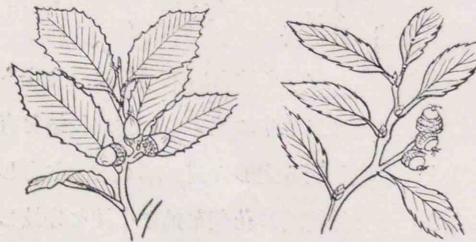
材は加工しやすく用途は極めて廣い。又屋久杉と稱するものは材の年輪が緻密で板目には雅致ある木性を現はす故裝飾用材として貴ばれる産地は薩摩屋久島で、本邦最南の杉の自然林として有名である。

觀賞用の外、材は建築器具用として使用され、樹皮は屋根を葺き、葉は線香を製するに使用される。材には脂香氣がある故、日本酒に香氣をつけるに用ふ。清酒樽は全部杉材である。

5. ならのき *Quercus crispula*

栂 山毛榉科

まなら、ならまき、やまぼそ等の異名がある。山地に自生する普通の落葉喬木で、幹の高さ二十米に達する。葉は廣い楕圓形で互生し、長さ十四五種で縁邊に鋭頭の粗い鋸齒を有する。花は單性で花冠がなく雌雄同様である。果實は殻斗深く椀状をなしその縁邊が薄い。材は薪炭及び器具用材とし樹皮を染料にする。



こなら

しらがし

6. あをき *Aucuba japonica*

桃葉珊瑚 山茱萸科

山地に自生する常緑灌木であるが又觀賞用と

して庭園に植栽される。葉は對生で長楕圓形をなし縁邊に大鋸齒を有し長さ一穂半以上に達する。花は單性で異株に生じ、花瓣は四個を有し稍々淡紫色を呈する。春末花をひらき、花後長楕圓形の果實を結び、冬より翌春にかけて紅熟する。

本植物の生葉をしぼつた汁は擦り傷を治し、日干にした葉は粉末として油と混合して湯火傷に塗布すればよく治癒することが出来る。

7. かしのみ

櫻 山毛榉科

普通櫻の木と稱するものは、あかがし、しらかし、ほそぼがし等で何れも暖地に自生する常緑の喬木である。樹幹は十米餘に達し、材は質が堅牢である故車、下駄の齒、船具、農具を作るに用ひ又薪炭用にもする。

其の他いぬがし(うばめがし) いちぬがし、つくばねがし、あらがし、こるくがし、はごるもがし等の種類がある。

8. 作家小傳

寺内萬治郎氏

西洋畫家。東京美術學校西洋畫科出身、帝展及び文展審査員をつとめられた。

本巻第一圖チューリップ(1頁)の項に詳し。

第十九圖 樹木

中西利雄

1. 樹木

植物を大別して木本と草本とに分類する。樹木とは木本のことであつて、草を草本といふのである。木本即ち樹木は木質の莖を有する植物で、一般の草の如く年々枯死することなく、永年の壽命を保ち大型となる。その内最も大型となるものを喬木といひ、小型なるを灌木といふ。その境は普通五米を標準とするのである。又葉の形狀によつて潤葉樹と針葉樹に分け、四季を通じて緑葉をつけてゐる時これを常緑樹といひ冬になつて葉を落すものを落葉樹といふ。潤葉樹は熱帯地方では多く常緑であり、寒帯地方では落葉するものが多い。針葉樹は一般に常緑であるが、からまつの如く落葉するものもある。

樹木の多く繁る所を林又は森林といふ。森林の内、同一の樹木の繁茂せるを單純樹林といひ、各種の樹木繁れるを混交樹林といふ。又成因によつて天然林と人造林とに分つ。樹木はこれを遠方よりながめる時特殊の形狀を呈する。これを樹相といふ。

樹木の年齢は一般にながく、數百年に達するものがある。例へば山毛榉は三百年、白楊は五百年、から松は六百年、栗は二千年、一位は三十年、樟は數千年の齡を保つといふ。その高さに於ても限度なく、米國加州のマンモス樹は高さ百二十米周囲十六米に達し、オーストラリアのユーカリ樹は高さ百六十米に達し世界最高の植物として知られてゐる。

樹木の用途は建築土木用材となりパルプの原料として廣く用ひられる。又この樹木の繁茂は吾人の衛生上より見て必要であるのみならず、水源涵養、風教、防風、防火、土砂くすれの防止、魚付きをよくするなどその効用はなかなか廣い。これら必要な樹木は國家に於て保安林として特に保護してゐる次第である。

2. 作家小傳

中西利雄氏

明治三十三年十二月東京市京橋に出生、昭和二年東京美術學校西洋畫科卒業、昭和三年五月渡佛、六年十一月歸朝せられた。生粹の水彩畫家で現水彩畫壇に於ける第一人者であり、新興水彩畫のために盡されつづある殊勲者である。

現に新制作派協會會員、日本水彩畫會會員、蒼原會會員、上社會會員として毎回出品し、其の他國産水繪用材研究會に關係し、又曾ては光風會會員及び二部會員でもあつた。春鳥會發行中西利雄作品集の著がある。主なる畫歴は次の通りである。

大正九年より日本水彩畫會展に毎回出品、大正十三年には同會の會員に推された。この年又帝展第五回に「盛夏麗日風景」が入選された。この間白日會、大平洋畫會、光風會、中央美術展等にも出品あり、光風會では受賞された。昭和四年五年と引續いてサロンドートンヌに水彩各二點出品入選され、歸朝の翌年昭和七年日本水彩畫會第十九回展には滞歐作二十七點を特陳、又上社會には滞歐作二十點を出陳して畫名を高め、帝展には其の後年々外國風景を出品されたが、昭和九年第十五回帝展に於て「優美出場」が特選を得、翌十年第二部會では「婦人帽子店」が特選となつて文化賞を授けられた。

昭和十一年には帝展推薦の榮を擔はれたが、同年新制作派協會創立に参加、其の第一回展には「夏の海岸」「婦人像」の二點、第二回展には「人物」外四點を出品され、日本水彩畫會、上社會、蒼原會等に引續き毎回出品されてゐる。

昭和十一年五月には日動畫廊に第一回個展を催し水繪、グアッシュ等三十點を發表し、昭和十四年養生堂ギャラリーに第二回個展を開催された。

〔住所〕 東京市中野區桃國町四八

1. ななほしてんたう *Coccinella bruckii*

七星瓢蟲 昆蟲類 鞘翅目

翅鞘は橙黄色で斑紋は黒色である。早春より出現して蚜蟲(ありまき)を食するので益蟲としてよく知られてゐる。

普通てんたうむしといふ仲間には、かめのこてんたう、おほてんたう、ひめあかほしてんたう、じふさんほしてんたう、きいろてんたう、とほしてんたう、なみてんたう、あかほしてんたう、てんたうむしだまし、むちてんたう等がある。

2. おほかまきり *Paratenodera sinensis*

大蟪螂 昆蟲類 直翅目

體は緑色又は黄褐色で本邦最大種である。本州、四國、九州、琉球に産す。普通かまきりといふは、なみかまきりの事で、本種よりは小さく體が細い。體は褐色又は緑色で前翅が細く前縁が廣く黄白色である。

3. くまぜみ *Cryptotympana facialis*

熊蟬 昆蟲類 有翅目

體は大形で光澤ある黒色をなし腹瓣は橙黄色で翅は透明で基部は黒色である。大聲で「シャーシャー」と鳴く。本州の南部、四國、九州地方に多い。馬來印度地方にも産す。

蟬は子供に親しまれる夏のお友達であるが、その種類はくまぜみの他次の通りである。

ちつちぜみ 黒褐色小形、中胸背に小さい赭褐色紋二個あり、翅は透明、「チツチ」と鳴く。

はるぜみ 黒褐色にして赤褐色の不明瞭なる斑紋あり、翅は透明、五月頃出現し、多く松林に棲むのでまつぜみともいふ。

えぞぜみ 頭部は黒色、五個の暗黄緑斑を有

す、腹背は黒色、兩側及び後方多少黄味を帯びることもある。翅は透明、八月頃出現、北海道及び本州の山地に棲む。

こえぞぜみ えぞぜみに似るも形著しく小、前胸背後縁に二黒紋を有つ。八月頃出現、北海道及び本州の山地に棲む。

みんみん 體は黒色、頭部及び胸部に青緑色の斑紋あり、翅は透明、「ミンミン」と鳴く。

つくつくぼうし 體は細長く黒色にして頭胸部に黄緑紋を有す、翅は透明、「ツクツクボウシ」と鳴く。

ひぐらし 一見みんみに似てゐるが、稍小さく前胸背に黄褐の二大紋を有つ、「カナカナ」と鳴く、夕方に鳴くことが多いからひぐらしの名がついてゐる。

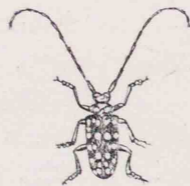
あぶらぜみ 大形の普通のせみで、體は黒色翅は暗褐色にして黄白色紋が散在してゐる、各地に産す。

にいにいぜみ 體は黄緑色、黒色の斑紋あり、前翅の基部半分は褐色不透明にして僅少の白斑を有し、外半は透明で褐色の大斑がある。後翅は暗褐色で外縁は透明、本邦各地に産する小形の蟬である。「ニニニ」と鳴く。

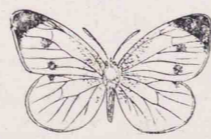
4. ほしかみきり *Melanauster chinensis*

星天牛 昆蟲類 鞘翅目

ごまだらかみきりと言ふ。體は黒色で光澤があり、體下に藍灰色の短毛を生じてゐる。翅鞘に白色の小紋がある。成蟲は七八月頃出現する。やなぎ、くはなどの材部を食害する鐵砲蟲はこの幼蟲である。



ほしかみきり



もんしろてふ

5. もんしろてふ *Pieris rapae crucivova*

紋粉蝶 昆蟲類 鱗翅目

白色中形の蝶にして雌雄により少しく色彩を異にする。春型のものには黒紋のないものがある。裏面は前翅の前縁に沿ひ、後翅は全面に灰白の小點を散らしてゐる。幼蟲はだいこん、かんらん等の十字科植物の葉を食害する。蛹で冬を越す。

6. をながあびは *Papilio macilentus*

尾長鳳蝶 昆蟲類 鱗翅目

前翅の裏面は淡色で後翅に橙黄色の弦月紋がある。雌は後翅前縁の白色横紋がない、表面には弦月紋を装ふ。春型は小形で夏型は大形である。山地に多い幼蟲はこくさき等の葉を食する。

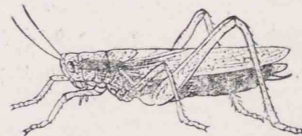
7. いなご *Oxya vicina*

蝗 昆蟲類 直翅目

黄緑色で前翅は尾端とほぼ一致してゐる。一名こばねいなごと言ふ。稻の害蟲である。本種より翅の長いものを、はねながいなごといふ。圖中のものはこれに屬する。



あしながばち



いなご

8. あしながばち *Polistes nequeus*

脚長蜂 昆蟲類 膜翅目

體の割に脚が強大で中脚を下げてとぶので長脚に感じられる故この名がある。人家の近くに棲み屋根裏又は樹枝に蓮實狀の巢を作る。本邦の到る所に産するが北海道には産しない。

9. あめんぼ *Aquarius*

昆蟲類 有翅目

一名かはぐもといふ。常に水面上を迅速に滑走する昆蟲である。小形なるに、ひめかはぐもといふ種がある。

10. しやうじやうとんぼ

Crocothemis servilia

猩々蜻蛉 昆蟲類 脈翅目

この蜻蛉は雄紅色、雌黄色である。雌は腹部黄色、翅は稍々茶色を帯び基部は黄色である。圖中のは雄を畫けるものである。本州より臺灣まで分布する。

11. みすぢぬいまい

Eulota (Euhadra) peliomphala

三條過牛 腹足類 有肺目

かたつむりとして普通なるものである。直徑二九粒、高さ二八粒位の大きさの右旋介殻は淡黄色の地色をなし、多く三條の褐色帯を有する。本種に最もよく似たる種に、くちべにまいまいひとすぢまいまいなどある。

12. 作家小傳

小泉勝爾氏

明治十六年八月東京府下北品川に生れ、明治四十年東京美術學校日本畫科を卒業された。同年十月より茨城縣龍ヶ崎中學校に教鞭を執られ翌年四月退職せられたが、大正五年母校東京美術學校の助教授に任じられ、後教授に進み今日に至る。文展無鑑査、日本畫院同人である。

大正六年第十一回文展に「彩園雨後」を出品せられ其の後帝展には第二回「朝のうるほひ」第三回「霜枯るる頃」、第五回「後圃閑日」、第六回「鶴」、第八回「山湖淺春」、第九回「湖盛」第十回「雨霽れの朝」等を出品せられたが、昭和六年第十二回帝展には「濤聲」を出品して遂に特選となられ、同年帝國美術院推薦の榮を得られた。尙昭和七年第十三回帝展に無鑑査として「静夜」を出品せられ、昭和九年第十五回帝展には鑑査員に擧げられた。

著書に土岡泉氏と共同執筆編纂「鳥類寫生圖譜」第一期十二輯第二期十二輯がある。

〔住所〕 東京市淀橋區上落合町一の四二五

第二十一圖 菊 その一

1. 和亭 (2493—2561)

瀧和亭といふ。南宗畫家である。名は謙、字は子直、和亭又は蘭田と號した。天保三年正月江戸千駄ヶ谷に生れ、幼時から畫を好み、初め大岡雲峰の門に入り、その後長崎に遊び祖門鐵翁に就き、又清人陳逸舟、華昆田等と交り、滞在凡そ二年、それから京都に赴き、又南海諸國を歴遊し安政元年江戸に歸り、幕府に出仕したが、數年の後これを辭した。

之より山河景勝を探つて東馳西走十餘年、その間に維新の新政となり文化の進運に際して、和亭の技も漸く世に知られ、明治六年の奥國博覽會には政府の命をうけて着色の巨幅を出品して褒賞を受け、其の後内國觀業博覽會開設の度に其の作品を出品して屢々受賞した。

明治三十四年九月二十六日、六十九歳を以て没した。傑作として残るものに蘭圖(高田早苗氏藏)、老松鶴鹿圖(岩崎男藏)、孔雀圖(帝室博物館藏)其他頗る多い。

南畫 南宗畫ともいふ。支那南地に發達したもので同地方の溫雅明媚な山水自然を映して手法簡潔溫潤、淡泊輕快で、畫家の主觀を山水に藉りて表現する。文人畫とも稱する。我國へは享保年間清人伊孚九、沈南蘋等によつて傳へられた。大雅、蕪村、皐山、椿山、竹田、梅逸、文晁、和亭、鐵齋、草雲、翠雲、桂月等は この派の畫家である。(理論篇美術史 114 頁、136 頁参照)

2. 玉章 (2502—2573)

川端玉章である。圓山派の畫家、幼名は瀧之助、敬亭、天真堂と號した。京都の蒔繪師、佐兵衛の一子として天保十三年六月四日に生れた

十歳の頃父が出入する三井家の小僧となつたが繪に凝つたために暇を出され、終に十一歳にして中島來章の門に入り圓山派を修むる傍、苦心して諸家の藏幅を展閱し他派の技術に深く學ぶところあり、又小田海僊について其の畫論を聽き、十八九歳にして既に京都畫壇に嶄然たる頭角を現した。

慶應二年初めて江戸に出で日本橋久松町に寓居したが當時畫道頹廢の極に達し何人も畫家を顧るものがなかつた。けれども玉章は志操を持して毎日版畫を描きつゝ糊口し、傍ら洋畫をも修めた。其の頃偶々三井家に依頼されて三圍神社に奉納する狐の嫁入圖を描き、漸く名を成すの端を得た。明治十一年深川西大工町に移るに及び次第に世に名を知られ、畫風を慕つて入門するものも多くなつた。そこで畫塾を天真堂として後進を指導し。後神田山本町に移轉した。明治廿一年東京美術學校の創立と共に入つて同校教授となり、廿九年には帝室技藝員を拜命し、四十二年には川端畫學校を設立した。かくして四十三年高等官二等に進み正五位に叙せられた大正二年二月十四日没した。年七十二。

著名な作品は墨堤春曉(東京美術學校藏)、櫻花と鶏(同)、雨後山水圖(東京帝室博物館藏)等頗る多い。

圓山派 圓山派の始祖は圓山應舉である。應舉は京都に住み、初め狩野派を學んだが、後宋元の畫及び錢舜舉の寫生畫に深く感じて寫實の一派を起した。世にこれを圓山派とよんでゐる。寫生を以て旗幟とし、好んで側筆斜掃の沒骨法を用ひた。四條派はこの派の延長と見るべきもので、其の祖を松村月溪としてゐる。

圓山派を繼ぐものに月溪(吳春)、狙仙、源琦、蘆雪、素絢、徹山等があり、近代では春舉、玉章、百穂、素明等がある。(理論篇美術史 114 頁、136 頁参照)

第二十二圖 菊 その二 渡邊香涯

1. きく Chrysanthemum sinense

菊、重陽花、女華、金華 菊科

異名としてあきのはな、いなでぐさ、くさのあるじ、ちぎりぐさ等と言はれ古くより觀賞用として廣く栽培される多年生草本で、莖はやゝ木質狀で高さは一米内外に達する。葉は有柄卵形で邊緣に缺刻鋸齒を有してゐる。頭狀花序をなしその大小單複等に各種の變化があり一定してゐない。花の色も種々ある。秋に開花する。

菊は桓武天皇以前に支那から傳來したといはれ、又仁徳天皇の時百濟から傳へたものともいふ。又一説には我國古有のものであるとの説がある。我國には植物學上きくの原種と認められるものゝ野生種がある故、培養によつて變じたものではないかと言はれる。のぢぎく、りうなうぎく、あぶらぎく等その祖先と見られるものである。

品種 菊の園藝品種は頗る多く、現今では二千種以上を算する。これ等を大別すれば、正常菊を大輪、中輪、小輪菊に分け、大輪菊の内に厚物、管物、廣物などある。中輪菊に江戸菊、丁字菊、肥後菊、嵯峨菊、伊勢菊等があり。小菊に、文人菊、魚子菊、貝吹菊、菊菊だとある。奇花菊といひ狂咲のものもある。

菊の中には開花の時期により春菊、夏菊、寒菊などの別があるが普通に菊といふは秋菊のことである。

栽培法 菊を栽培せんとする用土は、肥沃で排水のよいものがよい。田土に川砂と腐熟堆肥を等量にまぜて用ふる。この用土は冬の内に作つて雨にあてない様にして保存する。繁殖は三月五月に互つて挿木株分けをするが、懸崖作りの小菊などは冬の内に株分をした方がよい結果が得られる。大輪菊は一般に挿木を行ふ。



中菊

肥料は下肥、油粕、米糠、骨粉、木灰、石灰等を使用するが大輪菊には多量に施す。大麥などの普通作物の十數倍量を與へてよい。大なる美花を得んとするには磷酸を十分に供給するを要する。大輪菊は1—3本仕立とし、中輪菊は五本乃至十本作りとする。小輪菊は數回摘心を行ひ叢生に形を作り多くの花をつける様にすが、大輪中輪では開花させやうとする蕾以外は皆取り去るのである。

2. 作家小傳

渡邊香涯氏

明治七年十一月東京四谷區荒木町に生る。明治三十一年東京美術學校日本畫科を卒業された卒業後、莊内中學校及び前橋中學校に教鞭を執つて圖畫教育に經驗を積まれたが、明治三十六年五月宮内省正倉院御物整理掛として出仕された。大正六年東京美術學校教授となり、昭和七年に勇退せられたが、その間大正五年立太子式御禮として東宮殿下より、兩陛下に進献の御欄及び料紙硯箱の圖案をせられた。

同氏は初め元聲會時代に結城素明、平福百穂、石井柏亭等と共に日本畫を發表して活躍せられたが、その後工藝及び工藝圖案方面にも才能を奮はれてゐる。即ち、大正七年第六回農展に「天平型末金鍍硯箱」を出して褒状を受けられ、大正八年第七回農展に「寒紅梅銘々菓子盆」を出して三等賞を受けられた。

大正十年時の皇太后陛下より香椎、住吉の兩社に奉獻せらるべき神前鈿笠の圖案をせられ、續いて大正十四年兩陛下銀婚大典祝賀獻品の軸盆の圖案をせられた。大正十五年の第一回聖德太子奉讚展に「太子棚」を出品せられた。昭和五年第二回聖德太子奉讚展に秋の庭と題する「漆器菓子盆」を出品、昭和六年第十二回帝展に「牡丹文盆」、昭和八年第十四回帝展に「銀胎堆漆菊花盆」を出品せられた。其の他にも日本畫及び工藝の製作品が多い。目下悠々自營製作に精進せられつゝある。

〔住所〕 東京市瀧野川區田端三四一

第二十三圖 干魚

伊原宇三郎

1. まあじ *Trachurops trachurus*

真鯨 刺鯨目 鯨科

一般に鯨といふ。體側の側線に沿つて並んでゐるゼンゴが側線の全部に存在することを特徴とする。體長は十五種位のもので、體形は個體變化、地方的變化が著しく一様でない。従つて肉の味も相當に相違があるといふが、一般に美味である。

鯨科の魚類には、むらあじ、ひらあじ、しまあじ、きんがめあじ等があり、何れもよく似てゐる。

2. かます *Sphyræna japonica*

鯨、梭魚 刺鯨目 鯨科

やまとかますといふ。體長は普通二十種乃至二十五種で體高は低く體長の八分の一位のものである。口内の歯が鋭く糸などをよく切る。鱗は小さい圓鱗である。乾製品や鹽焼として賞味される。

3. 干魚の製造法

乾物にするには生魚の腹をさき内臓を取り出し両面に開くか又は背を切りひらいて鹽をふりかけ、凡そ二時間位そのまゝとなし、適當に鹽をしみこましめたる後、清水で表面の鹽を落して簀の上にならべて天日で乾燥するのである。長く貯蔵するには充分に水氣を取るまで乾燥するのであるが、2-3日の内に食するものは生干とする方が美味である。かれい、ひらめ、あじ、さば、いしもち、かます、きす、あなご等は生干として最も味がよい。

干魚の一種に味淋干といふのがある。これは醤油と味淋を等分にまぜ、味の素を入れたる中

に開き魚を一時間位入れ、取り出したるまゝ簀にならべて乾し上げたものである。

4. 作家小傳

伊原宇三郎氏

明治二十七年十月徳島市に生れ、大正十年東京美術學校西洋畫科を卒業された。

大正九年東京美術學校在學中、第二回帝展に「明装」を出品、卒業の年第三回帝展に「よろこびの曲」を出品、大正十四年春、佛蘭西に遊學し、昭和四年八月歸朝され、同年第十回帝展に「椅子によれる」を出品、特選となり、昭和洋畫獎勵賞を授けられた。昭和五年第十一回帝展に「二人」を出品して再び特選となられた。其の後の出品作は次の通りである。

第十二回帝展、無鑑査、「丘に坐す」。

第十三回帝展「榻上二裸婦」特選。

第十四回帝展「トーカー撮影」。

第十五回帝展「裸婦三容」。

昭和十年第二部會展「明鏡」。

昭和十二年第一回文展「深井英五氏の肖像」。

第二回文展「汾河を護る」。

第三回文展「雄心」。

昭和九年第十五回帝展の審査員に擧げられて以來無鑑査出品を続け、昭和十一年二部會を結成し、十二年には文展の審査員となり、其の他多數の展覽會審査員として活躍せられてゐる。

はじめ帝國美術學校に教鞭を執り、昭和七年東京美術學校に轉じて助教授となり今日に及んでゐる。國民美術協會の會員である。

〔住所〕 東京市世田ヶ谷區成城町六二四

第二十四圖 繪葉書 その一 平塚運一

1. 版畫制作の態度

次の一文はこの版畫の作者平塚運一氏が初學者ののために特に書かれたもので、版畫製作上の參考とならうと思ふからここに載せることとする。

版畫を試みる人々へ

これから版畫をつくらうとする諸君へ、製作態度について述べてみたいと思ひます。これからの話は自刻自習といふ立場からであることを承知して置いて下さい。

さて解り切つた話ですが、良き版畫は良き美術家から生れます。そして良き版畫を作る人は良き油繪畫家、良き水彩畫家が良き作品を生む状態に於て、もう一つ版畫としての表現の自由を持たねばなりません。ですから版畫としての技術だけに申分なき腕を働かせても、それは良き版畫、といはれないと思ひます。諸君も所謂エツチャーの手になるエツチングが如何に退屈なものであり、良き油繪畫家達——レムブラント、ゴッホ、セザンヌ、ピカソ等——のエツチングに打たるゝ處が多い一例を御存知でせう。といつても私は決して版畫を餘技として勧めるのではないのです。版畫が一枚のタブロオと同じ位置に立つものであることを知る人ならば、其邊の誤解はないと思ひます。

版畫には他の油繪だとか水彩畫だとかでは追ふことの出来ない特別な世界が與へられてゐます。私達はそれを生かして自己を盛り上げねばなりません。水彩畫が持つ特別な世界を版畫で狙ふなどは無理で、愚といふべきです。

吾々日本の先人が、餘りに光輝ある仕事を残してゐるだけに、これからの吾々には多大の努力を要します。一度は其の影を絶つた様な形のわが版畫も、近時勃興した版畫熱によつて、ま

た新しい方面に道を開拓されようとしてゐます。この場合、お互の精進によつてこの發芽をよく育て、そのかみの吾が版畫時代の境地を——形式は異なるが——またここに再び作りたいものであります。いふまでもなく在來の版畫の繰返しに止まりたくありません。廣く東西の良き點を學び新らしく吾々の世界を築きたいものであります。版畫の技法より

2. 作家小傳

平塚運一氏

平塚運一氏は明治二十八年十一月十七日島根縣松江津田町出生、郷里及び東京にあつて洋畫に精進されたが、傍ら版畫に志され、遂に版畫家として大成された。現に東京美術學校嘱託として版畫科を擔任せらるる外、國畫會會員、日本版畫協會會員、文展無鑑査として斯道に重きをなしてゐる。

曾て島根縣物産陳列所にて圖案の指導をせられたこともあり、又「中央美術」「美術月報」の編輯に當られたこともあるが、これ等の間にあつても常に制作と研究とを続けられ、二科會、國畫創作協會、國畫會、日本版畫協會日本水彩畫會等に出品の外、「版畫の技法」「創作版畫の作り方」等の著書もある。

氏の出品作品の主なるものを次に挙げる。

昭和七年第七回國展「出雲風景」

第八回國展「段々畑」

第十回國展「百濟舊都」

第十二回國展「平壤牡丹臺」

第十四回國展「峭巖深淵、内金剛萬瀑消」

昭和十三年第二回文展「佐渡尖閣灣」

昭和十四年第三回文展「平壤大同門」

古代佛教版、古版繪入本、朝鮮古代や天平時代の古瓦磚、古代裂地、民藝品(陶器)の蒐集は氏の趣味で世に知られてゐる。

〔住所〕 東京市澁橋區西落合町一丁目一六一

第二十五圖 繪葉書 その二 關口憲輔

1. 繪葉書

我が國で私製葉書が認可されたのは明治三十六年で、此の時から繪葉書の流行頗る盛であつて各種のものに應用せらるるやうになつた。英國に於て私製葉書の用ひられたのは一八七二年(明治二年)で、我が國よりも約三十年早く、從つて歐洲各地に於ける流行は一層盛で、特に獨逸製には種々趣向を凝らしたものと又頗る高價なものが作られて居る。

葉書の大さ 世界各國殆ど共通の大さで、天地十四センチメートル、左右九センチメートルが普通である。併し英吉利には天地十五センチメートル、左右十センチ五ミリもある大型の私製葉書も許されてゐる。

用途 繪葉書を其の用途から分けると、記念繪葉書、年賀繪葉書、名所繪葉書、廣告繪葉書及び普通繪葉書の五種とすることが出来る。記念繪葉書は或事件を永く記念する爲めに、之に因む寫眞、繪畫、模様、文字等を印刷したもので、例へば戦捷記念、開通記念、何何祭記念として發行する類で、我が國で逓信省發行のものでは、明治三十五年萬國郵便聯合加盟二十五年祝賀記念の繪葉書が最初のものである。尙記念スタンプの使用も此の時に始つたといはれる。

年賀繪葉書は新年の賀狀に用ふる爲めに特に其の年の干支、紀元、新春に因る資料、勅題等を圖題として作るもので、これには印刷によるばかりでなく肉筆にて描かれるものも多く雅俗、繁簡多種多様である。

名所繪葉書は其の土地の名所舊跡風光を繪葉書とするもので、葉書一面に寫眞を以て埋められたものや、適當に紙面を區劃して寫眞を入れ餘白に他の模様詩歌の類を書き込んだものなど様々に意匠される。

廣告繪葉書は會社、商店、旅館等がその營業

廣告の爲めに作成するもので、多くの建築物製品、賣品等を寫眞にしたり、繪畫にしたり模様仕組んだりして現はすのを常とする。**普通繪葉書**は記念、年賀、名所、廣告といふやうな特別の目的を持たず、只趣味或は裝飾として作られる繪葉書一般のものを指すのであつて、かの展覽會出品畫の繪葉書を初めとして漫畫繪葉書、子供用繪葉書、小唄繪葉書など極めて多い。

構成 繪葉書を構成するに、(1) 葉書の全面を特殊の寫眞又は繪畫とするもの、(2) 特殊の寫眞又は繪畫を以て葉書の全面を埋めることなく、是等のものを適當に配置するもの、(3) 特殊の寫眞繪畫を挿入することなく全部を作者の繪畫又は圖案を以て構成するものと三大別することが出来る。

1 は特に圖案を施すべき部分がなく唯葉書の長方形内にうまく適合するやう撮影描寫する。

2 は配置すべきものの位置、大さ及び其等のものの聯絡、主體の補助、餘白の裝飾等を工夫する。

3 には圖案上最も意匠を凝らし工夫をめぐらすべき仕事がある。

2. 作家小傳

關口謙輔氏

明治三十三年八月、埼玉縣北葛飾郡櫻井村に生る。「他人の爲す事を自らも亦爲し得る」といふ確い信念の下に獨學にて圖案の研究に従事せられた。

昭和九年の光風會展覽會に圖案を二點も出品せられた。同じく昭和九年五月東京にて開かれた。國際商業美術交驛展覽會に圖案二點を出品し、一點は米國、他の一點は佛國の展覽會に出品せられた。

杉浦非水氏の主宰する七人社の同人にして、これが展覽會には毎回出品せられつゝある。

〔住所〕 東京市小石川區原町五八

第二十六圖 天守閣
第二十七圖 天守閣

1. 城

城廓、城塞などともいふ。普通古代主君諸侯の居城特に封建諸侯の居城をいふ。又都市の圍壁をも呼び、特に古代中古の都市に於ては、城と稱する。

日本の城 古代に於ては相當大規模であるが技術は必ずしも精巧ではなく、多くは木柵、土壘の類であつた。九州地方の山城や、東北地方の城柵がそれである。

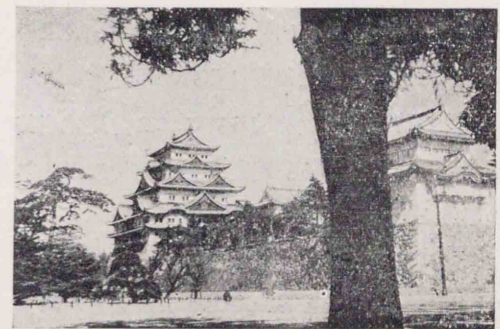
城廓は武家政治以後急速に進歩した。特色ある獨特の形式を備へた。古代はアイヌ式のチャシである。その後有史時代に入つて、簡単な柵濠及び土壘を以て居宅防備をなした。「稻城」は臨時築城である。唐・新羅の外寇に對して太宰府を中心につくられた大野城、椽城等は全然、朝鮮式の山城である。奥羽地方の蝦夷に對してつくられた柵は支那式の都城に似たもので、多賀城、膽澤城趾がそれである。戰國時代に城廓は益々大規模になり、安土、桃山時代より江戸時代の初期に及んで城制は全く完成せられた。

2. 天守閣

我國武家時代築城の要素で、高樓など戰時に展望又は指揮の便宜上から設けたものに起源し時代の趨勢と共に、自然的に發達したもので、記録に初めて表れたものは、細川兩家記に見えた攝津伊丹城の「天守」である。高櫓が全く軍事的であつたのに對して天守の方は之に政治的意味が含まれて來た。即ち單に司令塔である目的の外に或は兵器庫ともなり、落城の運命近い場合の最後の據戰場ともなり、平時には外観上城

その一 前川千帆
その二 前川千帆

主の住居ともなつた。その位置は本丸の中央又は一隅で、一城中最も形勝の地點にある。堅固な石垣で疊んだ土臺の上に三層又は五層の塗篋造の櫓を構へたものである。大櫓(大天守といふ)に之に附屬した小櫓(小天守といふ)其の他があるが、配置の形式は必ずしも一定せず、形式上、獨立式、複合式、連結式、聯立式の四種に分ける。天守は天主教の「天主」に出たといふ。細川兩家記には天守を「殿守」「殿主」と記してもある。



名古屋城

3. 名古屋城

この圖は名古屋城の天守である。名古屋城は名古屋市にある尾張徳川氏の舊城である。巍然として聳ゆる大天守閣、燦然たる金鯱の光は莊麗と古典美とを永久に發揮してゐる。古來、柳城・龜尾城・金鯱城・金城・蓬左城・姉射城とも稱した。應長十二年徳川家康の第九子義直が亡兄松平忠吉の遺領を繼いで甲斐より清洲移封にあたり、その地永住に適せぬため築造したもの、この地はもと那古野城の在つた所で大永年間、今川氏豊が築いたが、天文元年、織田信秀に亡されてその居城となる。信長は天文三年この城

内に生るといふ。信秀やがて古渡城に移り信長暫くこゝに居たといふ。信長清洲に移つた後、叔父信光、代り住んだが、弘治年間に至つて廢城となる。

家康は應長十四年自から來つて城地を検し、牧長勝・瀧川忠征・佐久間政實等の普請奉行に命じ、翌十五年に、加藤清正が御築城總大將となり、諸役の工事を監督した、特に清正は獨立五層の大天守閣を築造した。高さ四十二米餘、最上層に於ても百疊敷の大廣間を設けるを得、屋上に金鯰あり。南に雌2・51米、雄は北に2・78米、黄金1940枚、應長小判17,975兩といふ。城廓全部竣工は同十七年である。城主義直は元和二年に駿府から移つた。内部は、本丸、西丸、二の丸、三の丸、御深井丸に別れる。

家光の時上洛御殿を造る。これは當代建築美術の精華といはれる。尾張藩主十七代二百餘年の居城となつた。

明治四年徳川慶勝之を朝廷に獻じ、第三師團がおかれ、明治二十六年、離宮と定められた。昭和五年、離宮廢止、名古屋市に御下賜となり、昭和六年から一般に開放されて今日に至つてゐる。

4. 作家小傳

前川千帆氏

明治廿一年京都に生れ、關西美術學院を卒業された。京城日報社、國民新聞、讀賣新聞社を経て現在自由執筆、帝展及び文展に版畫を次の様に出品入選せられた。

昭和二年第八回帝展 國境の停車場

第九回帝展 朝鮮三日浦

第十回帝展 綠丸甲板

第十二回帝展 屋上風景

第十三回帝展 湖の見へる部屋

第十四回帝展 展上庭園

第十五回帝展 花見

昭和十一年文展招待展 山村の蹄 無鑑査

昭和十二年第一回文展 野遊び 無鑑査

第二回文展 名古屋城 無鑑査

昭和十四年第三回文展 新緑 無鑑査

右の他春陽會には第二回展より會友となり、昭和十年會友を辭退、昭和七年オリンピック第十回藝術競技参加、昭和十一年第十一回同競技にも出品せられ、文展では同十一年からは無鑑査となり、現に日本版畫協會會員幹事として活躍されてゐる。

又別に書籍の装帧、挿繪等にも多數執筆されてゐるが、漫畫界の重鎮としてその獨特のユーモアチックな作品は世上周知のことである。

〔住所〕 東京市中野區宮里町十六

第二十八圖 鯛 と 蛤 南 薫 造

1. まだひ Pagrosomus major

眞鯛 魚類 鯖目科

魚類中最も貴ばれてゐる種類である。體は背鰭の直前で最も高くその後方は急に降つてゐる頭の上外廓は急峻で僅かに曲つてゐる。上顎には二列の齒があり其の内列は臼齒よりなるも外列の齒は其程度が劣つてゐる。上顎の前方には各側に二個の犬齒があり、下顎の同所には各側に三個の犬齒がある。背鰭は十二棘十軟條、臀鰭は三棘八軟條、側線の鱗數五十六個ある。體は紫青色で下方が淡い。小さい時は淡赤色の横帯が若干あるが、成長と共に消失する。體側に散在する綠色の圓點も成長と共に消失する。北海道、琉球、臺灣の南部には少いが他の地方にはよく漁れる。鯛の種類には、まだひの外、くろだひ、へだひ、ちだひ、きだひ、ひれこだひ、いんどだひ等がある。

2. くまざき Sasa albo-marginata

隈笹 禾本科

一名やきばざさ、へりとりざさといふ。山林中自生する多年生植物で高さ一米時として二米に達することがある。葉は潤大で幅の大なるものは六種許りに達し、長さは二十種以上となる。この葉が老成すると、葉縁が皆白暈を有し美しくなる通常花を生じない。

3. はまどり Meretrix meretrix

蛤 斧足類 蛤科

殻はほぼ三角形で大形なものは長さ八十五耗高さ六十六種、幅四十二種位の大きさに達せるものがある。殻の表面は平滑で模様がある。普通淡黄褐色地に赤褐の太い縦斑を有する。肉は食用とするが、あさりほど美味ではない。五月より九月末に互り産卵する。殻は薬品の容器・白碁石の原料として用ふる。

4. 作家小傳

南 薫造氏

昭和十六年七月廣島縣内海町に生る。明治四十年東京美術學校西洋畫科を卒業された。卒業直ちに渡歐し、英・佛・伊をはじめ各國を歴遊して明治四十三年歸朝された。その年第四回文展に「坐せる女」外一點を出して三等賞を授けられ、第五回文展に「瓦焼」外一點を出して二等賞、大正元年第六回文展に「六月の日」其の他二點を出して二等賞を授けられ、無鑑査出品の榮譽を得られた。爾來その畫歴は次の様である。

大正二年第七回文展無鑑査出品「春さき」(二等賞)、「安藝の海岸」、「搖籃」

第九回文展「葡萄棚」(二等賞)、「葡萄棚の下に立

る男」、「農家の娘」

第十回文展「石橋」、「五境」、「婚禮の夜の唄」

第十一回文展「信濃の或る村」、「城」

第十二回文展「雪の中の小村」、「樂器を持てる二人

の男」

大正八年第一回帝展「冬」、「夏」

第二回帝展「とりいれ」、「綠草」

第三回帝展「結氷の湖水」、「すまり星」

第四回帝展「湖畔」、「花」

第五回帝展「庭前」、「秋の草」

第六回帝展「静物」、「野道」

第七回帝展「小園」、「オカリーナ」

第八回帝展「川筋の家」、「少女」

第九回帝展「細流」第十回帝展「鶴渡る」

第十一回帝展「朝」第十二回帝展「まきば」

第十三回帝展「水邊」第十四回帝展「練習曲」

第十五回帝展「窓際」昭和十年第二部會展「少女」

昭和十二年第一回文展「洞爺湖畔」

第二回文展「緬羊」

第三回文展「水邊彩屋(水彩)」

その間大正五年より屢々文展審査員となり、第三回帝展には第二部審査主任となり昭和五年六月帝國美術院會員に列せられ、更に昭和十二年帝國美術院會員となられた。現に東京美術學校教授である。

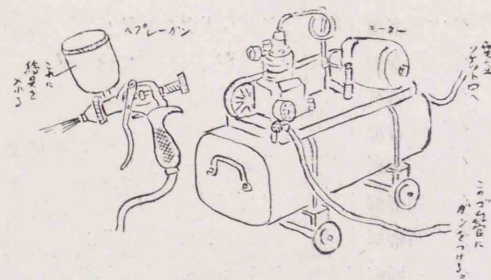
〔住所〕 東京市淀橋區百人町三丁目二六三

第二十九圖 霧吹法

1. スプレー Spray

圖案描寫の一手法で、多分に器械的な技法を含んでゐるが、技巧が比較的容易で、出来上りがよいため、相當多く利用される。殊に廣い場面を塗るには刷毛を以てするよりも手輕であり、且つぼかしの技法に至つては霧吹法に及ぶものはない。それで自然大畫面の製作には必ず利用されるやうになつた。

小畫面の霧吹ならば既に述べたやうに金網や刷毛で十分であるが、大畫面では不十分なので、スプレーと稱する噴霧器を用ひる。これは一種の空氣ポンプで、タンクの中へ空氣を貯へ、その壓力によつて繪具を霧状にして吹きつけるといふ仕掛である。これに手押と動力用の二種がある。即ち空氣はタンクから強い勢でゴム管に送られる。ゴム管の先端にはガンと稱する拳



動力用のスプレー

銃状の吹付口がついて居り、ここに又繪具を入れるコップが附屬してゐる。コップの中に用意された繪具がガンの先端から霧となつて外に出るのである。ポスターのやうなもの製作には必要欠くべからざる器械である。

霧吹は必ずしも紙上に於ける圖案描寫の方法ではなく、布の上に染料を吹きつけて模様を染出すことも出来る。

スプレーは又ラッカーやエナメルやワニスも吹付け、木工、金工製品を塗装することも出来る。(挿繪参照)

2. ひば (別名あすなる)

楳、羅漢柏 松科

山地に自生する常緑の喬木である。觀賞用として庭園にも栽培せられる。幹の高さ十丈、周囲六七尺に達し、葉は鱗状で楡に類するけれども其の大きさは數倍である。果實は毬果で、少數の鱗片からなつてゐる。本邦各地に産し、殊に青森、日光邊に多い。材質軟かて弾力があり水濕によく耐へる。土木、建築、家具其の他の用材となる。春慶塗、輪島塗の素材はこれである。

3. 金網・刷毛

金網は四十番乃至五十番の細針金を以て編んだものがよい。刷毛は幅半厘から二厘位のもの、しかし場面の廣さによつても違ふ。毛は短い方がよい。古筆の先を切つて使つても差支ない。

第三十圖 表紙

杉浦非水

1. 書物

書物の大きさ、装幀、種別等についての一般的知識は第一圖及び第二圖書物に於て述べたから、こゝでは主として表紙圖案に關係ある點について解説する。

表紙 洋本の表紙に用ひられる材料としては羅紗紙、コーデリヤ、紙クロス、表紙用厚紙、クロス、絹、ビロード、更紗、麻、皮革、木材などである。

表紙は一般に文字を必要とする。表紙に用ひる材料の地模様をそのまま利用する場合もあり、又無地のまま文字のみを入れて表紙とすることもあるが、多くは適當な圖案を施す。これは印刷によるのが普通である。特に文字を現すには、から押しと稱して版にインキも箔もつけずに押し凹めて表はすものと、箔押しとて版に箔をつけて押捺するものとある。その箔は金箔と色箔と漆箔との三種がある。色箔といふのは色彩の箔で、各種の色で作られる。漆箔といふのは漆で作られるもので眞黒に表はす時に使用される。尙模様文字は箔を使はずインキで表はされることもある。インキも單に黒ばかりでなく色があるから可成り複雑に表現出来る。

見返し、扉 は必ず紙が使用され、大體インキで模様や文字を印刷されるが、又金インキ或は金粉にて表はされることもある。見返しの模様は無論左右が一樣であるか、それとも左右連絡ある模様を施すのが常である。

被紙 はパラフィン紙或はセロファン紙の如き透明な紙を使用して本の汚れを防ぐものもあるが、又模様を施した紙を用ふることもある。その模様は全然表紙と同様であることもあるし模様の形だけを同じくして色を變更することもある、時には表紙には全く模様を施さず波紙

ばかりを飾ることもある。

帙 折疊式にするのが一般で、その作り方には種々あつて一定しない。帙は特殊の書畫帖圖案集等に使用され、舊來の和書には帙入のものが多かつた。帙は和書特有の装幀の如くであるが、無論洋書にも行はれてゐる。洋書の場合は繪畫圖案集に使用されるのが多くて單に文字だけの本に用ひられることは殆ど見ない。

外箱 外箱用の材料は各種のボール紙が主で箱の背に文字や模様を表はす。又箱の表面には表紙同様書名の文字や裝飾の模様を施すこともある。而して箱に文字、模様の類を表はすには直接箱に印刷するものと、特別に印刷した紙を貼るものとがある。この特別に貼るものを背張りと呼んでゐる。

書籍の種類による装幀の相違・表紙の圖案といつても之れを一概に律し去ることは出来ない即ち雜記帳、雜誌、普通の書籍、書畫帖といふやうに、その種類によつて圖案の態度に多大の相違があるからである。

雜記帖 兒童用のものは表紙の大部分に繪畫或は模様を各種の色彩を用ひて施すがよいが生徒學生のものはカツト風のもの或は輪廓式のもの極めて簡潔に、色彩も殆ど使はず施すがよい。

雜誌 特定の人に配布する機關雜誌と、一般の人に賣るべき普通雜誌とがあつて、又内容からいふと、學術技藝を主とする専門雜誌と、一般趣味娛樂を主とする通俗雜誌とに分けることが出来る。機關雜誌のやうに需要者が限定されて、何等外觀を競ふ必要のないものは殊更華麗を求めなくてもよい。只なるべく其の内容に一致する様圖案すれば足りる。専門雜誌は多く其

の内容の如何によつて購読せられ、表紙の如何によつて左右せらるることは極めて勤いから、特別に人の注意を集中させるやうな奇抜な圖案は要しない。只その内容に應はしい資料で、これを表象し一見その如何なる種類の雑誌であるかを看取出るやうな圖案すべきであらう。

普通雑誌即ち通俗雑誌は多數同種の雑誌に交つて顧客の注意を惹き、購買心を唆るものであるから、意匠は清新で奇抜で、色調も華麗で而かも高尚でその内容を十分物語り得るものでなければならぬ。

普通の書籍 表紙は勿論その内容に相應して裝飾を施すべきだが、これは單に一冊として見た場合にもよく、又書棚に他の本と一緒に並べられた時の感じをもよくすることも大切である。殊に叢書物は同じ装幀のものが多數並列せられるのであるから、其の全部が揃つた時に一つの纏つた圖案となつて裝飾的效果を擧げる様にしなければならない。

書畫圖案帖 これ等は元來藝術的内容のものであるから、表紙はその眞價を傷けないやう落ち着きと品格とを以て圖案せられなければならない。そして場合によつては其の内容の或るものを以て、表紙を構成しても宜しい。

装幀の仕方 表紙圖案の施し方としては、1 表紙の表面に重きを置いて圖案するもの、2 表紙の背の部を主として圖案を施すもの、3 表紙の表と裏とに連続して模様を施すものとの三種にすることが出来る。これは其の書籍の種類、經費、著作者の意向、出版者の方針等に依つて定まるべきだが、雜記帖、雜誌のやうなものは多く第一種の方法により、普通の書籍は第二種によるものが多く、第三種のやり方は假綴の安い本にも使はれるし、又總クロスなどの高價な本にも應用される。

見返し及び扉に裝飾を施すことの必要は、恰度着物の場合、下着、長襦袢が無地のものよりも何か多少模様があつた方がいゝのと同じ道理で、表紙を開いて直ぐ序文や目次になるよりは其の間に多少の餘裕や、心の落ちつきを作るために裝飾を畫くことが必要である。勿論これも

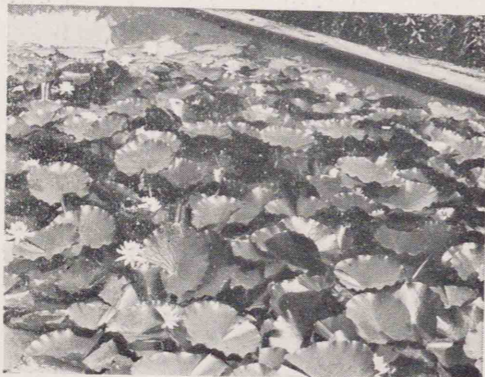
本の種類によることであるが、裝飾といふものは大體如何なる場合にも必要なものである。それで見返し、扉の模様は内容の硬いものには整然として嚴格味のあるものがよい、それ故幾何的模様のやうなものは相應しい。之に反し趣味的なものには洒落たものとか、あつさりしたものとか、雅味のあるものとか、優しいものとかを繪畫風にしてもよく、模様風に表はしてもよい。

帙及び被紙は書物の汚れと破損とを防ぐ爲に用ひられるものであるから、左程華麗にすることも入らなければ、餘り費用の多くかゝるやうなことも宜しくない。印刷度数も一度刷がよく二度刷、三度刷は贅澤である。

2. すゐれん *Nymphaea tetragona*

睡蓮 午時蓮、子午蓮 睡蓮科

和名をひつじぐさといふ。沼澤地に自生する多年生草本で根莖は水底を匍匐する。葉は長い葉柄によつて水面に浮び、廣卵形で全縁基脚が深く缺刻し脚端は稍鋭く徑7—10 輻ばかりあり



すゐれん

稍馬蹄形をなす。七八月頃に花を着生し朝開き午後閉づ。この花は花梗がながく花蓋は白色で萼片は四個を有する。雄蕊は多數心皮も亦多く相合生する。花後花梗は漸次下曲し水中に入り壘形の蒴果を結び熟すると水中で裂開するが種子は水面に出て、水の流風のまにまに遠く送られる。水槽や池にも培養せられる。

種類 種類には次の如きものがある。

にはひひつじぐさ、「ニムフェア・アルバ」、「ニムフェア・チユペローサ」、「ニムフェア・カベシンス」、「ニムフェア・ザンジバリエンシス」

あかばなひつじぐさ、以上の外畫間咲、夜間咲、耐冬性、不耐冬性等その栽培變種はなかなか多い。

3. からたち *Pseudaegle trifoliata*

枳殼、枸橘、臭橘 芸香科

この植物は多く籬用として栽植せらるる落葉の小喬木で高さ三米に達する。樹枝には長さ3—6 輻許の鋭刺を有する。葉は三出羽狀複葉で各小葉は卵形で細鋸齒縁を具へ葉柄にはせまい翼がある。花は春の終頃に無梗の白い花を單生する。割合に大形の花で直徑約五輻に及び萼片花瓣共に五個宛を具へてゐる。花蓋は雌雄多雄蓋で、子房は6—8 室を有する。果實は徑五輻内外の球形漿果で、熟すると黄色となり柔毛を被る。原産地は支那である。實生を砧木として廣く利用する。



からたち

4. こくてう *Chenopis atrata*

黑鷄 游禽類

くろスワン(Black swan)といふ。南部濠太刺利亞タスマニアの原産であるが、現今では各地に飼養せられてゐる。羽の色は黒色、風切羽のみ白色頭部の裸出部、嘴の基部の皮膚部は赤色である。大きさは、はくてう(Swan)大である。

5. 五重塔

起原、釋迦以前に存したといふ。然し佛教塔は佛舍利に對して建てられた佛塔を以つて塔婆の嚆矢とする。

構造 覆鉢塔、屋塔、露塔、龕塔、柱塔、無縫塔、相輪塔、雁塔、重層塔、及び密家所傳の五輪塔がある。重層塔には三重、五重、七重、九重、十三重がある。

日本の塔 日本の塔の現存してゐるものは法隆寺の五重の塔が最も古い。法起寺法輪寺の三重塔はこれに次ぐ。何れも飛鳥時代の様式を有してゐる。奈良時代前期では、藥師寺東園海龍王寺五重小塔、奈良時代後期では當麻寺東西兩三重塔、平安朝前期では寶生寺五重

塔、同後期では醍醐寺五重塔、鎌倉時代に屬するものでは、海龍王寺五重塔、興福寺三重塔、石山寺多寶塔、高野山金剛三昧院多寶塔など多數にある。猿澤池にうつる興福寺の五重塔や京都東山に風情を添へる法觀寺五重塔(八坂塔)は室町時代のものである。



法隆寺五重塔

6. 作家小傳

杉浦非水氏

明治九年五月松山市松前町に生れ、本名を朝武と呼び、非水はその號である。初め川端玉章氏に就いて日本畫を學び、後黒田清輝氏に洋畫の技を習はれた。更に東京美術學校に入つて明治三十四年日本畫科を卒業された。

卒業後約一ケ年程島根縣濱田中學校に教鞭を執られた。其の後間もなく三越呉服店に入つて圖案部主任となり、服飾其の他の圖案をはじめ、同店より出す三越カタログ及び同店のポスター等に麗筆を揮はれた。

独自の圖案様式を創案し、「非水式」と誰いふとなく一つの名稱さへも生じ、圖案界に一新紀元を劃した。明治四十五年の中澤弘光、山本森之助、三宅克己氏等と光風會を興し、純美術方面にも活躍せられた。大正十一年歐洲に遊び、十三年歸朝された。

大正十四年七人社なる圖案研究團體を組織して之れを主宰し、十五年東京三越に於て第一回創作ポスター展覽會を開催し、その種の展覽會の嚆矢を作つた。創作せられた圖案を集めて「非水圖案集」「非水創作圖案集」「非水花鳥圖案集」として逐次刊行せられた。尚渡邊素舟氏との共著「圖案の美學」と稱する好著がある。又同氏と共編になる「實用圖案資料大成」十冊が作られてゐる。

現に光風會々員、多摩帝國美術學校長として後進者の指導教養に専念せられ、令夫人翠子女史は閑秀歌人として夙に世に知られてゐる。

〔住所〕 東京市澁谷區伊達町一七

第三十一圖 文房具その他 鈴木豊次郎

1. 電気スタンド Stand

移動式電燈照明器ともいふべきもので、附屬せるコードの長さだけ、自由に移動照明し得、ソケットは心棒にゴム栓が付いてゐて、スタンドベースに自由に挿込むことが出来、横からコードが出てその末端に挿込み螺子型のプラグを附す。シェードは針金のフレームで、形は好みに従つて大小雑多の形がある。パーチメント紙を絹の撚糸で綴合せたり、上下の邊は飾りテープをつけて、色糸で縫ひつけるもので、全く各人の好みにより選擇す。

用途から區別するとフロアスタンド (Floor Stand) テーブルスタンド (Table Stand) その他自由付スタンド等がある。

フロアスタンドは室内の床の上に置き點燈するもので、普通光源は1米乃至1.2米の所に置く。これには一般照明及び、局部照明を與へる二種がある。主體部分は木製と金屬製の二種があり、金屬製は眞鍮鑄物の織ぎ合せ、眞鍮パイプと鑄物との組合せ、眞鍮パイプとアンチモニーとの組合せで出来てゐる。又この種の照明では絹の襲取り仕上げであつて、白色紙或はクリーム色の裏をつけるが、表の絹は上等品で二枚を重ねて用ひることが多い。色はオールドローズとか、裏華色が最もよく、室内の調和を與へる。概ね應接室、談話室、サンルーム、ヴェランダ等に用ゐる。

2. ブックエンド

金屬製、木製、大理石製等がある。金屬製のは、多くホーローを上に塗つてある。五十錢位からある。木製のは「ならの木」を用ひてある。

3. 置時計

置時計は裝飾と實用とを兼ねたもので、机上、床脇、飾棚其の他に置く。金屬製、大理石製、ガラス製を普通とする。形状は多種多様であるが最近の流行による形は大理石の幾何的裝飾のものが多し。

4. インクスタンド

材料は主として、ガラス製、陶器、眞鍮、ニッケル、アンチモニー、エボナイト等である。インク入れも唯一個のと多くは二個とがある。そしてその端にペン挿がついてゐる。ガラスも種々の着色がしてある。蓋は破壊する虞があるから、エボナイト、ニッケル製のものが多し。三十錢位から三圓位まである。東京、大阪製のものが多し。ガラス製のものは名古屋にも製造せられる。形は圓いものと、四角のものが最も多し。

5. 作家小傳

鈴木豊次郎氏

明治三十一年十一月東京市京橋區銀座に生れ大正十三年三月東京美術學校圖案科を卒業された。美術學校在學中大正七年第四回商工省主催の工藝展覽會に出品された。後引きつゞき毎年出品し、第四、第七、第八、第九、第十二回ともに褒狀を授けられた。大正十一年の平和博にも出品して受賞された。現に東京高等工藝學校助教授として子弟の教養に専心せらるる現代の中堅工藝圖案家である。

〔住所〕 東京市蒲田區安方四二六

中學維新圖畫の理論と實際

(實際篇)

昭和十四年十二月二日印刷
昭和十四年十二月五日發行
昭和十六年四月三十日再版發行

(著作権所有)

特價

卷一 金壹圓
卷二 金壹圓
卷三 金壹圓

④

美育振

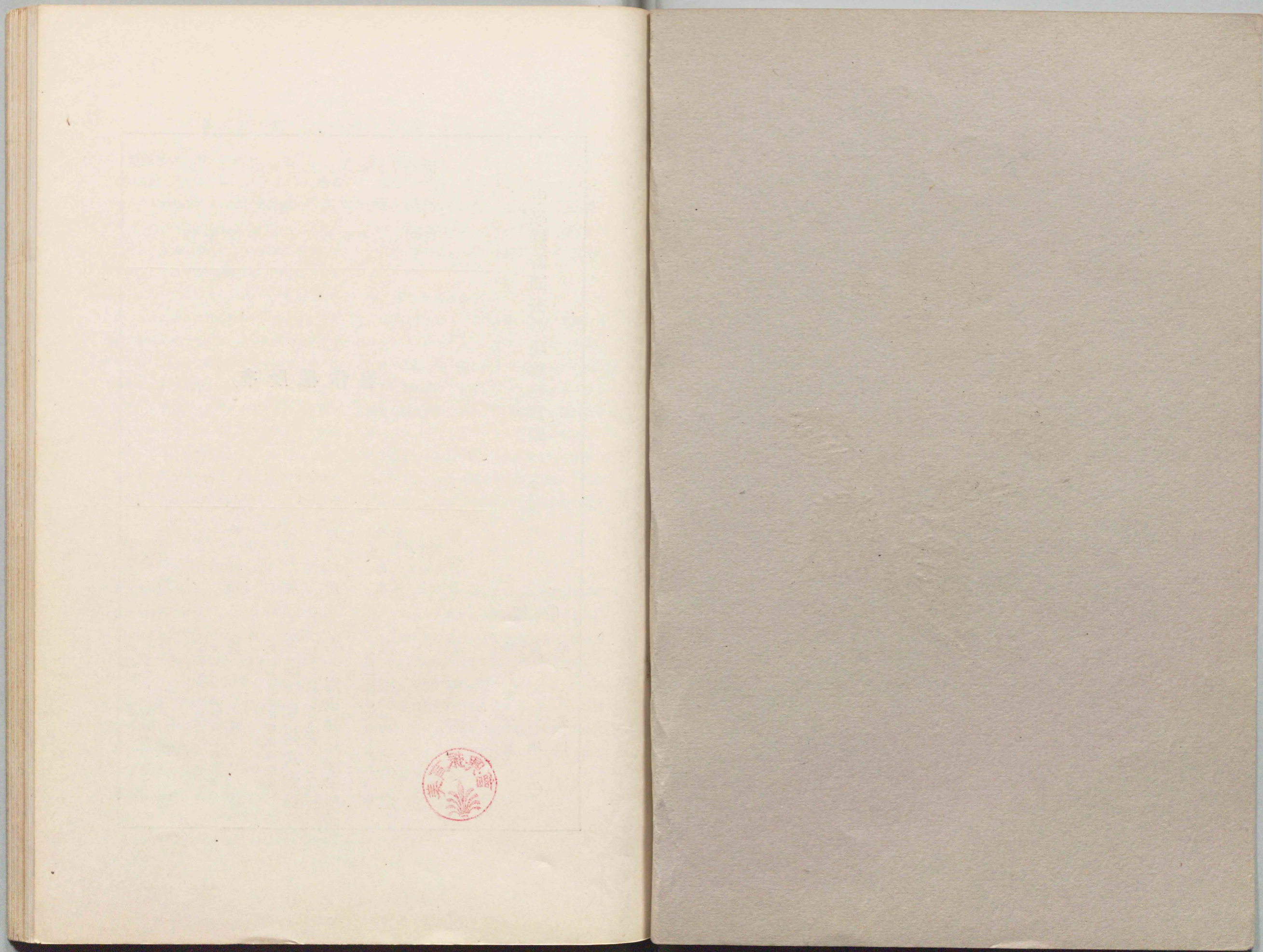
岩田 僊太郎
東京市下谷區櫻木町二番地

三協印刷株式會社
東京市品川區大崎本町三ノ五八二
半七寫眞製版印刷所

晚成處
振替口座東京三三一七三番
東京市下谷區櫻木町二番地

目黒書店
振替口座東京二八〇九番
東京市神田區駿河臺三丁目







y.s.

